長崎県文化財調査報告書　第159集

県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅳ

2001

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第159集

県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅳ

・一野（ひとの）遺跡（有明町）
・桐古里（きりふるさと）遺跡（若松町）

2001

長崎県教育委員会

発刊にあたって

本書は，ふるさと古代遺産保存継承事業に伴って実施した，県内主要遺跡内容確認調査の発掘調査報告書です。

昨年11月24日，本県の壱岐・原の辻遺跡が国の特別史跡に指定されました。特別史跡とは，全国に数ある遺跡のなかでも，国宝クラスの遺跡のことです。

長崎県においては，1982年（昭和57年）に下県郡・美津島町の金田城が特別史跡に指定されて以来のことであり，本県の埋蔵文化財保護行政の推進を図る上で極めて意義深いものであります。

また一方では，公共事業等に伴う緊急調査は増加傾向にあり，文化財保護行政を取りまく環境は決して楽観できる状態ではありません。

事業を円滑に推進するためには，なにより埋蔵文化財包蔵地の広がりをできるだけ正確に把握し，事業者との事前協議の際の基礎資料を作成しておく必要があります。

そのため本県では，平成３年度から県内の重要遺跡の範囲確認調査を，更に平成８年度からは主要遺跡内容確認調査を実施して資料の整備に努めているところであります。

今年度報告する遺跡は，有明町の一野（ひとの）遺跡，若松町の桐古里（きりふるさと）遺跡の調査成果です。

一野遺跡は縄文時代から古墳時代に至る広大な遺跡であり，桐古里遺跡は五島列島における稀少な弥生時代前期の遺跡です。共に，地域における古代文化を生き生きと伝えてくれる貴重な遺跡であることが判明しました。

最後に調査にご協力いただいた皆様にお礼申し上げるとともに，今回の調査成果が学術資料として活用され，文化財の愛護に役立つことを念じて発刊のあいさつといたします。

平成13年３月30日

長崎県教育長

木　村　道　夫

例　　言

1．本書は長崎県教育委員会が平成８年度から実施している県内主要遺跡内容確認調査の結果報告である。

2．本書には，平成11年度調査をおこなった一野（ひとの）遺跡（南高来郡有明町），桐古里（きりふるさと）遺跡（南松浦郡若松町）の結果報告を収録した。

3．本書では各遺跡について分担執筆をした。それぞれの遺跡についての執筆者は以下のとおりである。

一野遺跡　　本田秀樹・中村　幸
桐古里遺跡　　古門雅高・尾上博一

4．詳細は各項の例言を参照されたい。

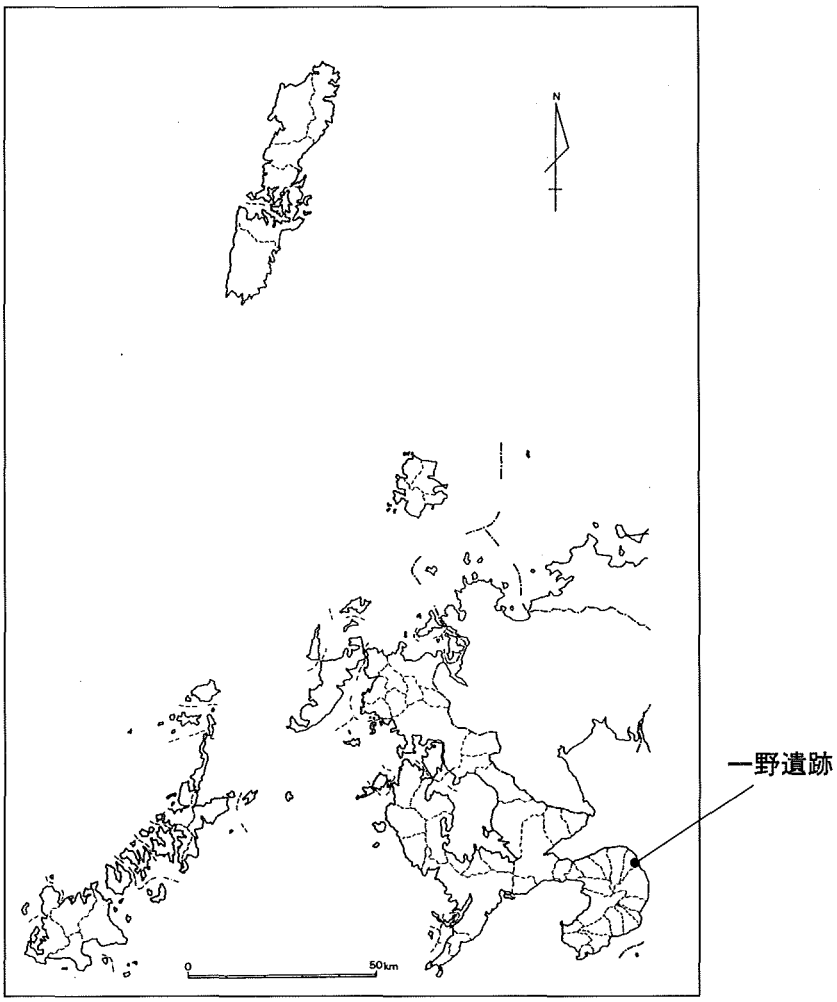
5．本書の総括編集は古門がおこなった。

総　目　次

第Ⅰ部　一野遺跡 …… 1
南高来郡有明町所在
第Ⅰ章　遺跡の立地と環境 …… 4
第Ⅱ章　調査の経緯 …… 7
第Ⅲ章　調査の概要 …… 11
第Ⅳ章　まとめ …… 23

第Ⅱ部　桐古里遺跡 …… 37
南松浦郡若松町所在
第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 40
第Ⅱ章　調査の経緯 …… 44
第Ⅲ章　調査の概要 …… 46
第Ⅳ章　出土遺物 …… 48
第Ⅴ章　ま と め …… 50
第Ⅵ章　長崎県の縄文晩期から弥生前期の土器の様相 …… 54

第 I 部　一野遺跡



遺跡位置図

例　　言

1．本書は南高来郡有明町三之沢名字野田堂ノ前，下野，鼻ノ下に所在する一野遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は長崎県教育庁文化課が事業主体となり，有明町教育委員会の協力を得て，平成11年11月15日から同年12月10日にかけて実施した。

3．調査関係者は次のとおりである。

調査担当	長崎県教育庁文化課	文化財保護主事	本田　秀樹
		文化財調査員	中村　　幸
調査協力	有明町教育委員会	社会教育係長	松本　　正
		主　事　補	宇土　靖之

4．遺構の実測は調査担当者がおこない，一部については本田美由紀・菅　幸也の協力を得た。

5．遺物の実測は近藤慶子・松尾美代子・濱本秀美，トレースは斉藤いづみ・渡辺洋子，拓本については小林利恵子の協力を得た。

6．本書における遺物・写真・図面については長崎県教育庁文化課立山分室で保管している。

7．本書の執筆・編集は本田がおこなった。

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境 …… 4
　第1節　地理的環境 …… 4
　第2節　歴史的環境 …… 6
第Ⅱ章　調査の履歴 …… 7
第Ⅲ章　調査の概要 …… 11
　第1節　調査の経緯と方法 …… 11
　第2節　土層 …… 12
　第3節　遺構 …… 16
　第4節　出土遺物 …… 18
　　第1項　土器 …… 18
　　第2項　石器その他 …… 22
第Ⅳ章　まとめ …… 23

挿　図　目　次

遺跡位置図 …… 1
第1図　一野遺跡と周辺の遺跡位置図（S＝1／25,000） …… 5
第2図　過去の調査地点（S＝1／4,000） …… 7
第3図　一野遺跡検出遺構 …… 8
第4図　一野遺跡出土遺物 …… 9
第5図　試掘壙（TP.）配置図（S＝1／3,000） …… 11
第6図　土層図①（S＝1／40） …… 15
第7図　土層図②（S＝1／40） …… 16
第8図　TP.9集石遺構（S＝1／20） …… 17
第9図　出土遺物①（S＝1／3） …… 19
第10図　出土遺物②（S＝1／3） …… 21
第11図　出土遺物③（S＝1／3） …… 22
第12図　土層柱状図 …… 23
第13図　一野遺跡分布密度（S＝1／3,000） …… 24

表　目　次

表1　一野遺跡と周辺の遺跡一覧 …… 4
表2　土層比較表 …… 12
表3　層位別出土遺物数 …… 13
表4　試掘壙別出土遺物数 …… 22

図　版　目　次

図版1　遺跡遠景（北西から・南から・南東から） …… 29
図版2　土層（TP.3西壁・TP.10南壁・TP.11南壁） …… 30
図版3　TP.9土層（北壁・西壁）と集石遺構 …… 31
図版4　土層（TP.29北壁・TP.31北壁）と遺物出土状況（TP.29） …… 32
図版5　土層（TP.35西壁・TP.36東壁・TP.37東壁） …… 33
図版6　遺物① …… 34
図版7　遺物② …… 35

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

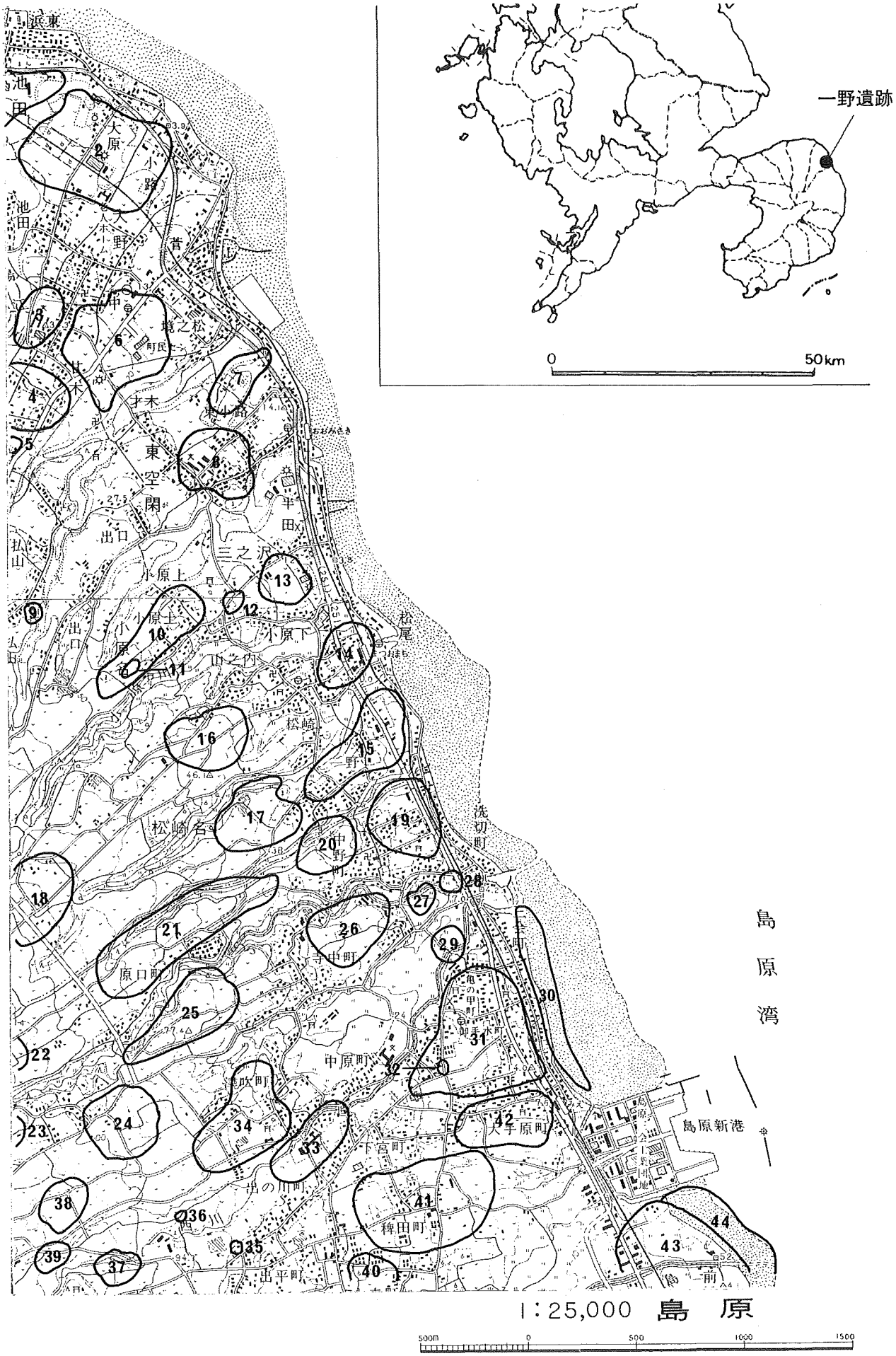
一野遺跡のある有明町は島原半島の北東部に位置する。半島の政治的・経済的中心である島原市の北隣にあたることから，都市化が徐々に進行してきている町である。

町最南端には雲仙火山群のひとつ舞岳（標高703m）があり，そこを頂点に北東方向へは緩やかな火山性扇状地が発達する。町域の地形の大半はこの舞岳に起因するところが大きい。標高300m付近から海岸線までは雲仙火山砕屑岩（竜石層）を基盤とし，海岸付近の段丘上には大三東ローム（註１）が堆積している。大三東ロームはオレンジ色の粘土層で，舞岳の噴出物である火山礫を含むことがあり，厚いところで５mはあるという。

舞岳は水源としても重要であり，町内の小河川はここを起点に有明海へ注ぎ込む。河川の流域には段丘が発達し，海岸部では10mほどの段丘崖となっている。河川沿いには帯状に水田も分布するが面

番号	名　　称	時　　代	所在地	遺　構・遺　物
1	妙法塚遺跡	弥生／古墳	有明町	弥生土器・人骨・鉄鏃
2	中田遺跡	縄文	有明町	御領式土器(一部黒川系)・石斧
3	大野城跡	中世	有明町	
4	甘木遺跡	弥生／古墳	有明町	
5	温泉神社台地遺跡	縄文	有明町	
6	大野原遺跡	縄文／弥生	有明町	
7	東空閑城跡	中世	有明町	磨石(縄文時代か？)
8	才木遺跡	縄文	有明町	
9	拂山横穴古墳	古墳	有明町	
10	小原上遺跡	縄文	有明町	
11	国土神社裏横穴	古墳	有明町	
12	小原下Ｂ地点遺跡	縄文	有明町	
13	小原下遺跡	縄文	有明町	
14	松尾遺跡	古墳／奈良	有明町	土師器・須恵器
15	**一野遺跡**	**縄文／弥生／古墳**	**有明町**	**弥生式土器・須恵器・鉄器**
16	山ノ内遺跡	古墳／奈良	有明町	
17	上一野遺跡	縄文	有明町	山形押型文土器
18	灰ノ久保遺跡	縄文	有明町	押型文土器(付近のレタス畑より)
19	景華園遺跡	弥生	島原市	銅鏡，銅剣，銅鉾，管玉
20	上中野遺跡	弥生／古墳	島原市	弥生土器片，須恵器片，黒曜石剥片
21	原口Ｂ遺跡	弥生／古墳	島原市	弥生土器片
22	原口Ａ遺跡	縄文／弥生	島原市	縄文晩期・弥生土器片
23	長貫Ａ遺跡	旧石器／縄文	島原市	旧石器，縄文晩期土器片，打製石斧，黒曜石製石鏃
24	長貫Ｂ遺跡	縄文／弥生	島原市	
25	寺中Ａ遺跡	弥生	島原市	
26	寺中Ｂ遺跡	弥生／古墳	島原市	弥生土器片，土師質土器片，黒曜石剥片
27	寺中城跡	中世	島原市	布目瓦，土師質土器
28	中野川遺跡	弥生	島原市	
29	西川遺跡	弥生	島原市	
30	三会下町海中遺跡	縄文／弥生	島原市	
31	畑中遺跡	弥生	島原市	弥生（中期）土器片，土師質土器片，鉄鉾，黒曜石剥片
32	大塚古墳	古墳	島原市	
33	三会中学校遺跡	縄文	島原市	縄文晩期土器片
34	津吹遺跡	縄文／弥生	島原市	縄文晩期・弥生土器片
35	鬼の家古墳	古墳	島原市	黒曜石剥片，須恵器片
36	人塚古墳	古墳	島原市	
37	大塚下遺跡	中世	島原市	土師質土器片
38	南楠沢遺跡	弥生	島原市	弥生土器，サヌカイト，黒曜石剥片，砥石
39	大塚後遺跡	縄文	島原市	縄文晩期土器片，サヌカイト剥片，チャート石核
40	山崎遺跡	弥生／古墳	島原市	土師質土器片
41	稗田原遺跡	縄文／弥生／近世	島原市	縄文晩期土器片，白磁片
42	下宮遺跡	縄文／弥生／近世	島原市	晩期土器，土師質土器，サヌカイト剥片，黒曜石剥片
43	沖田遺跡	弥生／古墳	島原市	
44	沖田海中遺跡	弥生／古墳	島原市	

表１　一野遺跡と周辺の遺跡一覧



第１図　一野遺跡と周辺の遺跡位置図

積は狭く，むしろ丘陵上に堆積した黒ボクとよばれる黒色火山灰土壌で行う畑作が盛んである。特に礫石原山麓末端の湯江川から金洗川にかけての丘陵は，肥沃な畑作地帯として活発に利用されてきた。

遺跡が立地するのもほとんどが丘陵上で，一野遺跡もその類に漏れない。小河川が丘陵を放射状に細長く刻むことで，この地域の多くの独立低丘陵は形成されてきた。そのことは遺跡の横の広がりを規制するがゆえに拠点集落への発達を阻害したともいえるが，それぞれが一定の間隔を保ちながら，よい緊張関係の下に独自の発展を遂げてきたとみることもできよう。

一野遺跡は火山性扇状地の先端部，江川と金洗川で開析された低平な段丘上に立地する。標高は14～24mほどで，有明海に面した東側は比高差約10mの段丘崖となっている。砂礫が堆積する小浜堤の海岸線までは指呼の距離にある。

第2節　歴史的環境（第1図，表1）

有明町内にはこれまで38か所の遺跡が確認されている。なかでも縄文時代の遺跡数はのべ19と最も多く，全体の約4割を占める。次いで古墳時代，弥生時代の順となる。町境にある一野遺跡の歴史的環境を考えるには，隣接する島原市北部の一帯をも視野に入れて検討する必要があろう。

旧石器時代の遺跡はナイフ形石器が表採されている本遺跡や細石核が出土した中田遺跡（2）のほか，島原市長貫A遺跡（23）があげられる程度で，ほとんど知られていない。

縄文時代の遺跡は島原半島で160か所ほど知られている。押型文土器を中心とした早期の遺跡は一般的に高位に分布する傾向が指摘されるが，上一野遺跡（17）や灰ノ久保遺跡（18）など一野遺跡と同一の低丘陵上に占地する事例もある。円筒形条痕文土器が出土しているのは本遺跡の他，島原市畑中遺跡（村川編1994）・同市稗田原遺跡（村川編1997，川口編1999）・布津町大崎鼻遺跡・同町飯野遺跡（註2）などで，「大村～諫早・島原半島の範囲に限定されており，他の地域での出土例はない。」（渡邊1999）といわれている。縄文前期から後期前半には島原市三会下町遺跡（30）のように漁撈活動との関わりから海岸部に遺跡が立地する。後期後半期の西平式・三万田式・御領式になると遺跡は海浜から低台地へ移動し，遺跡も増えてくる。有明町内でも中田遺跡（2）・大野原遺跡（6）・小原下遺跡（13）などこの時期を主体とする遺跡が多く，晩期前半までこのような状況は窺える。突帯文土器直前の段階から弥生前期にかけて事態は一変し，遺跡の解体や規模の縮小がみられる。弥生中期以降，島原半島域は北部九州と密接な繋がりをもつ景華園遺跡（19）を中心に統合されたと推察され（宮崎1998），古墳時代には規模を減退させながら一野遺跡に受け継がれていったとも考えられよう。

本遺跡では古墳時代の住居跡は知られていないものの，近年の調査で5世紀代の石棺系石室や竪穴系横口式石室が発見されている。8・9世紀にかけては一野遺跡と川を隔てて隣接する松尾遺跡（14）があるが，遺跡の変遷をたどるためには今後の調査や考古資料の増加に期待するところが大きい。

【註】

（註1）　布津町大崎にも同ロームの堆積がみられる。1999年に県文化課が行った大崎鼻遺跡の試掘調査でも大三東ロームの存在が確認され，上層の黄褐色土層からは一野式の円筒系貝殻条痕文土器が出土した。

（註2）　飯野遺跡は県文化課の試掘調査で出土が報告されている。福田一志氏，渡邊康行氏より御教示。

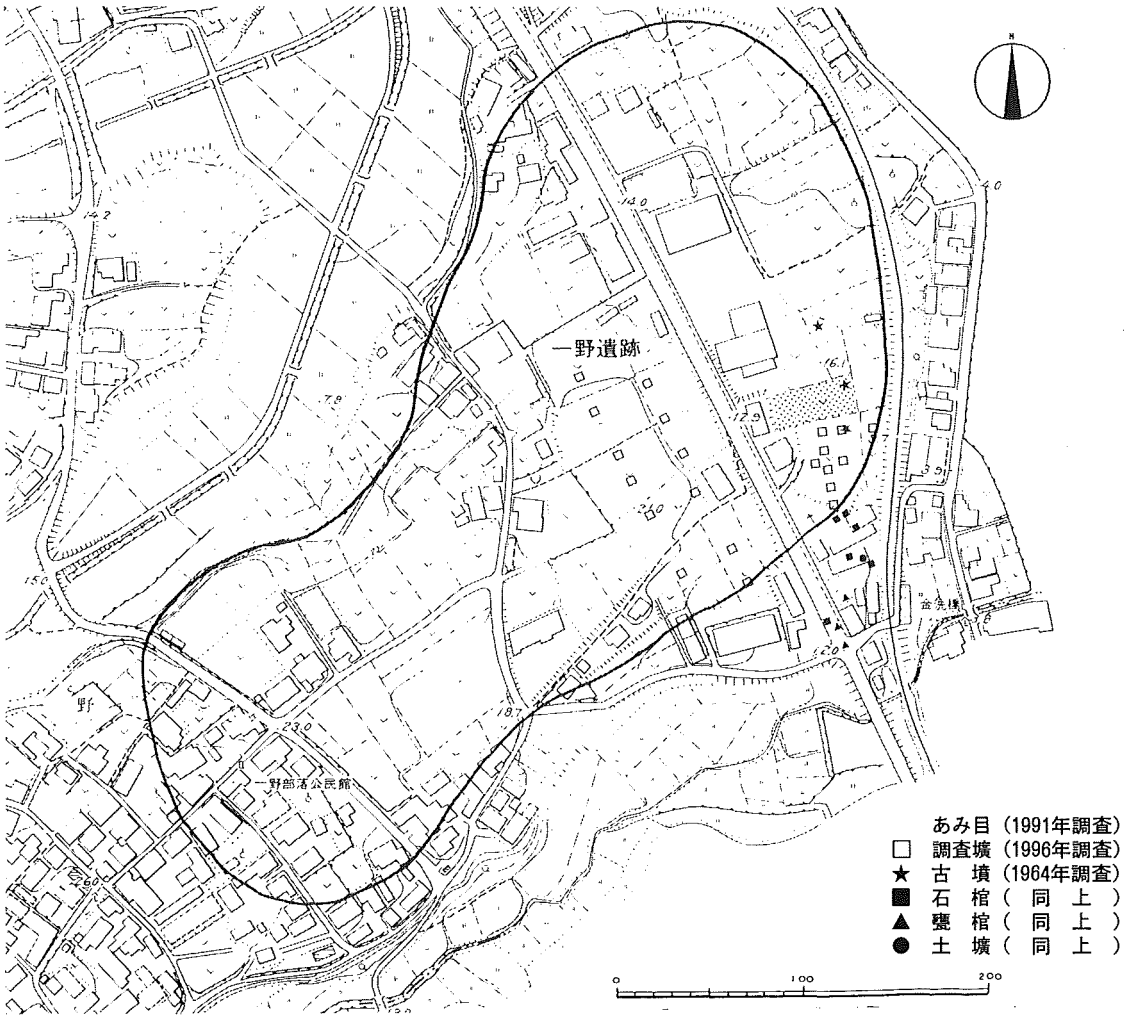
第Ⅱ章　調査の履歴

一野遺跡等の立地する低丘陵の先端部は古くから格好の生活の場であり，最も積極的に土地利用がなされてきた。一方，島原半島を有明海沿いに移動するには必ずこれらの丘陵を横断しなければならず，交通の利便性を考えると丘陵の存在は支障となっていた。このように開発の波は遺跡の集中する丘陵に押し寄せ，ここかしこで人知れず遺跡の破壊が行われるようになった。

一野遺跡の存在についても以前から知られており，遺物発見の報告は多々ある。大正初期の島原鉄道敷設工事の際（初村・内村・古田1960），遺跡の南東側で石棺とともに鏡・鉄器・土器類が出土したと伝えられ（註１），昭和27年には九州毛織工場建設予定地（初村・内村・古田1960）からも２～３基の箱式石棺が発見されている（註２）。

実際に遺構や遺物について克明な記録が残されるようになったのは昭和34年以降で，島原市在住の古田正隆の業績によるところが大きい。

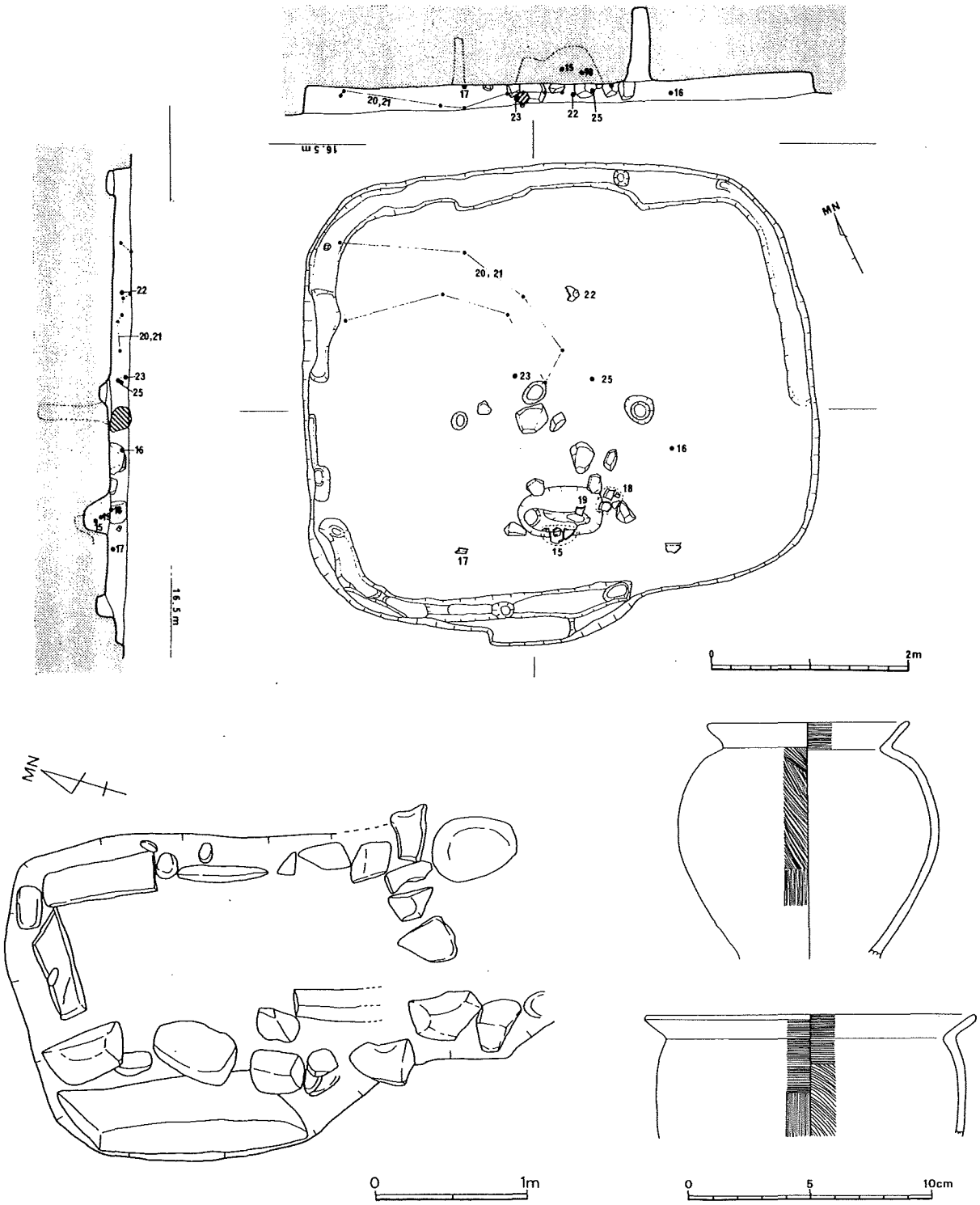
昭和34年には国道251号線建設工事で（初村・内村・古田1960），甕棺２基と箱式石棺１基が見つかっている（註３）。甕棺は１基が弥生中期の須玖式段階のもので，もう１基は４世紀末～５世紀初め頃



第２図　過去の調査地点（S＝1／4,000）

のものとされている。石棺は砂岩質の割石を利用したもので，直刀や刀子・鉄鏃・轡などの鉄器と土器が副葬されていたという。時期は７世紀頃に比定されている。この他，弥生～古墳時代の土器は多数出土している。

昭和38年には国道沿いの民家造成に伴い（古田1964），甕棺１基・石棺４基・土壙１基が発見された（註４）。甕棺は弥生後期のもので，出土状況は不明。石棺はほとんどが石材を取り除かれ状況不



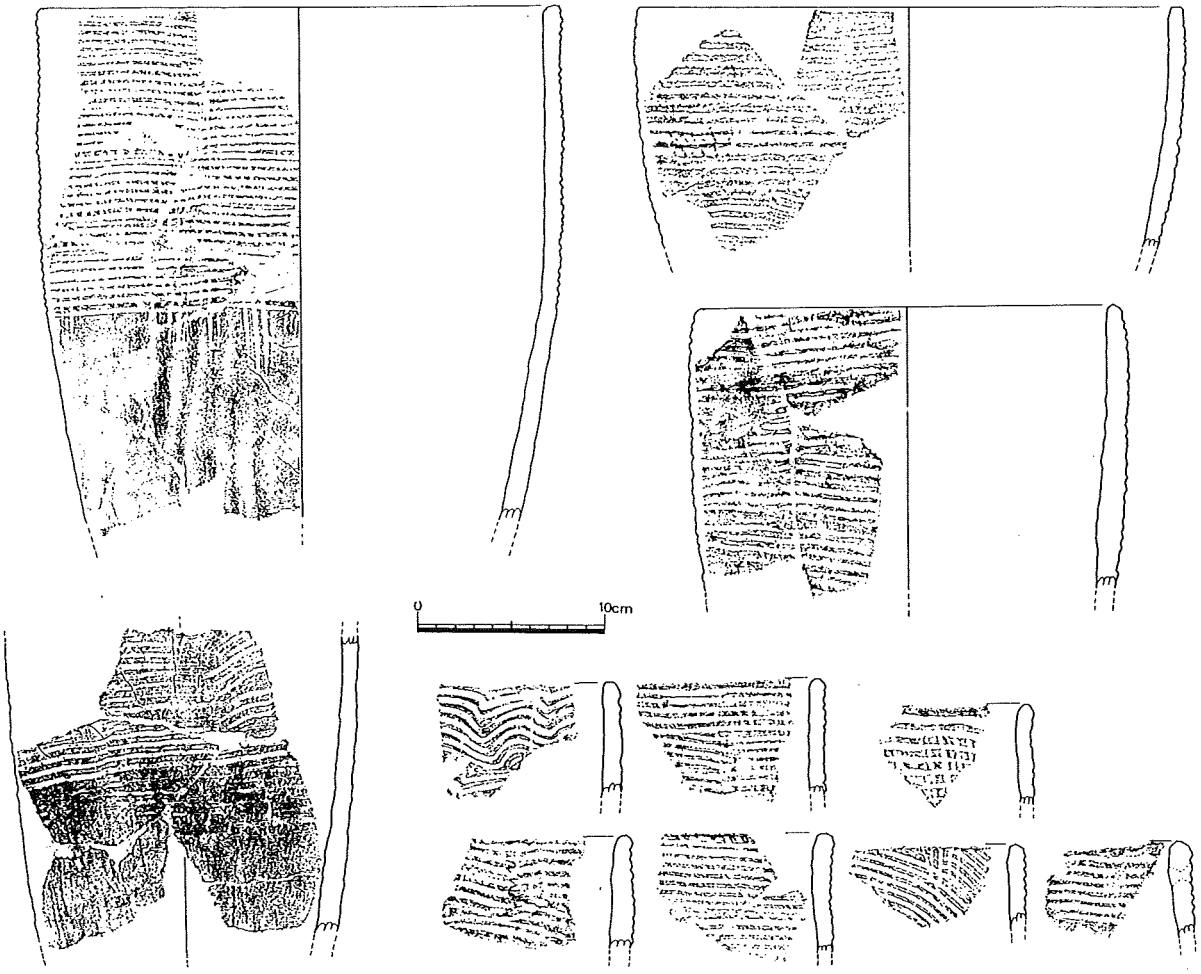
第３図　一野遺跡検出遺構
上・右　２号住居跡（S＝1／50）と出土土器（S＝1／15）（浦田1992より転載）
下・左　石室（S＝1／40）（川道1996より転載）

明なものが多い。大半は板状石と自然石を組み合わせたものと考えられ，７世紀代に比定されている。いずれも副葬品は確認されておらず，鉄器を副葬した可能性のあるものが１基ある。土壙は直径１ｍほどの円形で，弥生中期の壺などが出土しているという。

昭和52年は農作業中（副島編1987）に古墳の石室の一部が露出した（註５）。石室の半分ほどは掘り下げられ，石材も取り除かれている状態であったが，石棺系石室の範疇に入るものと推測されている。床面は玉石を敷き詰めていたことが観察され，人骨片や鉄片・須恵器等も混在していたという。当地はこれ以前にもブルドーザーで削平されており，石室の一部は破壊されていた可能性が高い。協議の結果，実測図等の記録的処置は施さず，現状のまま埋め戻して保存することとなった。

一野遺跡の正式な発掘調査が行われたのはつい十年前のことである（第２図）。国道沿いの食品倉庫建設工事申請が事前に把握され，平成３年に緊急発掘調査が実施された（浦田編1992）。調査では住居跡２基・石棺１基・集石遺構４基・土壙３基・砂の入った土壙状遺構６基が見つかった。

住居跡はいずれも４ｍ×５ｍ前後の隅丸方形をなし，出土遺物から弥生後期前葉に比定されている（第３図）。石棺は東半分を欠失するものの，自然石を利用して構築されている。棺床には粗い砂を敷いた痕跡もみとめられ，栗石があった可能性を指摘する。これらの報告は過去の事例とも共通し，記述内容を裏付ける結果となった。石棺は須恵器を伴っていたが，時期を特定するには至ってない。



第４図　一野遺跡出土遺物（浦田1992より転載）

集石遺構はどれも１m内外の範囲に拳大の小礫を配するものである。遺構が検出された４層は主に「一野式」（水ノ江1998）と称される円筒形条痕文土器を包含することから，縄文早期頃と考えられている（第４図)。中に砂を充填した不定形遺構はその４層上面から掘り込まれており，土壙内からは縄文中～後期の土器がまとまって出土している。調査区全体では土師器や瓦質土器等も出土し，時期的には縄文早期から中世まで及ぶ複合遺跡であることがこの時の調査で判明した。

平成７年にはやはり国道沿いで建設資材置場や駐車場造成を目的とした工事申請が出され，これをうけて平成８年に当該地の範囲確認調査（川道1996）が実施された（註６)。その結果，国道西側に設定した試掘壙の大半でゴボウ栽培のトレンチャーによる撹乱がみられ，一部を除き遺構・遺物は確認できなかったのに対し，逆に国道東側ではほとんどの試掘壙で遺物が出土し，ピットや古墳も見つかっている。

古墳は上部を破壊され，根石部分しか原形をとどめない（第３図)。当初，横穴式石室との報告がなされていたが，平成12年に有明町が実施した調査で５世紀後半～６世紀初頭の竪穴系横口式石室であることが明らかになった（註７)。この他，噴砂と思われる痕跡が試掘壙の数ヶ所で確認され，平成３年に砂遺構とされたものが液状化現象による可能性もある。

【註】

（註１）　この場所は一野遺跡の南に隣接する別丘陵の先端部にあたり，本来は景華園遺跡の範疇に入るものである。

（註２）　ここは一野遺跡の丘陵北側にあたる。

（註３）　ブルドーザーによる排土除去中に発見されたため，出土状況等不明な部分が多い。

（註４）　詳細な記録処置がなされないまま工事中に破壊されており，報告は古田氏の見聞により知得されたものの覚え書きとなっている。

（註５）　この時は現地踏査と周辺の地形測量のみ行われ，遺構の解明は今後の調査にゆだねることとなったが，分布調査と測量から遺跡範囲を明示し，周知化が図られた意義は大きい。

（註６）　調査は国道をはさんで大きく東西に調査区を設定して行われ，これまで手つかずであった国道西側の状況が新たな知見として加わった。

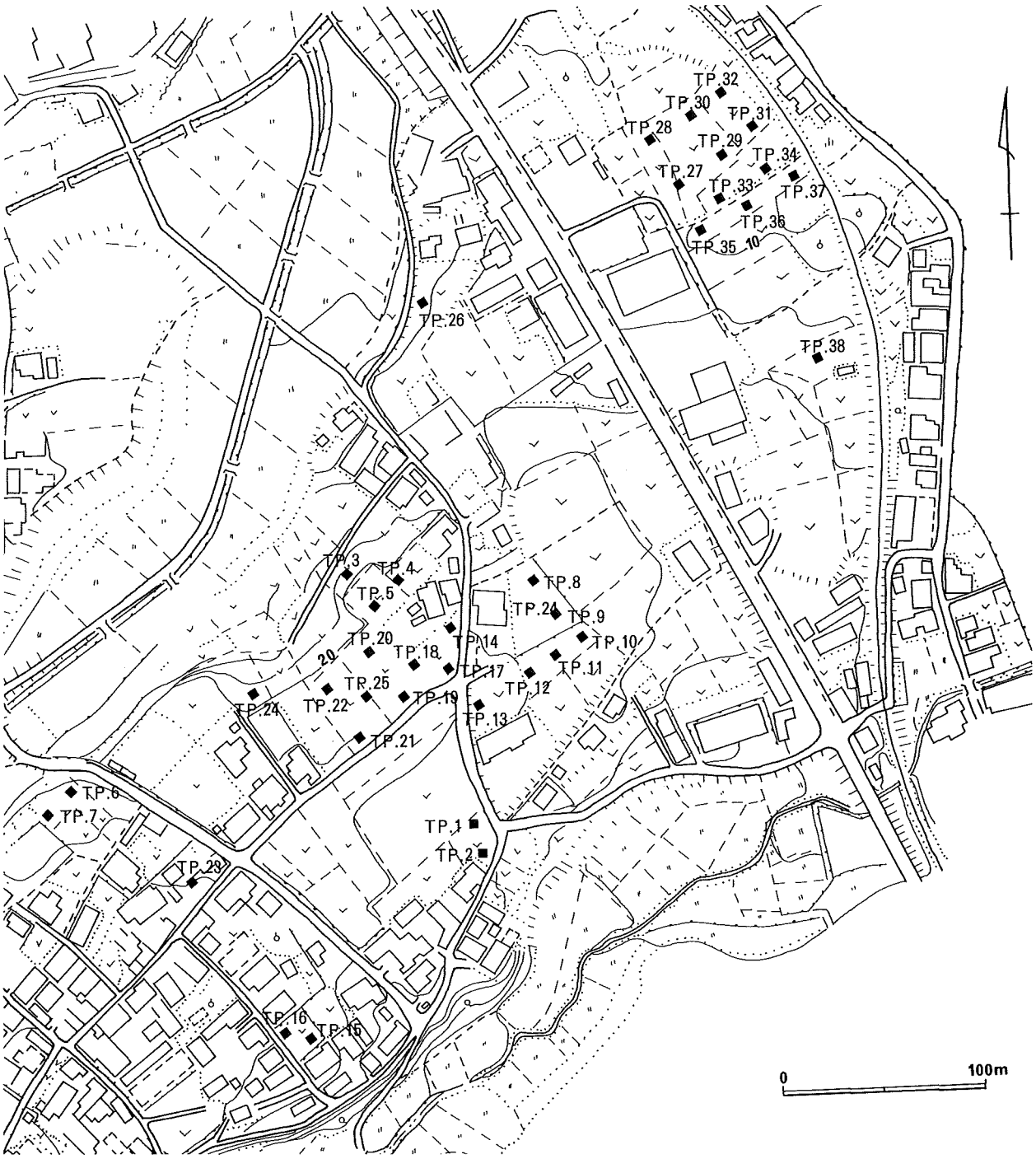
（註７）　筆者も現地を訪れ，遺構を実見した。平成12年度中には有明町教育委員会より報告書が刊行される予定で，正式な報告はそちらにゆだねたい。

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の経緯と方法

長崎県教育委員会は県内重要遺跡155箇所について，遺跡の現状および内容を新たに確認することを目的とする調査を平成３年度から実施してきた。平成８年度からは事業名称を県内主要遺跡内容確認調査と改め，同目的の調査を継続している。現在，これらの調査成果は諸開発事業との協議や連絡調整のための基礎資料として利用され，遺跡保存や計画変更等で重要な意義をもちつつある。

本年度は桐古里遺跡（若松町）と一野遺跡が対象となった。特に本遺跡の場合，前述したように遺



第５図　試掘壙（TP）配置図（S＝1／3,000）

跡中心部を国道251号線が縦貫しているため，道路に隣接する場所では各種の開発行為が跡を絶たない。また，周辺域での宅地化は確実に進行してきており，将来的に大規模な造成や道路拡幅の計画があがってくることも懸念される。遺跡の周知化には努めているが，無届けのまま遺跡が壊滅されることも危惧され，今回の調査の運びとなった。

遺跡はこれまで国道の南東部を中心に遺構や遺物が報告され，本発掘調査や範囲確認調査もその周辺で実施されてきた。実際の遺跡範囲は南北200m×東西450mの約90,000㎡に広がるものと推測されており，今回は内容確認もさることながら，現状での遺跡範囲の特定と遺物包含層の遺存状況を把握する目的で調査を行った。試掘壙の設定は地権者の承諾が得られた場所に限られたものの，未調査であった丘陵の北側や南西側の土層状態が確認され，新たな知見に加わったことは大きい。

調査は2m四方の試掘壙（以下，TP.と記す）を総計38箇所設定して実施した（第5図）。ただし，TP.9は集石遺構検出のため，試掘壙を3m四方まで拡張した。国道東側では丘陵北部を中心に12箇所，西側では尾根筋を中心に26箇所設定し，遺跡範囲を網羅できるよう努めた。なお，発掘承諾を得られた場所から逐次調査をすすめていったため，試掘壙の番号は順不同となっている。

表2　※1　川道　寛1996　「一野遺跡」国庫補助事業に係る有明町内遺跡範囲確認調査結果報告
※2　浦田和彦編1992『一野遺跡』　有明町文化財調査報告書第11集　長崎県有明町教育委員会
※3　古田正隆1964　「一野遺跡」（南高来郡有明町）長崎県南高来郡有明町教育委員会

第2節　土層

	今回の調査	川道1996(※1)	浦田1992（※2）	古田1964（※3）
1 層	黒褐色土層（表土）	黒褐色土層（表土。粘性に乏しくサラサラしている）	褐色砂質土層（撹乱）	黒褐色土層（表土・耕作土）
2 層	暗褐色土層	暗褐色土層	暗褐色砂質土層（撹乱で，縄文～中世まで混在）	褐色砂質土層
3 層	黒色土層	黒色土層（黒ボクとよばれる火山灰。締まりがなくサラサラしている。土師器が出土）	黒色砂質土層（弥生から中世の遺物包含層）	黒色火山灰土層
4 層	黄褐色土層（サラサラしている）	黄色土層（若干締まりがある。百花台Ⅱ層に比定）	明褐色粘砂土層（縄文時代の遺物包含層）	褐色砂混土層
5 層	暗褐色土層（締まりがよく，若干粘りがある）	暗褐色土層（若干粘性があり，締まりがある。微量の白色粒子を含む）	茶褐色粘砂土層（無遺物層で，下層になると淡黄色の硬いブロック状土塊を含む）	灰黒土層
6 層	淡黄色土層（しまりがよい。安山岩風化礫含む）			
7 層	暗茶褐色土層（カシノミ層）			
8 層	赤黄褐色粘質土層（大三東ローム層）		オレンジ色（大三東ローム）	褐色粘土層

表2　土層比較表

土層は概ね次の８層に分けられる。

１層は黒褐色土層の耕作土である。耕作時の撹乱で遺物が混入する。１層は平均すると60cmほどであるが，場所によっては80cm以上堆積しているところもあった。

２層は暗褐色土層で，国道西側の丘陵周縁部にしかみられない。現在，畑地として利用されている場所には２層はなく，代わりに１層が厚く堆積している。遺物は少なく，撹乱で混入する程度である。２層を欠く畑地では遺物を包含する３～４層まで耕作が及ぶせいか，地表面で遺物が採集できる。

３層は黒色土層で，縄文から中世の遺物包含層である。通称「黒ボク」とよばれるこの火山灰層はほぼ全域でみられ，下層になるにつれて黒色は薄れてくる。近隣の島原市畑中遺跡（村川編1994）や稗田原遺跡（村川編1997，同1998，川口編1999，同2000）では分層が可能で，上層を中世，下層を縄文晩期～古代の遺物包含層としている。

４層はサラサラした黄褐色土層で，縄文時代の遺物包含層である。条痕文や押型文，一野式と称される土器等が出土し，集石遺構も検出された。前出の稗田原遺跡ではアカホヤ火山灰はこの層から確認されている。TP.31では４層に噴砂現象を思わせる淡青灰色砂の混入がみられた（註１）。過去の調査事例と照合すると，砂の堆積層がみられるのは国道東側の丘陵先端部付近に限定されるようである。

遺物が出土するのはこの４層までで，基本的には３層と４層に遺物包含層がみとめられる。国道西側の試掘壙ではゴボウ作付けのトレンチャー痕が６層付近まで達し，３～４層はブロック的にしか確認できないところもあった。畑地として利用されている広い範囲で深耕による撹乱が地中深くまで及び，包含層の遺存状態はあまり良好とはいえない。

５層は暗褐色土層で，締まりがよく若干粘性がある。基本的に無遺物層か。上の４層や下の６層がブロック的に混在する様相をみせる。

６層は安山岩風化礫を含む淡黄色土層である。ただし，６層を明確に層として把握できるのは国道西側のみで，東側ではほとんどみることはない。

７層は通称「カシノミ層」とよばれる暗茶褐色土層である。

８層は赤黄褐色粘質土の大三東ローム層である。

今回の土層をこれまでの調査のものと比較対照してみると表２のようになろう。各層ともわずかな

	縄文土器		弥生土器		土師・須恵		中　世		近　世		鉄製品等		合　計	
１　層	40	5.0%	165	20.5%	48	6.0%	10	1.2%	78	9.7%	3	0.4%	344	42.7%
２　層	9	1.1%	5	0.6%	3	0.4%	0	0.0%	16	2.0%	0	0.0%	33	4.1%
３　層	59	7.3%	144	17.9%	89	11.1%	13	1.6%	47	5.8%	4	0.5%	356	44.2%
４　層	44	5.5%	21	2.6%	4	0.5%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	70	8.7%
５　層	2	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.2%
６　層	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
７　層	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
８　層	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
合　計	154	19.1%	335	41.6%	144	17.9%	23	2.9%	142	17.6%	7	0.9%	805	100.0%

表３　層位別出土遺物数

土色の違いこそあれ，ほぼ4層までは共通する。5層については4層の範疇でとらえるような記載もあるが，基本的には平成3年の調査報告（浦田編1992）に従っている。6層は主に国道西側でみられるもので，これまでとは調査地点を異にすることから新たに加わった。7・8層については調査深度によるところが大きく，特に混乱はないものと考える。

表3は今回の調査で出土した遺物の点数を層位別にあらわしたものである（註2）。これをみると1層と3層に遺物が偏在することが窺えるが，前述したように1層では弥生期以降の遺物の占める割合が高いことから，主に3層上層を撹乱した遺物が出土したといってよい。3層は縄文晩期～中世の遺物包含層で，近世の混入は1層からのものであろう。4層は若干弥生土器の混入はあるものの，縄文早期を主体とした遺物包含層である。縄文中～後期の遺物が数点出土しているのは砂遺構との関連を考えたほうがよさそうである。5層は無遺物層であり，遺物は4層からの混入と考えられる。

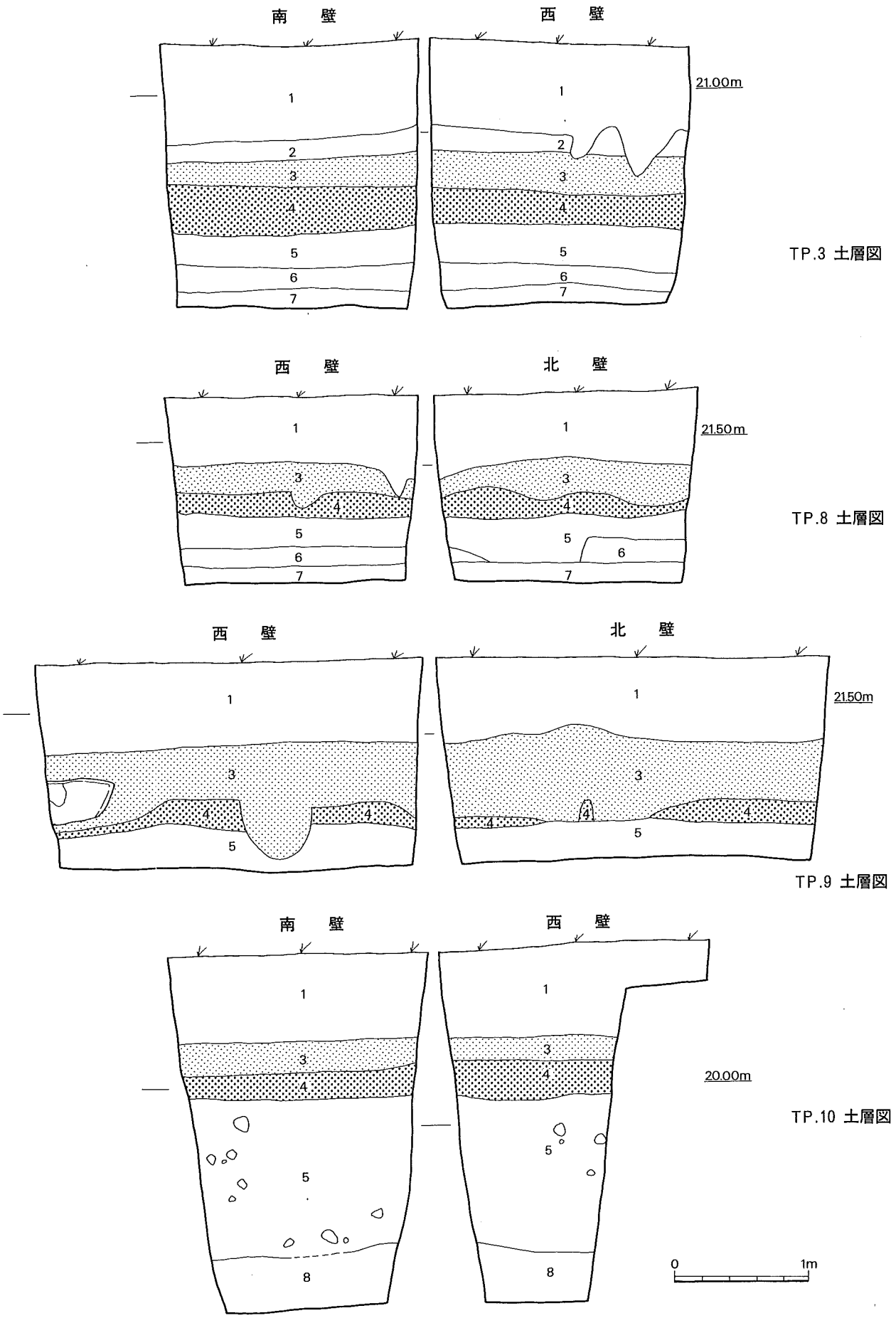
ここでいくつかの試掘壙の土層状況について言及しておきたい。第6図は国道西側にある試掘壙の土層である。TP.3は複数の土層がほぼ整層状態で堆積し，残存状況も比較的良好なことから，調査の基本土層はここを基準に考えた。TP.8・9・10のように国道側に近づくと2層は失われ，5層以下がやや厚みを増す。3・4層に遺物を包含する割合は高くなる。TP.9西壁で4層をきるような掘り込みがみられるが，平面ではほとんどピットらしきものは確認できず，遺構と判断するには躊躇した。TP.10では5層部分がかなり厚く，6・7層はみられなかった。

第7図は国道東側に設けた試掘壙の土層である。丘陵先端部付近の各段丘ごとの状況を示しており，比高差は最大4mはある。TP.29・31で特徴的なのは土層内に砂が混入することで，特にTP.31は顕著である。4層に淡青灰色砂が薄い筋状をなして堆積する状況を図中の破線で示した。一部に7層のカシノミ層がブロック状に混在するところもあり，土層を複雑にしている。3層に砂が及ばないことは過去の事例からも明らかで，この堆積が縄文晩期を遡ることは間違いない。TP.37は最も標高の低いところに設けた試掘壙であるが，ここでも3・4層の遺物包含層は確認できることから，丘陵下も遺跡範囲と考えた方がよさそうである。

【註】

（註1）　平成3年の調査に縄文中期～後期の土器を出土した砂遺構がある。この遺構は液状化によるものと考えられているが，砂の堆積層がどこにあるのか明確には把握できていない。稗田原遺跡では4層（一野3層）と5層（一野4層）の間に約4,000年前とされる青灰色砂層があり，六ツ木火砕流に比定されている。噴砂ではないが時期的に近似していて興味深い。

（註2）　黒曜石やサヌカイトの剥片類は表3では取り扱わなかった。



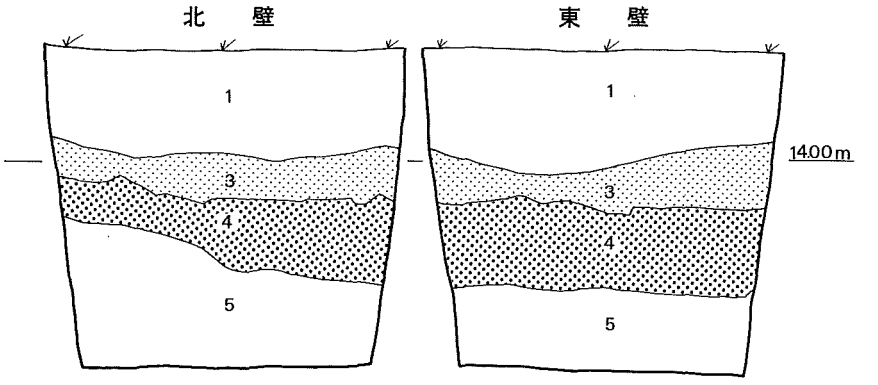
第6図　土層図①（S＝1／40）

第3節　遺構

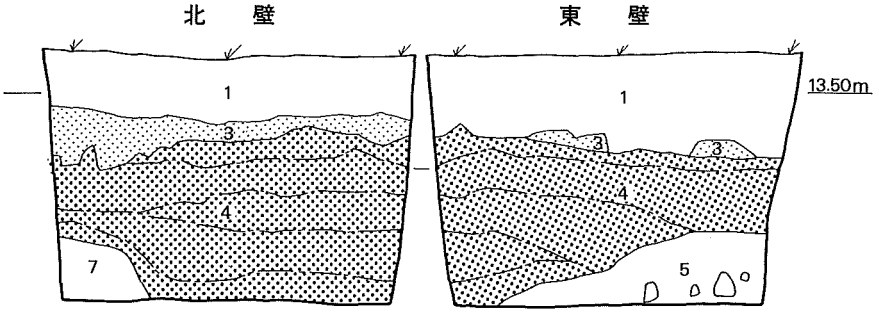
遺跡範囲と内容確認を調査の主目的としたため，各試掘壙とも面積は4㎡と狭く，遺構発見時に拡張する方法をとった。その結果，TP.9で集石遺構1基を検出した（第8図）。

集石遺構が検出されたのは4層中位付近からで，平面プランは径1mほどの不整円形をなす。外側に人頭大の石を配し，内側には拳大くらいの石を重ねていた。石は40cmほどの厚さに積まれており，石材は地元の黒雲母角閃石安山岩を用いる。

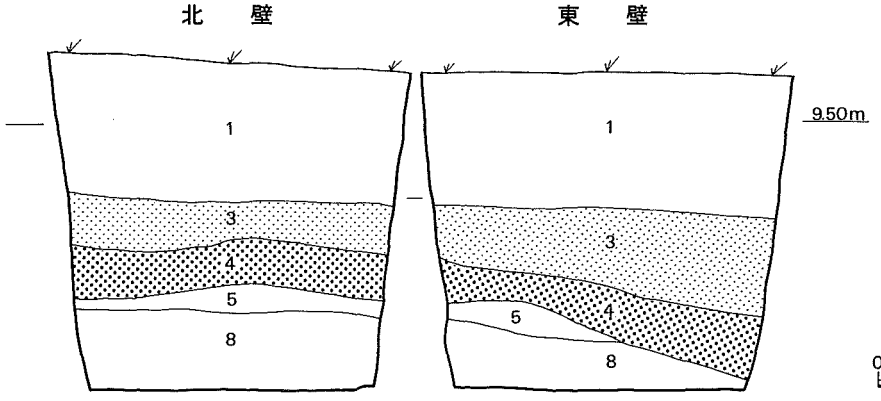
石が充填されていたところの土は締まりがなく，掘り込みがあったと判断した。しかしながら土質を異にするだけで周囲との土色差はほとんどみとめられず，掘り方についても不確実な部分が多い。4層下層～5層にかけて掘り込まれた土壙は長径約1m×短径0.7m×深さ0.3～0.4mを測る不整形なもので，基底部も凹凸があって斉一ではない。結果として，集石遺構の下部構造については明確に把握できなかった。



TP.29 土層図



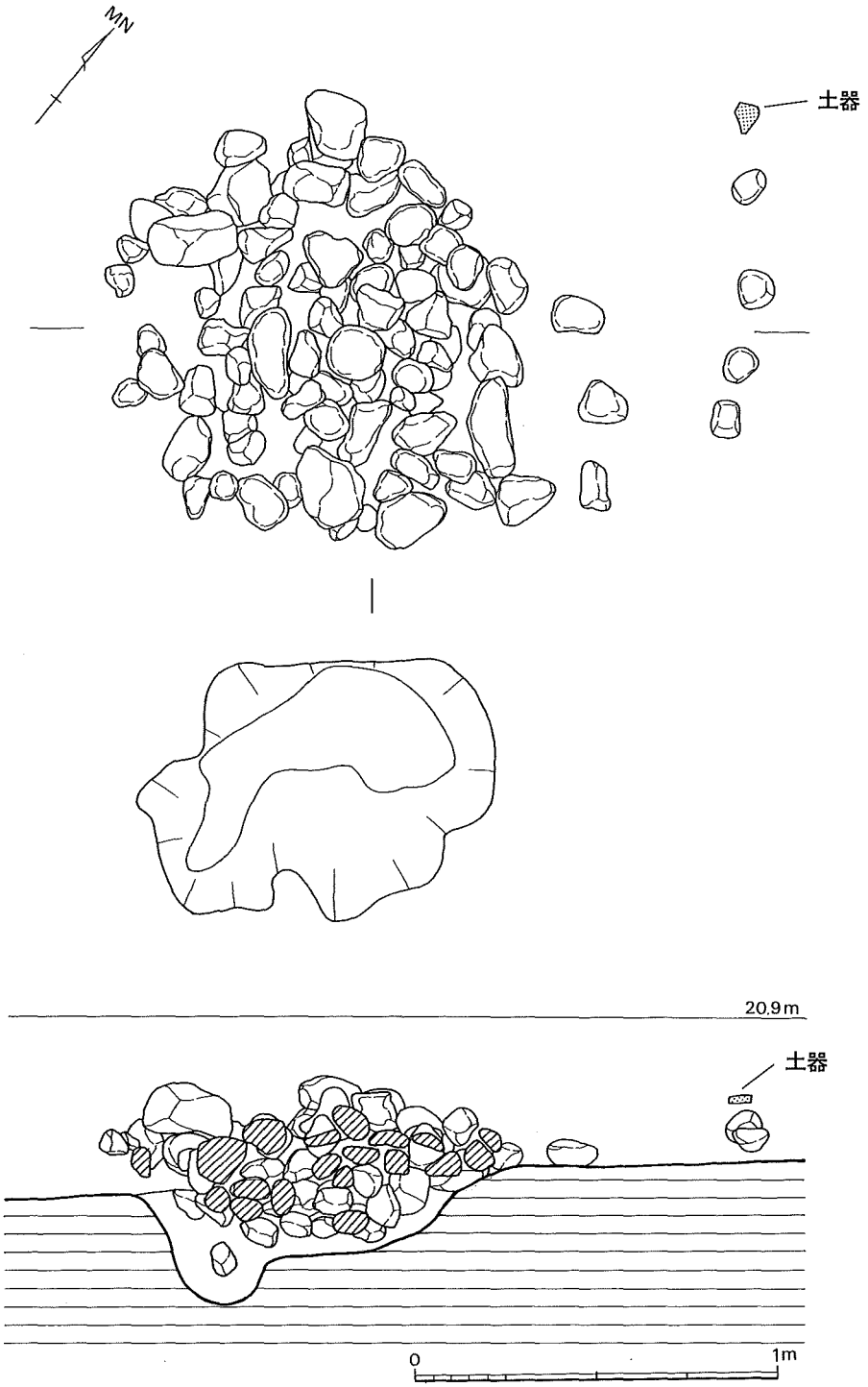
TP.31 土層図



TP.37 土層図

第7図　土層図②（S＝1／40）

遺構内から遺物の出土はなく正確な時期判定は困難であるが，近辺で土器片１点が出土している。縄文早期の貝殻文円筒形土器（第９図３）で，集石遺構とレベルをほぼ同じくすることから同時期と考えて差し支えあるまい。平成３年の調査でも同層位から４基の集石遺構が見つかっており，本例を加えると５基になる。



第８図　TP.9 集石遺構（S＝1／20）

第4節　出土遺物

第1項　土器

1．縄文土器（第9図，図版6）

第9図の1～25は縄文土器である。1～3は貝殻文円筒形土器で，1・3のように口縁部付近を貝殻腹縁で横位に連続刺突するものと，2のように微波状の条痕を横位に施すものにわかれる。

1は深鉢の口縁部が直線的に外に開くもので，復元口径31cmを測る。口縁部には貝殻腹縁による刺突文が上下二段に巡らされ，施文間の境はナデ消される。胴部内外面にみられるタテナデは施文前に行われ，施文後は口縁部内外面をヨコナデするにとどまる。器壁は2.0cmと厚く，断面観察では厚さ8mmほどの粘土紐を内傾接合で積み上げ，さらにその外側に粘土を貼り合わせて肥厚させていたことがわかる。TP.29第4層出土。

2はいわゆる「一野式」（水ノ江1998）とよばれる土器の口縁部である。従来の直立する口縁部とはならず，外開きになるようだ。文様は口縁部から胴部上半にかけて縦位に条痕を引き，その後に微波状の条痕文を横位に施す。口縁端部から内面にかけてはヨコナデされる。口縁端部の下に径6mmの補修孔と思われる孔がみとめられた。TP.28第4層出土。

3は1と同じく口縁部外面を貝殻腹縁で刺突するもので，風化のためか圧痕のみ残る。器壁が厚いことも共通する。TP.9第4層の集石遺構周辺出土。

4～8は撚糸文土器である。4は口縁部片で，外面に撚糸文，内面はナデを施す。口縁部内面は若干くぼみがある。TP.12第4層出土。5は屈曲する胴部外面に撚糸文を施すもので，上位に向かって緩く外方に屈曲する。器壁は厚く，内面から粘土を補って肥厚させていたことがわかる。TP.21第4層出土。6は撚糸文を不定方向に施す胴部片で，器壁は他と同様に厚い。TP.11第4層出土。7・8は外面に撚糸文を施し，内面はナデ。7はTP.12出土で，8はTP.13第4層出土。

9は押型文土器の口縁部である。外面は山形文を斜位に施文し，端部や内面は平滑なナデを施す。図の傾きはややきついか。押型文はこの1点のみで，TP.21第4層出土。

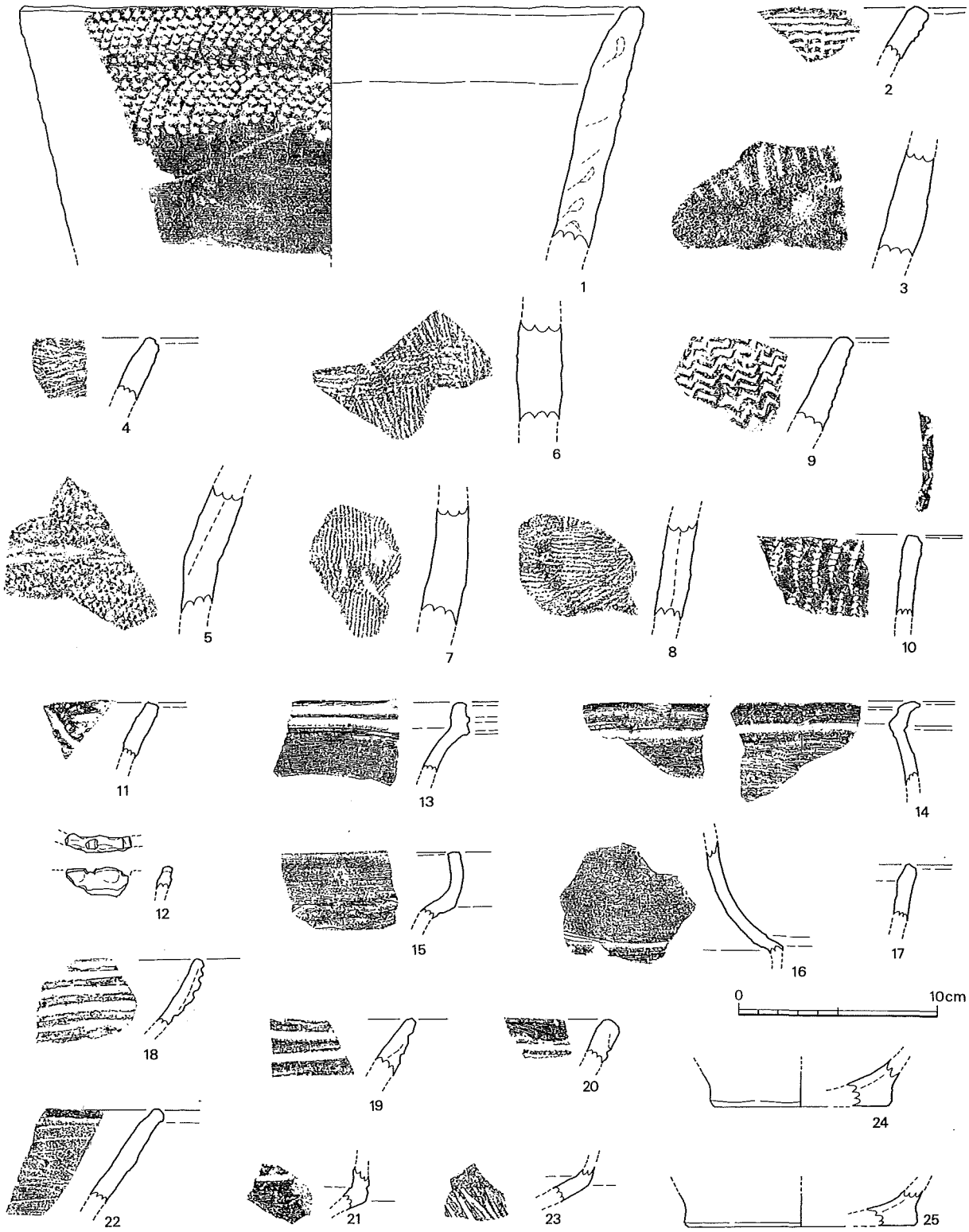
10は塞ノ神式土器の口縁部か。口縁外面と端部に貝殻で刺突を行う。外面の施文は上下2段にわたって施されているが間隔は1に比べると疎で，間延びしたような感がある。器壁は7mmと薄く，内面は丁寧にヨコナデされる。TP.11第4層出土。

11は春日式土器の口縁部である。沈線と刺突文で文様を構成する。器壁は薄く，胎土に滑石が混入する。TP.11第4層出土。12は並木系土器の口縁部か。口縁端部に半裁竹管で押したような刻みを施す。刻目と刻目の間は指でくぼませるか，つまんだようになっている。TP.29第4層出土。

13は御領系土器の口縁部で，やや内傾する口縁帯に幅広の凹線を2条巡らす。内外面とも丁寧なヘラ磨きがなされる。TP.31第3層出土。14は黒川式以降の浅鉢であろう。短い口縁部は玉縁状をなし，内面に段がつく。胴部内面には条痕を残すが，それ以外はヘラで研磨されている。TP.3第3層出土。15は御領系土器の口縁部で，口縁帯に文様を施さないタイプである。内外面はナデて成形している。TP.31第3層出土。16は御領系土器の頸部であろう。肩部のやや上位付近に浅い段がつく。内外面と

もヘラで丁寧に研磨を行っている。TP.31第３層出土。17は口縁部片であるが，器種・傾き等不明。調整は外面は縦方向，内面は横方向に研磨を施す。口縁端部は未調整で，手捏風である。TP.10出土。

18～21は古閑式段階の口縁部であろうか。島原市畑中遺跡（村川編1994）でも同段階の土器が出土している。18は口縁帯が肥厚し外反するもので，４条の沈線を巡らす。内面には条痕が残る。TP. 9



第９図　出土遺物①（S＝1／3）

第3層出土。19も外反する口縁で，沈線が3条＋α施される。沈線の間隔は18より広く，内面調整も条痕をナデ消すようにしている。TP.25出土。20は小破片で傾きは不明だが，口縁端部は折り返されて丸く仕上がる。沈線は2条＋αあったと思われ，内面をヘラで研磨している。TP.38第3層出土。21は口縁帯の下の部分で，沈線が施されていたのがわかる。内面に条痕を残す。TP.9第3層出土。

22は黒川式段階の粗製深鉢の口縁部か。外開きの直口縁と思われ，外面に条痕を残すものの内面はナデ消している。TP.6第2層出土。23は上下不明だが，屈曲部に貝殻条痕を残し，他はナデ調整を行う。TP.13第1層出土。

24・25は縄文晩期の底部片であろう。24は平底をなし，復元底径9cmを測る。内外面はナデて仕上げる。TP.24第4層出土。25も平底で，復元底径は11.5cm。磨滅のため調整不明。TP.8第3層出土。

2．弥生土器その他（第10図，図版7）

第10図の1～32は弥生時代以降の土器・陶磁器である。1～3は弥生中期の口縁部である。1は逆L字状口縁の外面に赤色顔料を塗彩するもので，口縁平坦部は放射状暗文が施される。TP.35第3層出土。2はTP.28出土。3は口縁部が丸味をもって屈曲し，肥厚した端部は丸くおさめる。TP.3第3層出土。

4・5は細長い刻目を施した張り付け突帯である。ともにTP.9出土。6は台付き甕の脚台部である。TP.10第3層出土。7は上げ底状をなす底部で，底径は5.5cmを測る。TP.10第3層出土。8は内湾する布留系甕の口縁部で，胴部内面をヘラケズリする。TP.12第3層出土。9も土師器甕もしくは広口壷の口縁部で，口縁端部にかけて器壁は先細りとなる。胴部内面はヘラケズリか。10は器種不明。小型鉢の口縁部もしくは高坏の脚端部になるか。9・10ともTP.3第3層出土。11は小型丸底壷であろう。胴部下半をヘラケズリした痕跡がみとめられる。TP.9第3層出土。

12は土師器坏で，胴部から口縁部かけて直線的に外上方へ開く。TP.3第3層出土。13は土師器皿である。口縁部を強くヨコナデするせいか，体部との境は鈍い段がついたようになる。TP.37第3層出土。14は土師器皿の底部で，糸切り底をなす。TP.3第3層出土。

15は須恵器の口縁部で，端部を上方につまみ出す。TP.38第3層出土。16は須恵器の胴部片である。自然釉がかかった外面は格子目タタキ，内面は青海波タタキを施す。TP.29第3層出土。

17は瓦質の擂鉢で，9条を1単位とした摺り目が施される。外面に指圧痕がみられ，器壁は薄い。TP.37第3層出土。

18～20は青磁である。18は明代の青磁碗で，口縁端部は端反りとなる。暗緑色の釉がかかる。TP.37出土。19も明代の青磁碗か。端反りの口縁部直下には型押ししたような凹みがつく。TP.18第1層出土。20は退化した細線蓮弁文を描く青磁碗である。TP.37第3層出土。

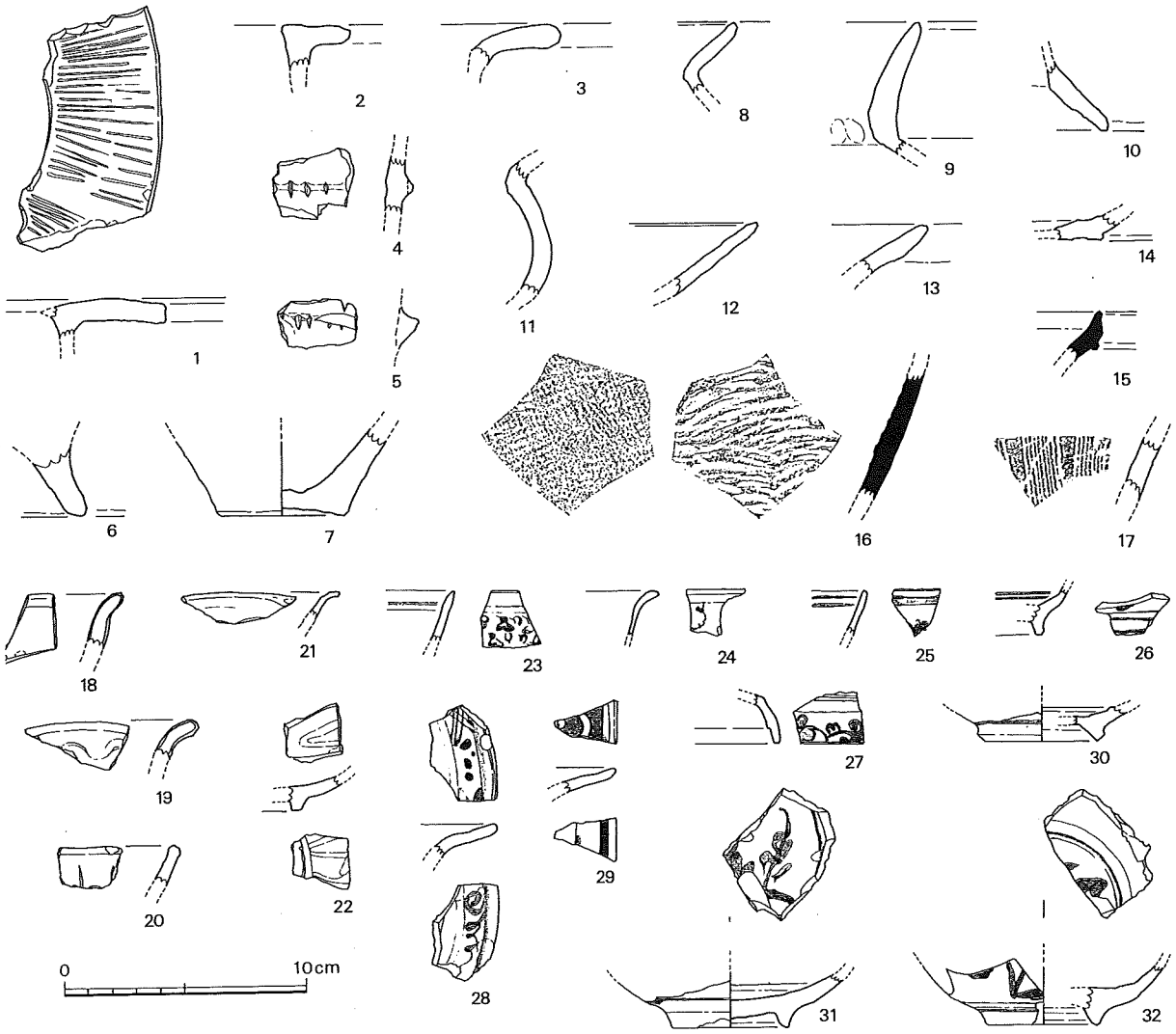
21・22は白磁である。21は口縁部が端反りになる皿で，森田編年（森田1982）のE群に相当する。口縁は輪花状になるか。TP.3第3層出土。22は菊皿の高台部分であろう。畳付けは釉剥ぎされ，鉄

銹を施す。森田編年ではＥ群に比定される。TP.10出土。

23～32は染付（青花）である。23は小野編年（小野1982）のＣ群に相当する染付碗で，外面に梵字文，内面に二重界線を描く。TP.37第３層出土。24は小野Ｂ２群にあたる端反りの染付碗か。胴部に唐草文が描かれる。TP.３第３層出土。25は小野Ｅ群の染付碗か。TP.27出土。26は小野Ｅ群もしくはＦ群の染付碗であろう。高台畳付けは釉剥ぎされている。TP.９出土。27は合子の蓋か。胴の屈曲部には鈍い稜がつき，口縁端部から内面にかけて釉剥ぎを施す。TP.３第３層出土。

28・29はつば皿の口縁部で，小野Ｆ群になる。胎土等から判断するとどちらも漳州窯系か。28はTP.37第３層出土。29はTP.９第３層出土。

30～32は漳州窯系碗の底部である。30は鈴木編年（鈴木1990）のＧ群で，見込は蛇ノ目釉剥ぎされ，高台畳付けの釉は面取り気味に掻き落とす。TP.31出土。31・32は上田編年（上田1991）のＢ群に相当する。31は蓮子碗で，高台内は無釉，畳付けは釉剥ぎされる。TP.37第３層出土。32は見込は平坦で，胴部との境に浅い段がつく。施釉された高台はぼってりとしたつくりで，畳付けの釉は掻き取られる。TP.21出土。

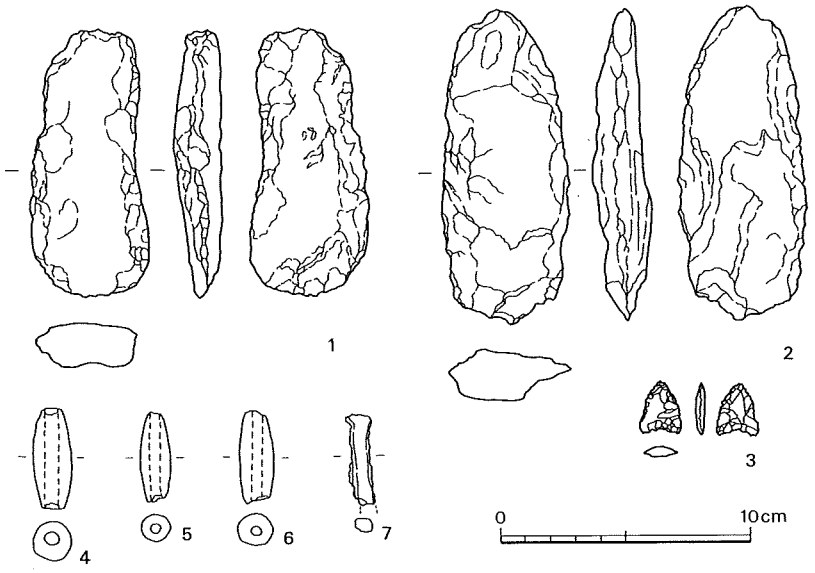


第10図　出土遺物②（S＝1／3）

第２項　石器その他

（第11図，図版７）

１・２は小形の扁平打製石斧である。１は安山岩製で，長さ10.5cm，幅4.1cm，厚さ1.8cmを測る。両側辺から加工が施されており，表裏に自然面を残す。TP.15出土。２は表採資料で，長さ12.4cm，幅4.8cm，厚さ2.0cmを測る。石材は玄武岩製で，加工は両側辺を中心に表裏にわたって行われる。刃部は一部剥落している。３は局部磨製石鏃である。両側辺から緻密な押圧剥離が加えられ，基部には若干抉りがみられることから凹基無茎式といえる。石材には淀姫系の黒曜石を用いる。TP.13第１層出土。



第11図　出土遺物③（S＝1／3）

４～６は土錘で，いずれも中央部が膨らむ。長さは3.5～４cm，径は1.2～1.6cm，重量は3.4～８ｇを測り，４が他よりやや大きい。４はTP.36表土，５はTP.３第３層，６はTP.12第３層出土である。

７は鉄釘で，頭部は短く直に折れ，断面は方形をなす。釘先は欠損していた。TP.37第３層出土。

試掘壙	縄文	弥生	土師・須恵	中世	近世	鉄製品等	合計	試掘壙	縄文	弥生	土師・須恵	中世	近世	鉄製品等	合計
TP. 1	0	0	0	0	0	0	0	TP. 20	1	1	0	0	1	0	3
TP. 2	0	0	0	0	0	0	0	TP. 21	16	21	4	2	5	0	48
TP. 3	8	40	53	2	0	0	103	TP. 22	0	18	0	0	6	0	24
TP. 4	6	0	0	0	0	0	6	TP. 23	0	0	0	0	2	0	2
TP. 5	0	0	0	0	0	0	0	TP. 24	1	6	0	0	0	0	7
TP. 6	2	0	1	0	9	0	12	TP. 25	1	2	0	0	0	0	3
TP. 7	4	0	0	0	6	0	10	TP. 26	0	0	0	0	0	0	0
TP. 8	27	23	5	0	20	0	75	TP. 27	0	8	0	2	1	0	11
TP. 9	21	97	22	4	44	3	191	TP. 28	1	3	8	0	2	2	16
TP. 10	12	10	16	1	3	1	43	TP. 29	11	29	6	0	4	0	50
TP. 11	8	0	9	0	0	0	17	TP. 30	2	14	3	0	6	0	25
TP. 12	3	0	2	0	1	0	6	TP. 31	16	6	1	1	1	0	25
TP. 13	6	0	3	1	0	0	10	TP. 32	0	0	0	0	0	0	0
TP. 14	5	0	0	0	0	0	5	TP. 33	0	1	0	0	2	0	3
TP. 15	0	0	0	0	0	0	0	TP. 34	0	13	6	2	14	0	35
TP. 16	0	2	1	0	6	0	9	TP. 35	1	4	0	0	0	0	5
TP. 17	0	0	0	0	0	0	0	TP. 36	0	9	0	0	5	0	14
TP. 18	0	0	0	0	0	0	0	TP. 37	0	16	3	8	4	1	32
TP. 19	0	0	0	0	0	0	0	TP. 38	2	12	1	0	0	0	15
								合計	154	335	144	23	142	7	805

表４　試掘壙別出土遺物数

第Ⅳ章　まとめ

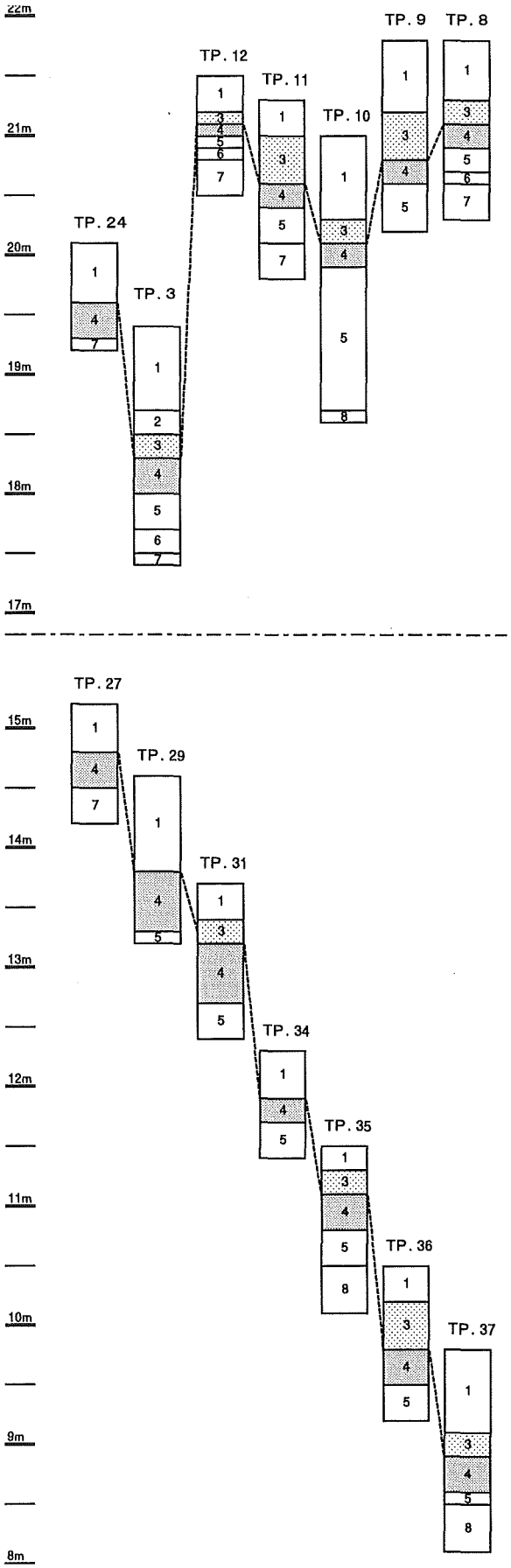
今回の調査結果を出土遺物と土層の観点からまとめてみたのが表４と第12図である。

表４は試掘壙別に各時代の出土遺物点数を示したもので（註１），遺物の出土総点数は805点を数える。表をみると遺物が多数出土したのはTP.９とTP.３で，それに次ぐのがTP.８・TP.29・TP.21という順になる。時代別では，縄文時代はTP.８とTP.９，TP.21とTP.31に，弥生時代はTP.９とTP.３，TP.29に集中があることがわかる。逆に言えば，TP.６の北東を走る町道より以南は住宅建設等による土地の開削が著しい場所であり，また，丘陵鞍部のTP.14やTP.17～TP.20，TP.25にかけての一帯は畑地の開墾で包含層の大半が失われているとみることもできる。

TP.９については第12図に示すように一帯が丘陵の最高所を占め，包含層がまだ良好に残存する場所であることを表している。TP.３は丘陵の北西縁辺にあたり，標高的には低いものの，鞍部付近に比べると耕作の影響が及んでいないためか遺物の残りは良い。

TP.３とは正反対の南東縁辺部に設けたTP.１やTP.２では表土直下に第８層の大三東ロームが確認され，完全に土層が欠落していた。この周辺で過去に大がかりな土取り作業があったという話を裏付ける（註２）。

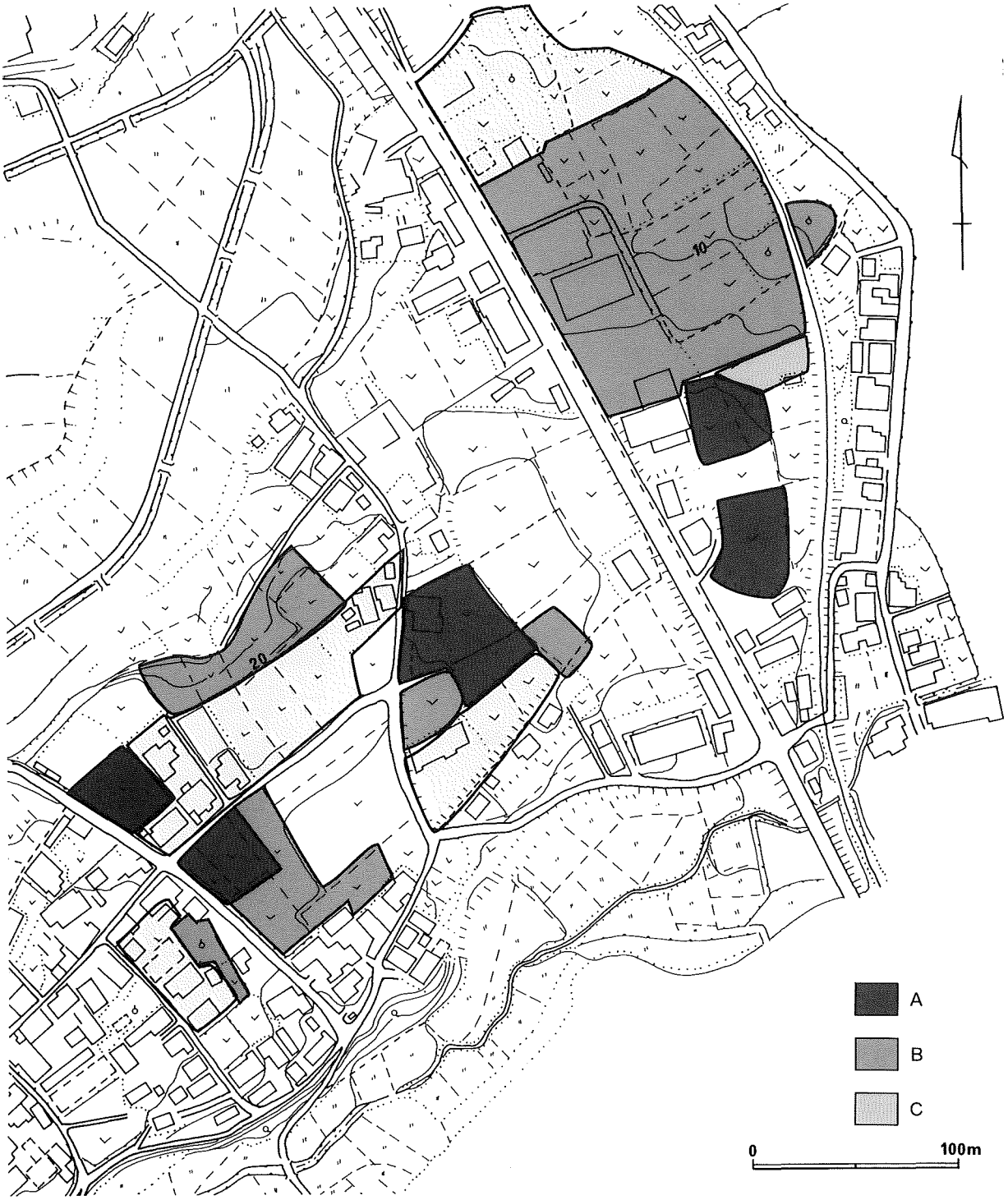
TP.21やTP.22の近辺で遺物がみられるのは南東側に高まりのある土地を残すからで，標高的にもTP.９付近に匹敵するものがある。今回調査壙を設けることはできなかったが，包含層が残存している可能性は高く，今後の開発に際しては調査対象となろう。



第12図　土層柱状図

国道東側では海に面した突端部のTP.29～TP.31やTP.34，TP.37で包含層がみられ，国道へ近づくにつれて密度は薄くなっていく。TP.31では噴砂と思われる現象が確認されたが，これより西にはみられないことから，浜堤との関わりを考える必要があろう。

次に各時代別に試掘壙での傾向を見てみると，縄文時代の遺物は専ら標高13～14m以上の場所で出土するのに対して，弥生時代以降の遺物は標高８～９ｍ付近までみられ，確実に生活の場が丘陵下に移動していることを窺わせる。



第13図　一野遺跡分布密度（S＝1／3,000）

出土遺物数量をもとにしたこのような推察は，遺物包含層である３層・４層の残存状況に左右されるところが大きいことはいうまでもない。土地利用度の高い地域での包含層の欠落は当然のことで，単純に比較をすることができないが，遺跡の重心を知る目安にはなるであろう。

これまでの調査で得られた資料をもとに，地形等含めた土地の現況を鑑みて作成したのが第13図である。一野遺跡の分布密度をＡＢＣの３段階に分けて表示している。Ａは密度が濃いと思われる地域で，以下，Ｂ・Ｃの順に密度は薄くなる可能性が高い。一野遺跡の立地する丘陵は南東斜面から頂部付近で継続的な生活の営みがみとめられる一方，北西部は利用に適さなかったのであろう。

出土遺物でみると，一野遺跡は貝殻文円筒形土器や押型文土器・塞ノ神式土器などに代表される縄文早期と，御領系の天城式や古閑式段階の縄文後～晩期にピークがあり，その間に縄文中期頃の春日式や並木式，阿高系の土器が混在する時代が若干みられる。その後，弥生中期～古墳初頭までは南隣の島原市景華園遺跡と消長を共にし，15～16世紀に貿易陶磁器の出土をみるまで古代～中世は遺物が極端に減少する。これら遺物の出土傾向は従来の調査でも指摘されてきたことであり，今回の調査でもそのことを追認したことになる。

最後に筆者の力量不足で，十分に論じることができなかった課題をあげておきたい。

本遺跡を標式する「一野式」土器についてである。今回の調査では水ノ江氏の提唱する「一野式」とは別種類の貝殻文円筒形土器がみつかった。口縁部に貝殻刺突文を横位に施す厚手の土器で，水ノ江氏はこの種の土器について型式設定は保留しているものの，「およそ北部九州西半地域において一時期を形成していた可能性が高い」（水ノ江1998）という認識を示している。渡邊氏は一野式のヴァリエーションについて「（中略）変化に富んでおり，本来的にはより多くの個体数を想定することができる。」（渡邊1999b）と述べ，資料増加の可能性があることを示唆している。島原半島沿岸域では「一野式」とともに出土例が数件報告されており（註３），一野式の範疇で古い様相を示す一群と考えたいが，今後の出土例の増加と土層精査に期待するしかない。

報告書の末尾で恐縮であるが，本書を作成するにあたり渡邊康行氏，古門雅高氏，福田一志氏，川口洋平氏をはじめ多くの方々から御教示・御協力を賜った。ここに感謝の意を表したい。

【註】

（註１）　黒曜石やサヌカイトの剥片類は表４では取り扱わなかった。
（註２）　島原市側の景華園遺跡でも建築用の採土によって破壊されていることが平成10年の調査で確認されている。（福田編2000）
（註３）　島原半島南東部の布津町大崎鼻遺跡や飯野遺跡でもこのタイプの土器が一野式土器とともに出土している。本書第Ｉ章の註１・註２参照。

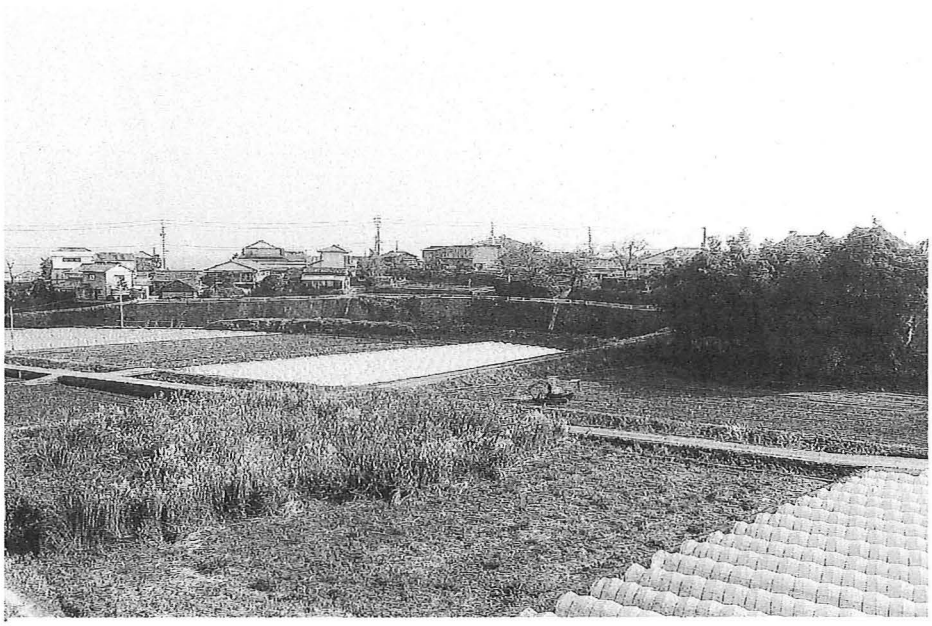
【引用・参考文献】

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2
上田秀夫　1991　「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年の予察」『関西近世考古学研究』Ｉ
浦田和彦編1992　『一野遺跡』　有明町文化財調査報告書第11集　長崎県有明町教育委員会
小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2
小野正敏　1985　「出土陶磁よりみた15・16世紀における画期の素描」『ＭＵＳＥＵＭ』No.416

川口洋平編1999　『稗田原遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第152集　長崎県教育委員会
川口洋平編2000　『稗田原遺跡Ⅳ』長崎県文化財調査報告書第157集　長崎県教育委員会
川道　寛　1996　「一野遺跡」国庫補助事業に係る有明町内遺跡範囲確認調査結果報告
木崎康弘　1996　「縄文時代早期土器群の編年学的研究－中原式土器の設定－」『蒲生・上の原遺跡－県営農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の調査－』熊本県文化財調査報告書第158集　熊本県教育委員会
清田純一　1998　「縄文後・晩期土器考－中九州の縄文後・晩期土器とその並行型式について－」『肥後考古』第11号　肥後考古学会
久原巻二　1988　「島原半島の考古地理」長崎県高等学校教育研究会社会科部会発表資料
鈴木秀典　1990　「17世紀の貿易陶磁器に関する研究成果」『貿易陶磁研究』No.10
副島和明編1987　「一野遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅹ』長崎県文化財調査報告書第86集　長崎県教育委員会
高野晋司編1983　『弘法原遺跡』吾妻町の文化財７　長崎県吾妻町教育委員会
長岡信治・田島俊彦1998「雲仙火山北麓の稗田原遺跡のテフラ層序」『稗田原遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第145集　長崎県教育委員会
初村達章・内村関雄・古田正隆1960「一野遺跡概報」（長崎県南高来郡有明村大三東）長崎県島原土木事務所報告
古田正隆　1964　「一野遺跡」（南高来郡有明町）長崎県南高来郡有明町教育委員会
福田一志編2000　「景華園遺跡」『県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第156集　長崎県教育委員会
松藤和人編1994　『百花台東遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告第８冊　同志社大学文学部文化学科
水ノ江和同1998　「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器－論攷編－』九州縄文研究会
宮崎貴夫　1998　「原始・古代の島原半島」『原始・古代の長崎県』資料編Ⅱ　長崎県教育委員会
村川逸朗編1992　『弘法原遺跡』吾妻町の文化財13　長崎県吾妻町教育委員会
村川逸朗編1994　『畑中遺跡』島原市埋蔵文化財調査報告書第９集　長崎県島原市教育委員会
村川逸朗編1997　『稗田原遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第136集　長崎県教育委員会
村川逸朗編1998　『稗田原遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第145集　長崎県教育委員会
森田　勉　1982　「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2
山崎純男・島津義昭1981「九州の土器」『縄文文化の研究』４　縄文土器Ⅱ　雄山閣出版
吉田五雄　1987　「有明町の地理的概観」『有明町史』上巻　有明町
渡邊康行　1997　「石器群の特徴と編年的位置に関する二，三の問題」『広平遺跡』長崎県文化財調査報告書第137集　長崎県教育委員会
渡邊康行　1999ａ「長崎県における縄文早期研究の現状と課題－押型文土器出土遺跡を中心として－」『西海考古』創刊号西海考古同人会
渡邊康行　1999ｂ「一野式・弘法原式の設定をめぐって」『西海考古』創刊号　西海考古同人会

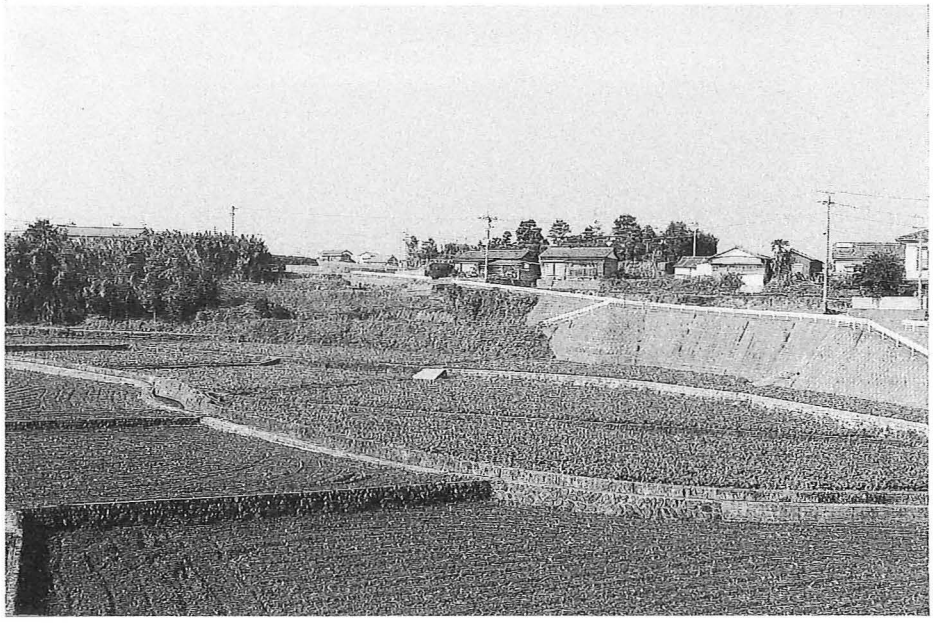
図　　版

（一野遺跡）



遺跡遠景
（北西から）

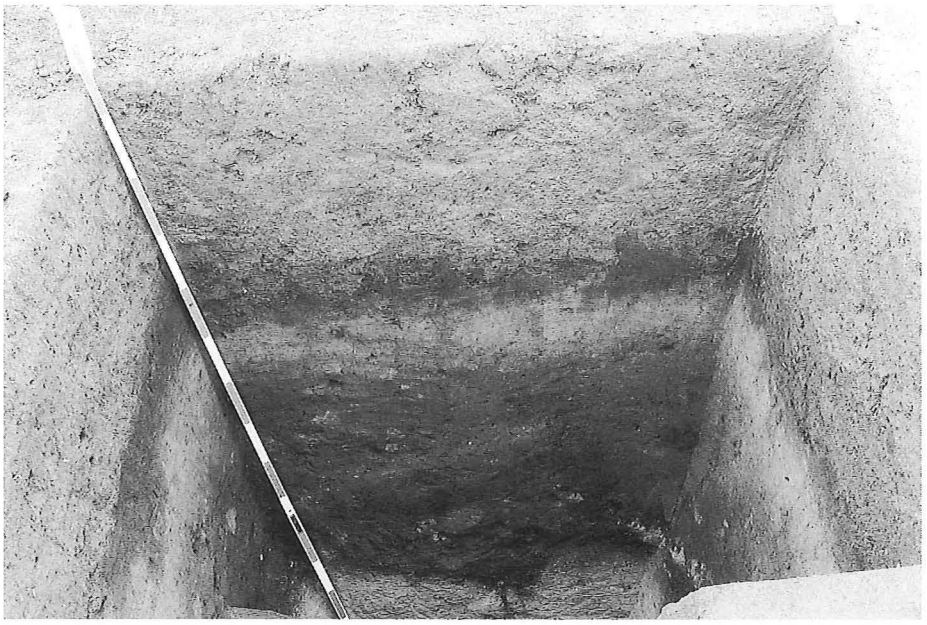
遺跡遠景
（南から）



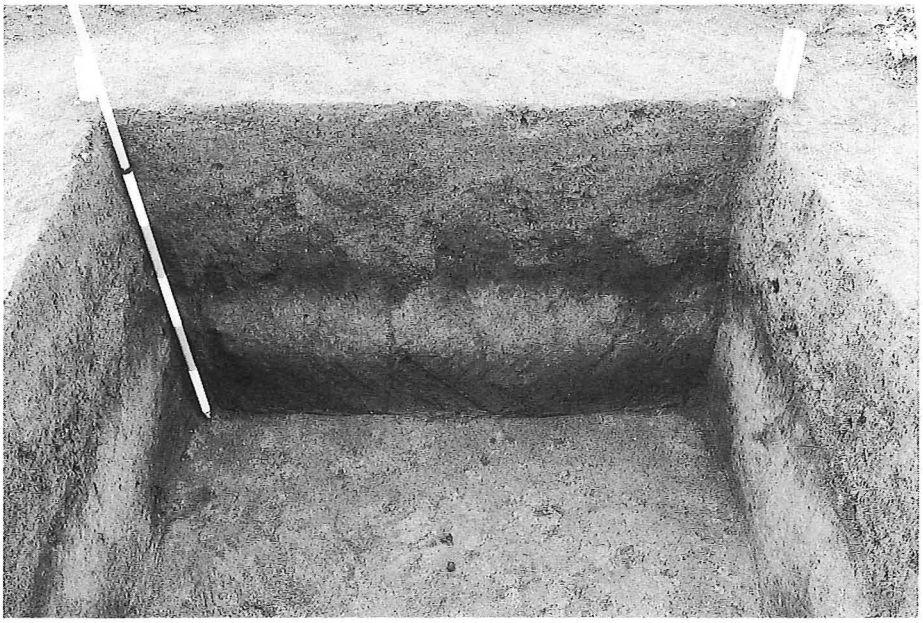
遺跡遠景
（南東から）

図版 2

TP.3　西壁土層



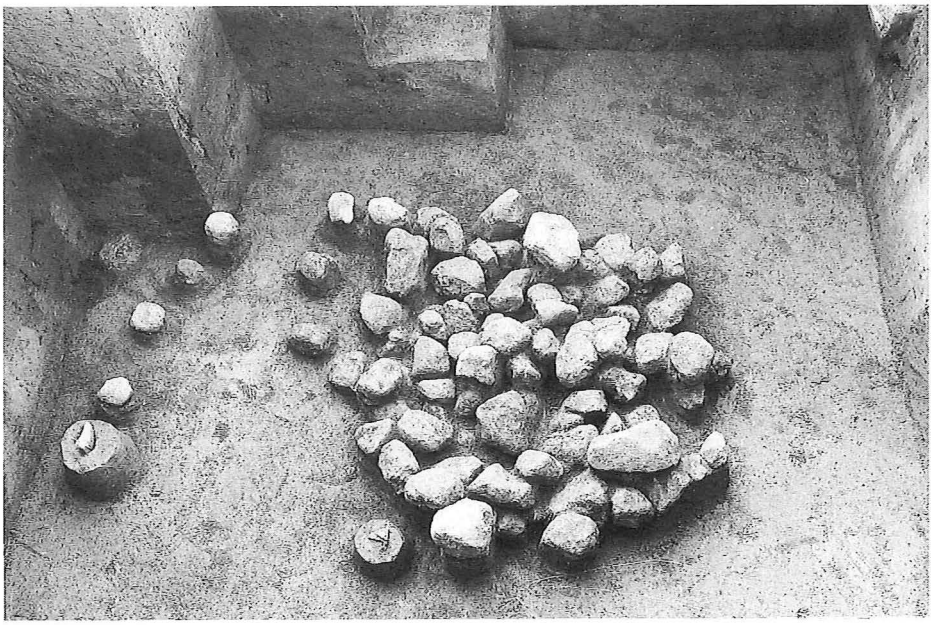
TP.10　南壁土層



TP.11 南壁土層

TP.9 北壁土層

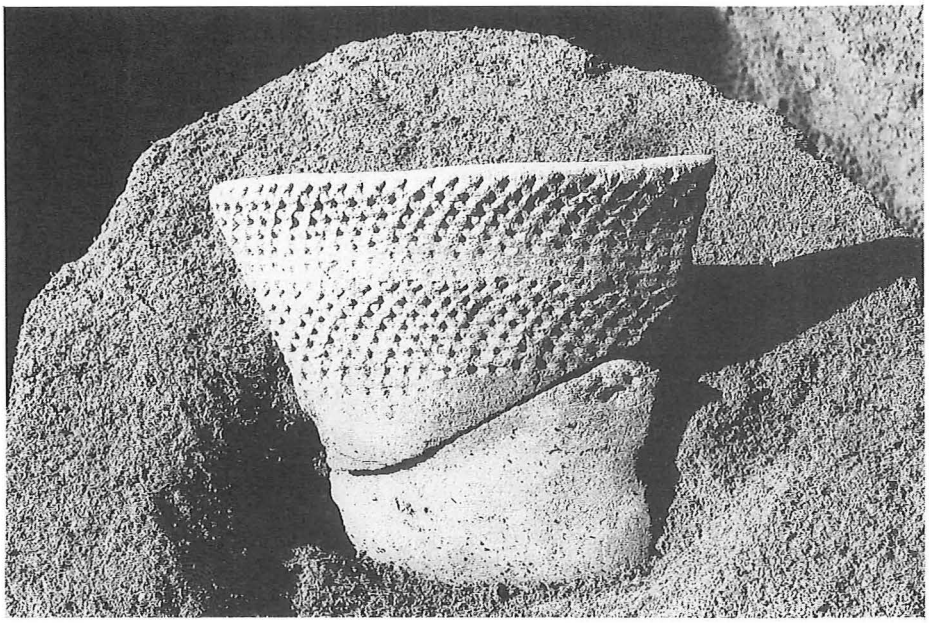
TP.9 西壁土層



TP.9 集石遺構

図版 4

TP.29　北壁土層



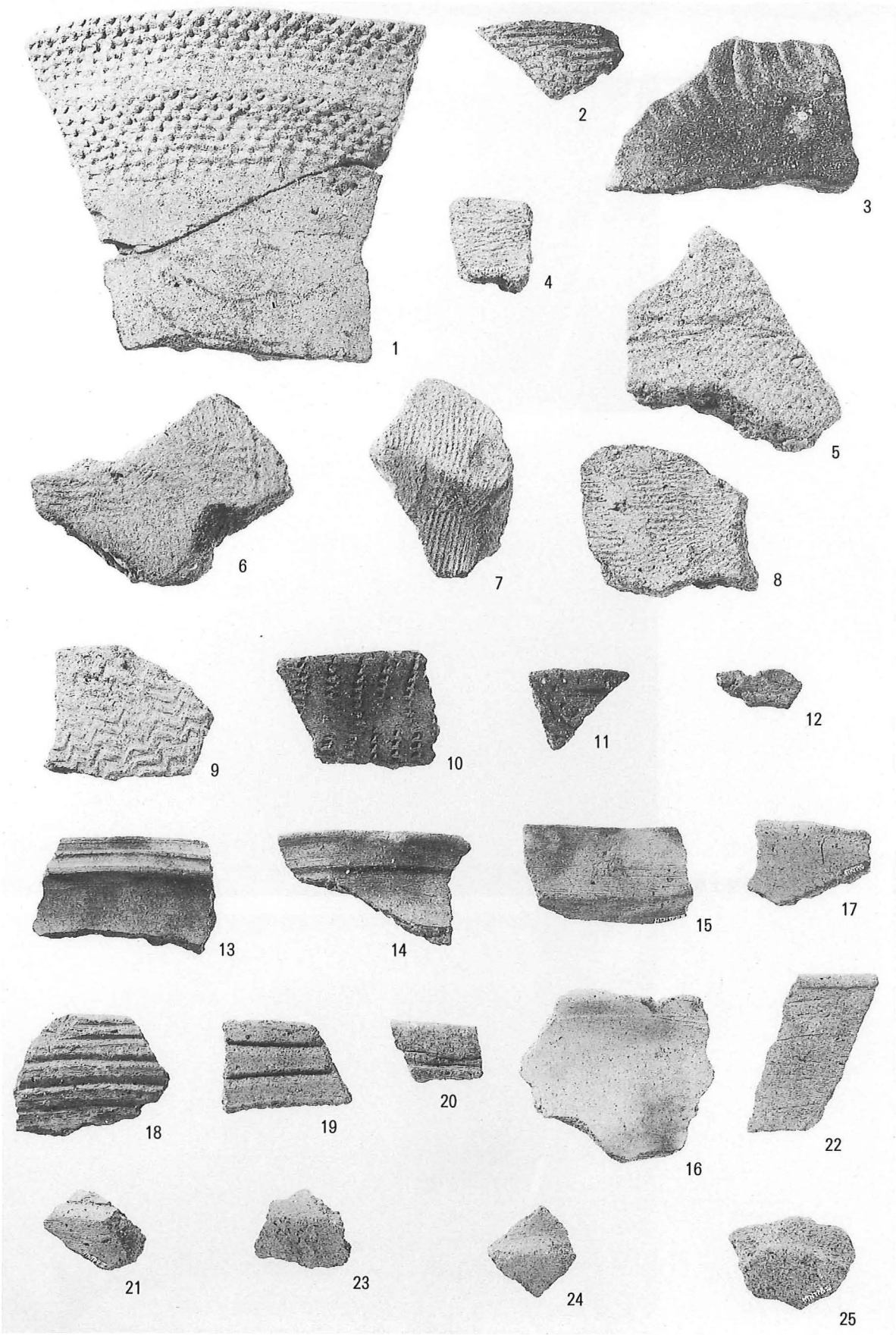
TP.29　遺物出土状況

TP.31 北壁土層

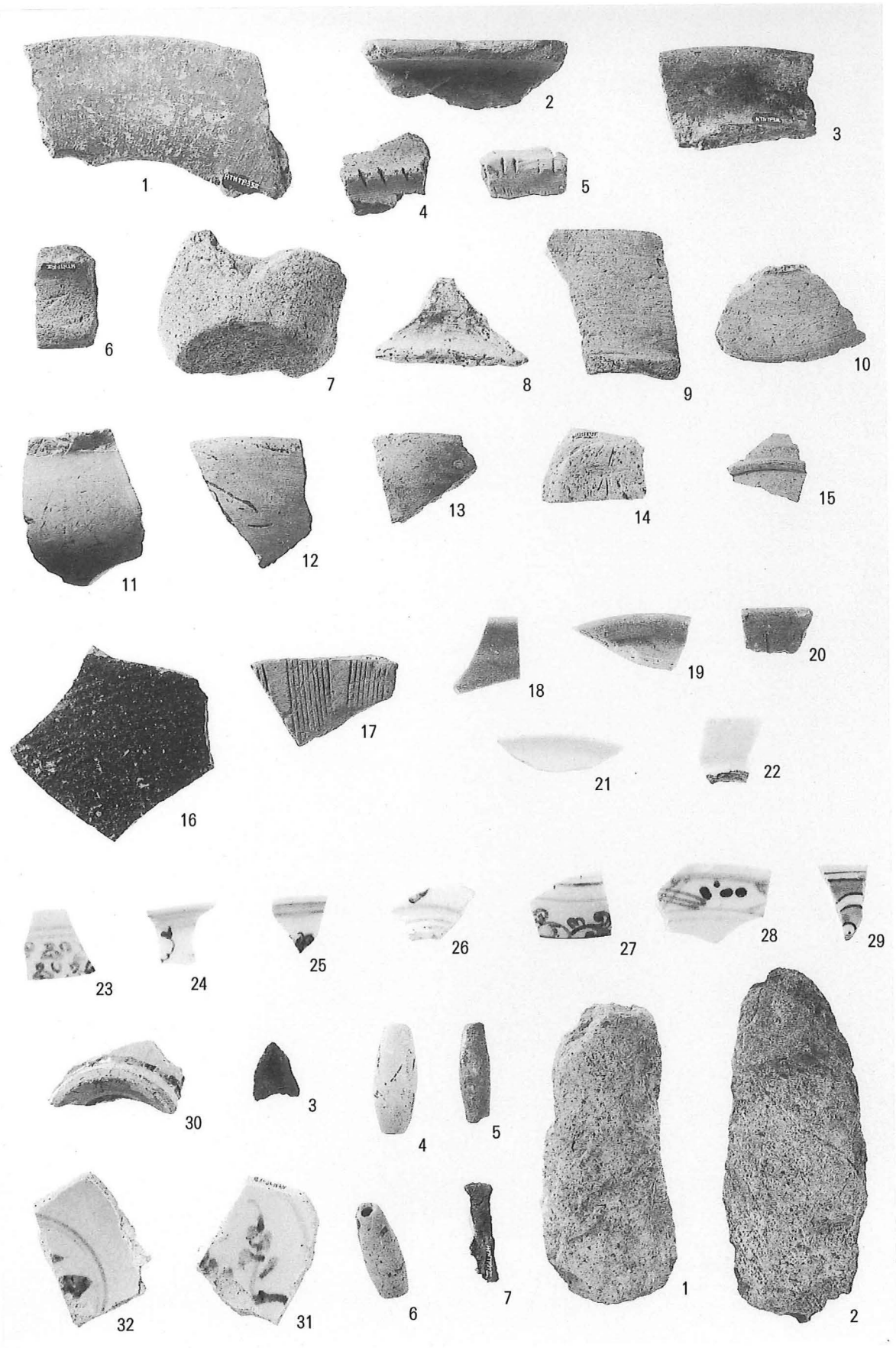
TP.35 西壁土層

TP.36 東壁土層

TP.37 東壁土層

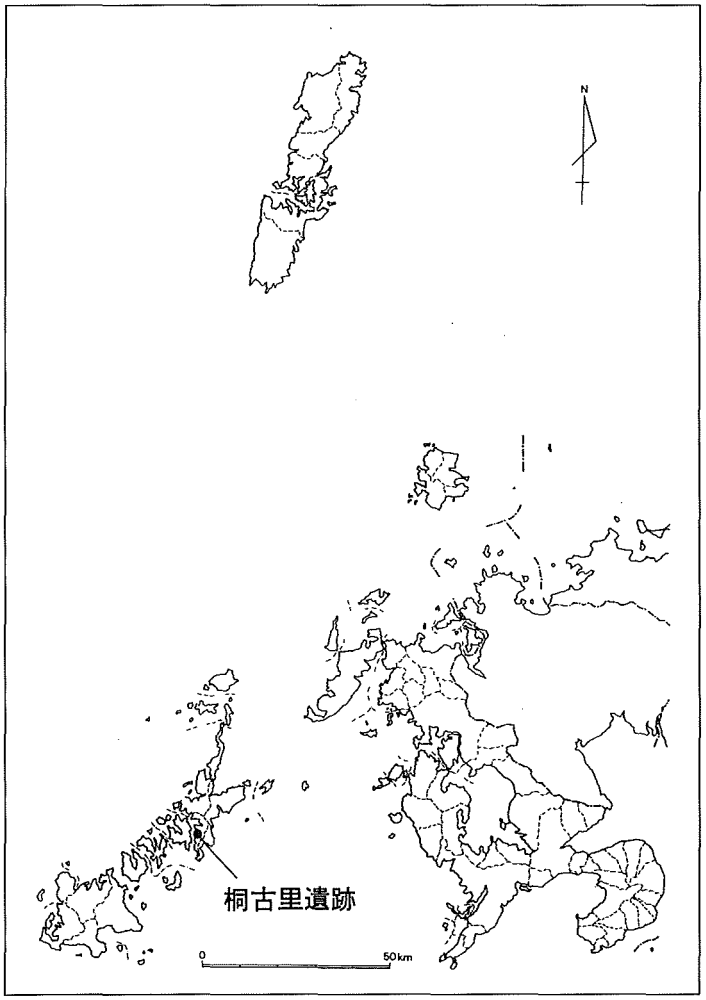


出土遺物①


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
3
4
5
32
31
6
7
1
2

出土遺物②

第 II 部　桐古里遺跡



遺跡位置図

例　　言

1．本書は長崎県南松浦郡若松町桐古里に所在する，桐古里遺跡の主要遺跡内容確認調査の報告書である。

2．調査は長崎県教育庁文化課が事業主体となり，若松町教育委員会の協力をえて，平成11年6月21日（月）から7月2日（金）まで実施した。

3．遺物実測およびトレースについては斉藤いづみ，渡辺洋子の協力をえた。

4．本書における遺物・写真・図面などは長崎県教育庁文化課立山分室で保管している。

5．本書の執筆・編集は古門がおこなった。

本　文　目　次

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 40
　第1節　地理的環境 …… 40
　第2節　歴史的環境 …… 41
第Ⅱ章　調査の経緯 …… 44
　第1節　調査の経緯 …… 44
　第2節　調査組織 …… 44
第Ⅲ章　調査の概要 …… 46
　第1節　土層 …… 46
　第2節　各試掘坑の状況 …… 46
第Ⅳ章　出土遺物 …… 48
　第1節　土器 …… 48
　第2節　石器 …… 50
　第3節　遺物小結 …… 50
第Ⅴ章　まとめ …… 50
　第1節　調査の成果 …… 50
　第2節　遺跡の範囲・取り扱いについて …… 50
第Ⅵ章　長崎県の縄文晩期から弥生時代前期の土器の様相 …… 54
　第1節　山の寺式土器と原山式土器をめぐって …… 54
　第2節　長崎県の弥生前期土器 …… 58
　第3節　まとめ …… 60

挿　図　目　次

第１図　桐古里遺跡周辺地形図（S＝1／50,000）…… 40
第２図　若松町内遺跡地図（S＝1／10,000）…… 43
第３図　桐古里遺跡周辺図（S＝1／2,500）…… 45
第４図　桐古里遺跡試掘坑配置図（S＝1／2,500）…… 47
第５図　桐古里遺跡出土遺物（S＝1／3）…… 49
第６図　桐古里遺跡ゾーニング（S＝1／2,500）…… 51
第７図　桐古小だより①…… 52
第８図　桐古小だより②…… 53
第９図　関連遺跡位置図…… 55
第10図　里田原遺跡出土の甕形土器（S＝1／6）…… 59
第11図　北高来郡上田井原遺跡第14試掘坑出土土器（S＝1／6）…… 60
第12図　諫早市小野宗方遺跡出土土器（S＝1／6）…… 61
第13図　大村市黒丸遺跡Ⅲ－７区第１号土坑出土土器（S＝1／6）…… 61
第14図　島原半島における縄文後期後半～晩期の様相…… 62

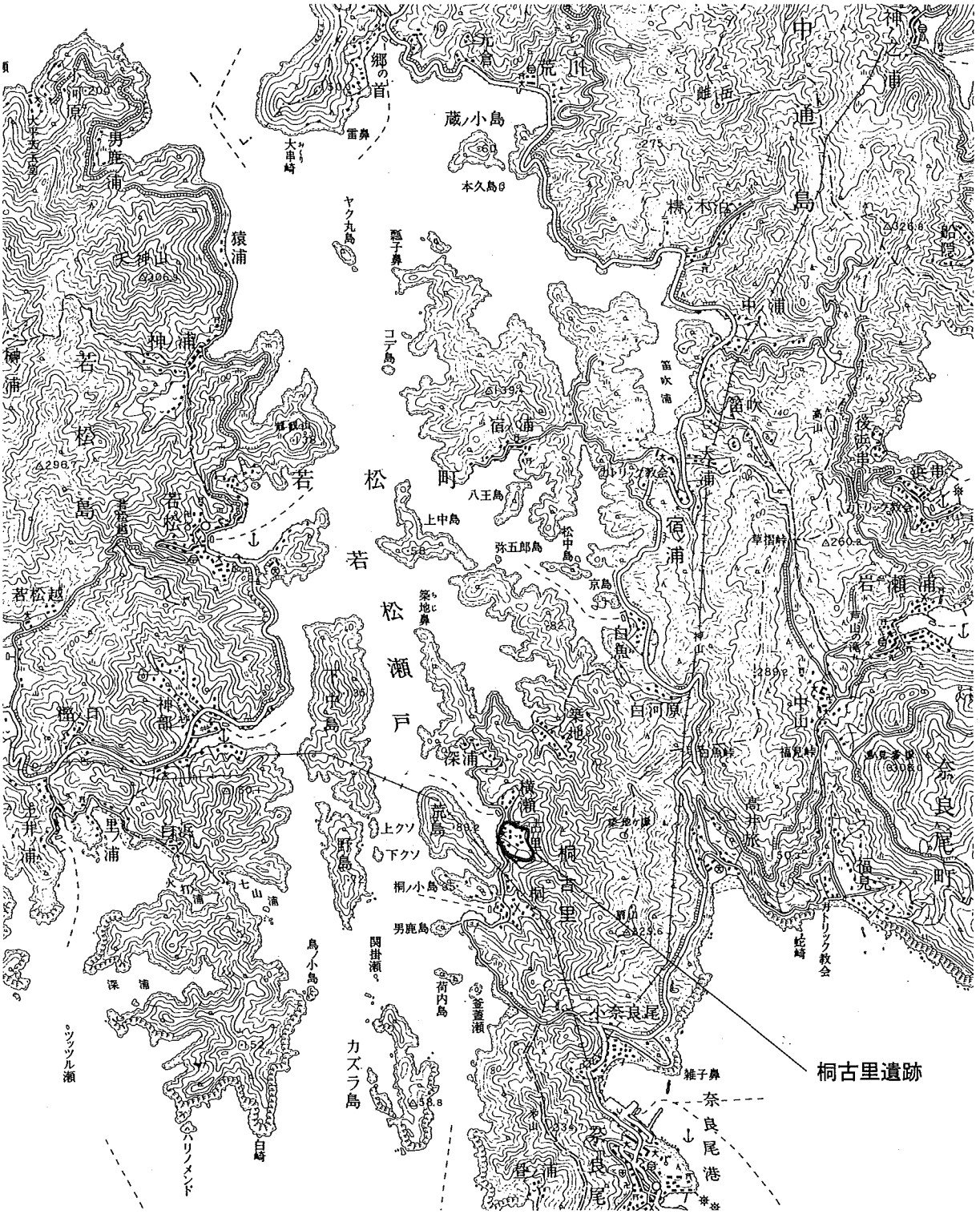
図　版　目　次

図版１…… 67
図版２…… 68

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

第１節．地理的環境

桐古里遺跡は長崎県南松浦郡若松町桐古里郷古里に所在する。桐古里の名は隣接する桐と古里の２



第１図　桐古里遺跡周辺地形図（S＝1／50,000）

つの集落名に由来する（瀬尾・外山編1987)。桐古里遺跡がある若松町は，31の島々からなるが，そのうち常住の島は若松島，有福（ありふく）島，中通（なかどおり）島，桐小島，漁生浦（りょうせがうら）島の６島である。

若松町は五島列島のほぼ中央部に位置し，北は若松瀬戸を境に南松浦郡青方町と，東は同じく若松瀬戸を境に南松浦郡奈良尾町と，南は滝河原瀬戸を境として南松浦郡奈留町と各々接している。東経129° 1′ 26″，北緯32° 53′ 7″に位置し，東西13.3キロ，南北16.5キロ，面積60.20平方キロの町域をもつ。町域は大きくは若松島とその属島および若松瀬戸に面した中通島の西側に広がる。人口は男2227人，女2309人，世帯数1832戸である（平成12年12月現在)。

若松町の気候は，冬の平均気温７～８℃，夏の平均気温27℃，年間降水量2000㎜で，冬は暖かく夏は比較的涼しいといえる。桐古里遺跡が存在する中通島の若松瀬戸沿岸部は起伏量の大小が混在した丘陵地となっており，低地はきわめて貧弱で，一部の谷底低地や小さな湾奥形成された海岸低地が散在するにすぎない。若松瀬戸沿岸部は南部において，著しい溺れ谷の地形をみせており，桐古里遺跡付近の海岸線などはその典型例である。

中通島の若松瀬戸に面した海岸地帯は火山砕屑岩（かざんさいせつがん）があり，鎌田泰彦によって築地（ちじ）層と名付けられた（長崎県土地対策室1982)。築地層は五島層群堆積後の火山活動によって生じたと考えられている。

桐古里地区は半島丘陵地で，その山稜は一様に北北西から南南東の方向に向かっている。
桐古里遺跡は若松町の中通島側に位置し，遺跡は入野川が形成した狭小な沖積地に形成されている。標高は最も高いところで12mである。遺跡の東側は山稜で，平地との傾斜変換点から海岸部に向かって西へなだらかに傾斜していく。現在の入野川は遺跡のやや南側をほぼ東西に流れているが，往時は頻繁に流路を変えていたとみられる。

旧海岸線は，桐古小学校裏から桐保育園の西側にかけてと判断され，現在は埋め立てによって海岸線が大きく前進している。現在の桐古小学校は埋め立て地に建てられている。その桐古小学校も平成13年３月をもって統廃合の対象となって，廃校となった。

第２節．歴史的環境

若松町では，旧石器時代の遺跡や遺物は現在までのところ発見されていない。縄文時代になると遺跡が増えてくる。本書で紹介する桐古里遺跡は，これまでに縄文中・後期の阿高式系土器や，後期の鐘崎式土器，北久根山式土器，晩期の夜臼式土器，磨製石斧，掻・削器類が表採されていた。

笛吹郷の笛吹遺跡はかつて「笛吹山の神遺跡」といわれ，「山の神」と称された神聖地に磨製石斧６点が祀られていた。石斧の出土地は不明とされていたが，昭和59年（1984）の長崎県文化課の聞き取り調査により，付近の住宅において小屋を作る際に出土したものであることがわかった。

その他の縄文時代の遺跡として，高仏遺跡，笛吹遺跡，神部遺跡，榊ノ浦遺跡，鵜ノ瀬遺跡，筒ノ浦遺跡などが海岸部を中心に立地している。

弥生時代遺跡としては，桐古里遺跡から弥生時代前期の板付Ⅱ式土器や中期初頭の城ノ越式土器が表採されている。『若松町誌』によると「昭和49年５月遺跡調査をしていた奈良尾中学校教諭藤崎大吉郎氏が縄文式中期の土器片，石斧片その他多数の黒曜石片を発見した。採集した中には砂の混じった素焼きで櫛目の溝ができる細線刻文土器片もある」という。

また，滝ヶ原遺跡では，昭和42年（1967）に道路と広場を造成していたところ箱式石棺から板付式の小壺が発見された。付近一帯には弥生時代の包含層が存在したようで，板付Ⅱ式，須玖式土器も採集されている。白魚遺跡でも弥生土器が表採されている。

弥生後期から古墳時代にかけては，若松町内でも五島列島の他の地域と同じく，遺跡の数が減少する。桐古里遺跡，馬込(まごめ)遺跡，白魚遺跡などから須恵器，土師器が表採されているのみである。

奈良・平安時代も同様に遺跡密度は低い。

しかし，中世になると祭祀遺跡や石造物を中心に遺跡の数が増加する。荒川郷に所在する三王（山王）岩陰遺跡では小さな岩陰の水底から平安後期に渡来したと思われる舶載鏡２面と15面の中・近世の和鏡が発見されている（田中1970)。また，真浦（まうら）遺跡は，神部（こうべ）の集落を見下ろす標高24.5mの舌状丘陵であるが，丘陵頂部の20mの範囲に玉砂利が広がっており，経塚の可能性が指摘されている。当地は神聖地であったらしく，付近には五輪塔や宝篋印塔がある。同じく神部の老松神社裏の小さな岩陰から，天正７年（1597）の銘が刻まれた口と鏡片が発見されている。

若松町の白魚・佐尾（さお）の地は鎌倉時代，青方氏の分家にあたる白魚（しろお）氏の勢力下にあった。白魚氏の根拠地であった中通島の白魚はかつて「白魚千軒」と称されたといわれる。現在も五輪塔などの中世墓が残り，付近の海岸や畑からは青磁，備前焼の摺鉢，高麗青磁，石鍋などが表採されており，文献の記述を裏付けている。

その他の中世遺跡として榊ノ浦石塔群がある。通称「寺屋敷」といわれており，寺院跡の可能性がある。付近には積石塚，石垣，宝篋印塔などが残る。

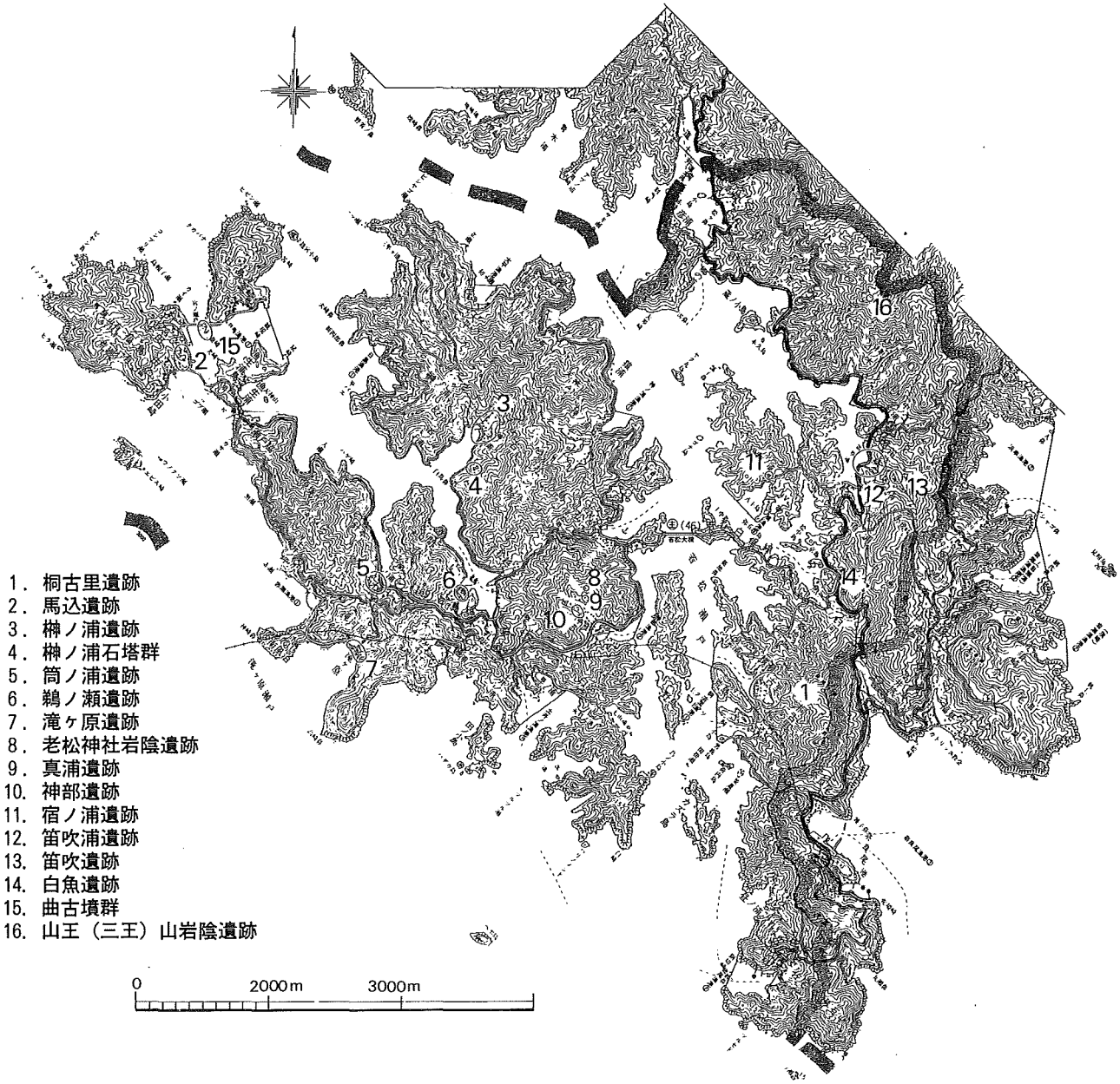
また若松町における中世の遺構，遺物として，従来より板碑が注目されていた（上五島高校1981)。「上五島高校紀要」によると，若松町内で確認される板碑は８ヶ所，44基ほどである。板碑のほとんどが砂岩の自然石を使用しており，海岸部に立地するという。

文献資料にみえる古代・中世の若松島や日島は，中国へ渡る航路にあたり，近海でしばしば船が難破している。「青方文書」は永仁６年（1298）に渡唐船が日島付近で難破したことを伝えている。

南北朝から室町時代では，文明年間（15世紀後半）に朝鮮で書かれた「海東諸国記」には，五島日島大守藤原朝臣盛が文明元（1469）年に朝鮮へ遣使したことが記されている。

【引用・参考文献】

上五島高校社会科1981「上五島町・若松町の板碑とその分布」『紀要』創立30周年記念号 長崎県立上五島高校
瀬野精一郎1972『長崎県の歴史』山川出版
瀬野清一郎・外山幹夫編1987『角川地名大辞典42長崎県』角川書店
田中重雄1970「五島若松二宮岩穴発見の報賽鏡について」『史迹と美術』第403号
長崎県土地対策室1982『離島振興開発地域 土地分類基本調査』長崎県
若松町教育委員会1980『若松町誌』若松町役場



第２図　若松町内遺跡地図（S＝1／１0,000）

第Ⅱ章　調査の経緯

第１節　調査の経緯

県内には約3,400箇所の遺跡があり，県教育委員会ではそのうち155箇所を長崎県の重要遺跡として台帳の整備をおこなっている。しかしこれらの重要遺跡については，規模，性格等について明瞭でないものが大半を占める。そこで県教育委員会では遺跡の平面的な広がりや遺物包含層の状況，遺構の分布状況・構成等を把握し，遺跡の保存・保護や開発事業に対する調整協議の基本資料として活用することを目的として，平成３年度から，重要遺跡の範囲確認調査を実施することにした。平成８年度からは主要遺跡内容確認調査として継続している。平成11年度は南松浦郡若松町桐古里遺跡および南高来郡有明町の一野遺跡を調査対象地とした。

桐古里遺跡はこれまで遺跡の存在は知られていたが，本格的な発掘調査はおこなわれておらず，遺跡範囲も地表面からの観察によるものであった。

平成11年５月に古門が若松町教育委員会に出向き，現地で町教委と協議をおこない，10箇所の調査地の選定をおこなった。調査は６月21日から７月２日までおこなった。調査期間中は梅雨の雨に遭遇し，実質の調査は５日ほどであった。そのため，図面などが作成できず，写真による記録を主として調査をおこなうしかなかった。

第２節　調査組織

桐古里遺跡の範囲確認調査は下記の体制でおこなった。

１．調査主体

長崎県教育庁文化課

２．調査者

文化財保護主事　古門雅高

文化財調査員　　尾上博一（現厳原町教育委員会）

３．調査協力

若松町教育委員会

教育長　　宮田又寿

事務局次長　　鵜瀬盛行

社会教育係長　荒木貞美

若松町立桐古小学校

校長　　中村達男

教頭　　松尾　正

第3図　桐古里遺跡周辺図（S＝1／2,500）

第Ⅲ章　調査の概要

第1節　土層

桐古里遺跡の土層は，基本的に第1層（表土，耕作土）をはずすと遺構面である。遺物は表土中に含まれる。原位置を保つ遺物は1層と2層（黄褐色混礫土層）の間より出土する。第2層は3～5㎝角の風化礫を含み，それらの礫は黄色，褐色を呈する。

第2節　各試掘坑の状況

1．第1試掘坑

山口 進氏宅裏の氏所有の畑に設定した。2m×3m。試掘坑の北東コーナーより，第1層（耕作土）と第2層（黄褐色土）の間より，弥生土器の底部および底部付近の体部が出土した。表土から20cmを測る。土器は直立していたとみられるが，胴部以上は削平されたと思われる。

2．第2試掘坑

山口 進氏宅前の道路をはさんだ畑に，2m×3mの範囲で設定した。畑は修道院の管理である。表土28～30cmで遺構面を検出した。2×2mの範囲の中で，南方に弥生時代中期の土器が集中する場所を確認した。設定した範囲のより詳細な状況を把握するため，さらに南北に50mづつ調査区域を拡大した。その結果，土器の集中地点を発見し，弥生中期の壺底部と楕円形の円礫の短側辺を片側だけ打ち欠いた石錘，熱をうけて変色したと思われる不定型の人頭大の砂岩を検出した。一部は赤色を呈する。土器の下にはやや緑色を呈する砂岩の板石が長側辺を上下にして立てられていた。一部に赤色を呈し，これも熱をうけたためと思われる。板石は厚さ6cm，長側辺約34cm，短側辺約10cmである。平坦部表面は一部磨耗しており，台石に使用されていた可能性がある。

壺底部および石錘をとりあげ，精査したところ，楕円形の土坑を検出した。

（1）土坑

長軸約50cm，深さ約23cmである。土坑内からは炭化物のほか，ごく少量の獣骨，土器片，黒曜石片，破砕した磨製石斧などが出土した。土坑内部は，西に一段下がって円形の土坑が存在する。土坑の上面には砂岩と方向を同じくして，長さ16～17cmほどの角礫が置かれていた。先述の人頭大の砂岩はこの上位に位置する。土坑底部から磨製石斧片が出土した。

出土遺物からみて，弥生時代中期に属すると考えられるが，遺構の性格は不明である。

（2）ピット（小穴）

土坑の北約40cmからは直径15cmのピット（小穴）が検出された。内部より弥生土器の小片が出土した。

第2試掘坑からは，上記の遺物のほかに，黒曜石剥片，チップ，焼けたアワビなどが出土した。

3．第3試掘坑

山口 進氏宅裏の休耕田に設定した。現在は空閑地であるが，かつては畑であったという。包含層

第４図　桐古里遺跡試堀坑配置図（S＝1／2,500）
★印は貝塚推定地

は存在せず，遺物の集中もない。第１層除去後，第２層上面にピットを２基検出した。

４．第４試掘坑

山口 進氏宅入り口前の畑に設定した。畑の管理は修道院である。表土下20ｃｍで遺物包含層を確認した。弥生時代中期の土器を中心に，砂岩製の砥石，黒曜石や安山岩・玄武岩の剥片，黒曜石の石核，弥生時代前期の土器口縁部が出土した。湧水がでて調査が困難であったため，包含層の途中で調査を中断した。

５．第５試掘坑

２ｍ×２ｍ。かつては家があったところである。表土下は客土で，客土下は礫まじりの川砂の堆積がみられた。流れ込みとみられる土器が数点出土しているのみである。

６．第６試掘坑

２ｍ×２ｍ。表土下は地山（第２層）で，包含層は存在しない。遺物の出土もみられなかった。

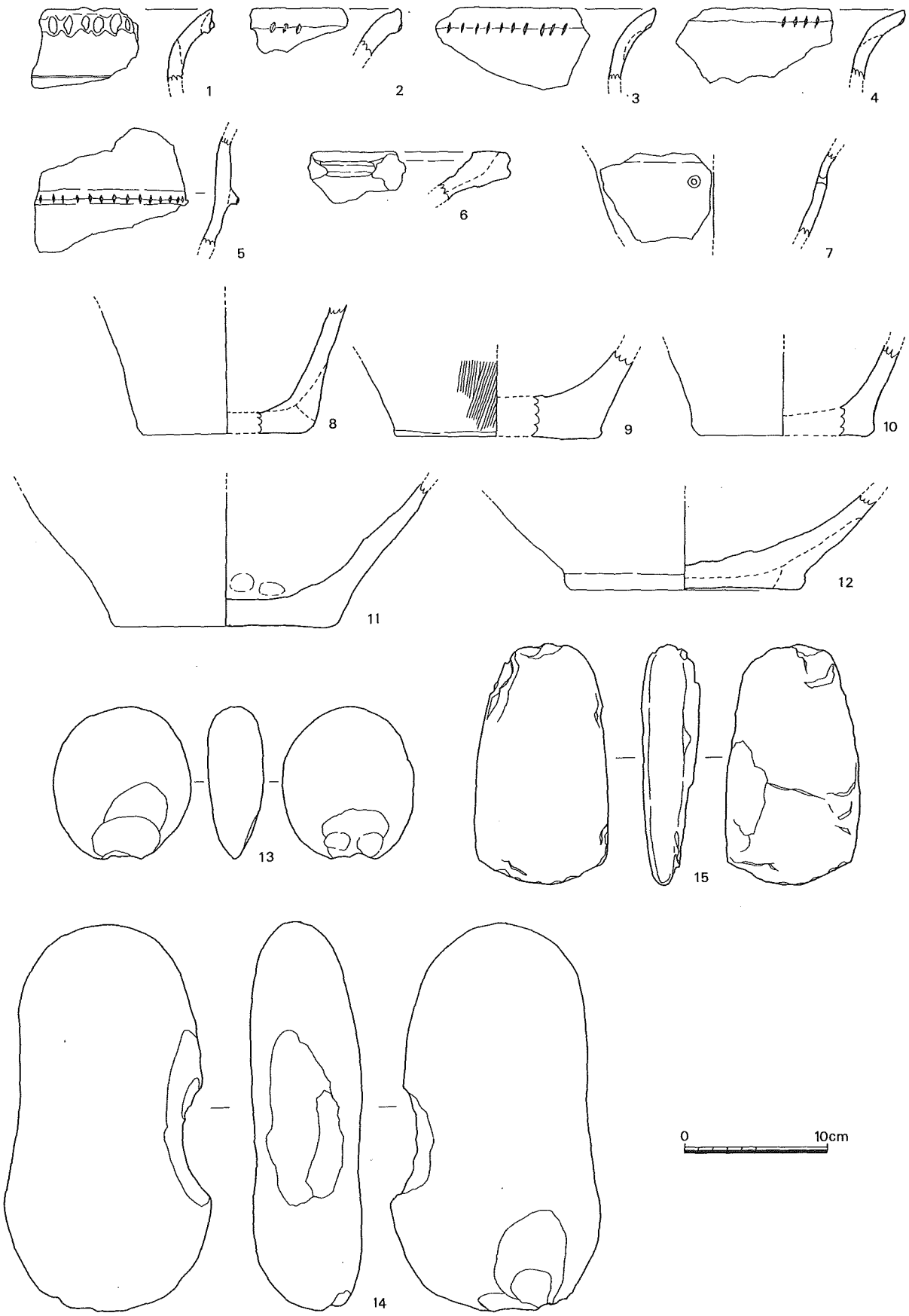
７．貝塚について

地元の方によると，桐古幼稚園の東側に隣接する荒地に以前，貝殻が塚状に盛りあがって廃棄されていたという。今回の調査で所在地を確認した。規模や所属時期など具体的な内容は未発掘のため不明である。

第Ⅳ章 出土遺物

第１節 土器（１～12）

１は外反する如意形の甕形土器の口縁部に，刺突による刻目が施されているもので，表土より出土した。内面はヨコハケによって調整されている。口縁端は三角に尖らせ，胴部には沈線が１条まわる。色調は暗褐色で，他の弥生土器とは色調が著しく異なる。胎土に長石や砂粒を含む。焼成はややあまい。２も口縁部に刻目を施し，如意形口縁をもつ甕形土器の口縁部である。刻目は口縁端部でも下側にほどこされている。第２試掘坑より出土した。色調は外面は黄橙色，内面は暗褐色である。胎土には砂粒を多く含み，焼成はややあまい。３・４も同様な資料である。３は表土から４は第４試掘坑より出土した。５は甕形土器の胴部に刻目突帯がつくもので，第４試掘坑より出土した。風化により調整は不明である。色調は暗灰色で，胎土には石英や砂粒を多く含む。色調は灰褐色で，焼成はややあまい。６は壺というよりも甕形土器の口縁部で，表土より出土した。口縁部の内外面に段を有するタイプである。内外面は明黄橙色で，胎土には若干の砂粒を含む。焼成は良好である。７は小形の鉢形土器のような器形ではないかとみた資料で，第２試掘坑より出土した。色調は褐色を呈し，胎土には金雲母を含む。焼成はややあまく，焼成後穿孔の補修孔をもつ。８・９・10は如意形の口縁をもつ甕形土器の底部である。８は第４試掘坑より出土した。復元底径9.0cm，色調は暗褐色である。胎土は砂粒を多く含み，焼成はややあまい。９は表土より出土した。復元底径は11.0cm，黄橙色を呈す。胎土には長石を含み，焼成は良好である。11・12は壺形土器ないし甕形土器の底部で，11は第２試



第５図　桐古里遺跡出土遺物（S＝1／3）

掘坑より，12は表土から出土した。11は外面は黄橙色，内面は灰褐色，胎土に絹雲母，砂粒を多く含む。焼成はややあまい。12は色調は橙色で，胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。

第2節 石器（13～15）

石鏃が6点出土している。いずれも黒曜石製である。13・14は石錘で，いずれも第2試掘坑より出土した。13は長軸7.9cm，短軸6.8cm，重さ230ｇを測る。石材は硬質砂岩である。14は長軸20.5cm，短軸10.9cmで，重さ1960ｇを測る。石材は硬質砂岩である。15は局部磨製の石斧で，頁岩製である。長軸12.6cm，短軸7.0cm，重さ390ｇを測る。

第3節　遺物小結

出土した土器は板付系の如意形口縁の甕形土器（1～4）と，亀ノ甲タイプの甕形土器（5），および口縁の内外に段をもつ甕形土器（6）である。如意形口縁の甕は口縁部の刻目が口縁部下半に施されたり，胴部に沈線をもつなど，板付Ⅱ式の様相を示す。6も板付Ⅱｂ式以降の甕形土器であり，亀ノ甲タイプの甕形土器も板付Ⅱｂ式以降である。したがって総じて板付Ⅱｂ式以降の土器群と考えられる。今回出土した資料では弥生中期まで降るとは言いきれない。一応，弥生前期後葉ということで理解しておく。

石器は石鏃などの狩猟具にくわえ，石錘や石斧が出土している。海や山に近い自然条件を生かした生産形態を反映したものと考えられる。

第Ⅴ章　まとめ

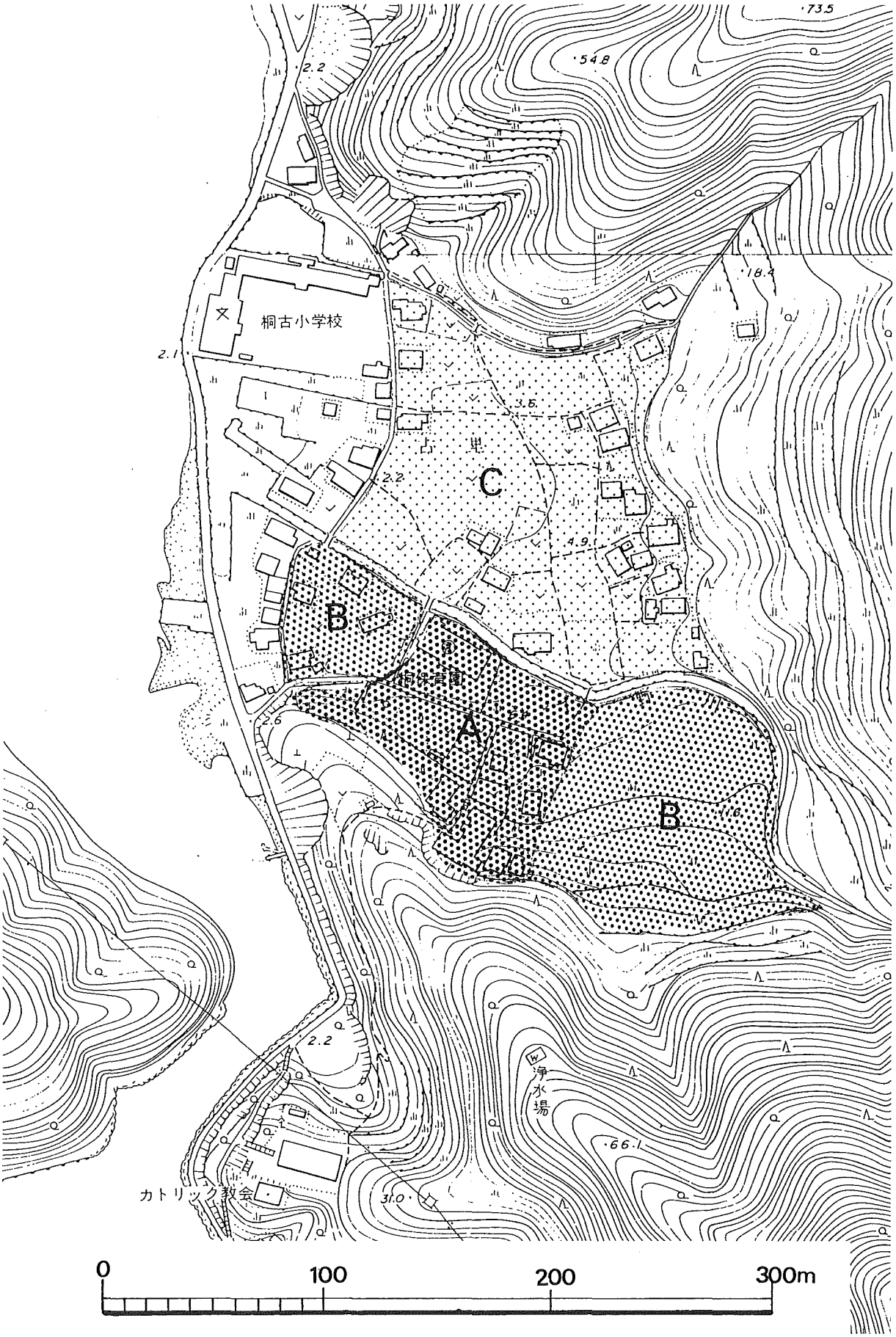
第1節　調査の成果

今回の調査により，遺跡の主な時代が弥生時代前期後葉（板付Ⅱｂ式～Ⅱｃ式段階）であることや，遺跡が入野川左岸を中心としてあり，右岸では遺物量が少ないことがわかった。遺跡の中心は山口進氏宅から桐古保育園一帯までの地域で，保育園裏にかつて貝塚があったらしい。地元の方によると，以前は塚状の地形であったという。また保育園前から西へ5ｍほど海岸寄りで地形が落ちており，旧海岸線とみられた。現在の桐古小学校は埋め立てであるため，旧海岸線は，桐古小学校裏から桐保育園の西側にかけてと判断された。

第2節　遺跡の範囲・取り扱いについて

今回の調査にもとづいて，遺跡範囲における重要度をゾーンで示した（第6図）。

Ａゾーンは，弥生時代前期の住居，墓地，貝塚が広がると推定される区域である。現段階で最も重要と考えられる区域で，現状のまま保存し，将来史跡指定・環境整備を行っていくのが望ましいゾーンである。**Ｂゾーン**は，弥生時代の遺物を包含し，遺構も検出される可能性を残した区域である。工事等の開発計画に際して保存のための設計変更の協議を必要とし，やむを得ない場合に緊急調査を実施すべきゾーンである。**Ｃゾーン**は遺物の包含状況はあまり良好とはいえないが，弥生から近世にかけての遺物を包含している区域である。工事等の開発行為があれば，町教育委員会による工事立会いを必要とするゾーンである。



第６図　桐古里遺跡ゾーニング図（S＝1／2,500）

ってみてください。これが土器ですね。中に砂とか小さな石が含まれているのは、強度を増すために入れたのでしょう。ひび割れとかないように強化剤として使ったのですね。

それからこれは黒曜石（火山岩の一種で灰色ないし黒色半透明・光沢に富み、断口は貝殻状である。昔のやじりなどに使われた。広辞苑）といって、やじりを作った材料となったものです。ナイフのように使ったり弓矢の先につけて獲物を獲ったのですね。これは触るときに気をつけてください。手を切りますから。黒曜石というのは火山の噴火によってできる石なので、五島にはありません。県内では佐世保の針尾とか西彼杵郡とかでとれますけど当時何らかの方法で運んできたんでしょうね。良質なものは佐賀県伊万里の方にあります。

これが実際に黒曜石で作ったやじりです。

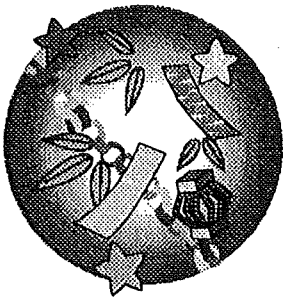
上手に作っていますね。これが完成するまでにはずいぶん失敗もしたでしょうね。これに棒を付けて獲物をねらったのですね。

あそうそう「と石」もでてきたんですが、向こうに持っていってしまいました。何かを磨いたのですね。「磨製石器」といって、石を磨いて何かを作った「砥石」と考えた方がいいでしょう。

何か質問はありませんか。

こうやって出てきたものはどこの財産になるんですか。

これはですね簡単にいえば国の財産になります。その辺に落ちているものを拾うのは個人の財産となるでしょうが、掘ると無断発掘ということになりますからいけません。今回みたいに調査で出てきたものは、落とし物扱いにいったんはなります。そして警察の方に届けます。警察の方から「これは文化財ではないですか」ということになって、紹介があります。ここで文化財だと認定したら今度は国のものになります。だから、教育委員会や学校の方で展示をしたいということになれば、国の方に譲与申請をしていただくことになります。国の方では「はい分かりました許可します。」ということになります。



ここで出てきたものは当時どんなことに使ったのですか。

そうですねやはり食料を採るのに作られたのです。食料獲得の道具です。漁業もやっておったようで、石のおもりも出てきました。アワビの殻もありました。土器は、食料を入れたりしていたんでしょうね。

ここから出てきた土器の大きさはどれくらいですか。

そうですねかなり大きなものですよ。高さ三十センチから四十センチくらいあります。浅いところに埋まっていますので、完全な形では出ておりません。破片ばかりですね。丸ごと出てくるのは望みがうすいかなという感じです。ただ向こうの方ではかなり埋め土が多いので望みがあるかもしれません。

お墓はこの辺にはないのですか。

私たちも探しているのですがまだありませんね。貝塚はあそこにあるのが分かったのですよ。ほら保育園の手前の物置があるでしょう。あのあたりです。貝塚というのは、昔の人が食べた動物の骨や貝がらなどをたくさん捨てたところです。

生活の周辺というのがここら一帯が住居跡だと思うんですよ。昔の海岸は保育園の少し先あたりまでだと思いますが、あの辺にたぶん墓地があり、人骨もあるのではないかと思うんですが、地元の方に聞いてもまだ人骨が出たとかいうことを聞いていないので、今のところ分かりません。墓地が見つかれば、我々の初期の目的も達成されるんですけどね。

でも、なかなか良い遺跡です。

第二次調査の計画はないのですか。

ああ、今のところはちょっとないんです。

この石には赤いところがありますが何ですか。

これは火を使った後です。ここのところが火があたったのですね。色が変わっています。

この調査はいつまでですか。

今週で一応終わりです。

みんなで「ありがとうございました。」とお礼を言って遺跡発掘現場を後にしました。

教頭先生が「二千年前に触って行きなさい。」といってみんなにいろいろ触らせてくれました。子ども達への素晴らしい心の古里づくりをしていただいたようで、とてもうれしく思いました。子ども達も私たちの住んでいる桐古里は歴史のある素晴らしいところなんだと心にしまってくれたのではないかと思います。

今週のうちにまたびっくりするようなものが出土するといいです。

作業をしていただいている皆様、まことにお疲れさまです。

発行
長崎県南松浦郡若松町桐古里郷四五三番地
若松町立桐古小学校長　中村達男
発行日　平成十一年七月一日

第7図　桐古小だより①

桐古小だより七号

●めざす子ども像

・仲よく助け合う子
・よく考える子
・たくましく生きる子

七月に入りました。一学期のまとめをする月になりました。健康に気をつけて努力して欲しいです。

四年生の深浦聡美さんが「夏の歌」の詩を届けてくれました。前段は他の人と共に作っていたのですが、これで一つの曲の一番ができそうです。完成しましたら、桐古小だよりでご紹介します。お楽しみに・・・。

縄文時代後半から弥生時代の桐古里遺跡の発掘が進んでおります。昨日は土器ややじりが出土しましたので、現場に行って見学させていただきました。子ども達の学習ぶりを紹介します。

全校朝会の話から

六月二十九日全校朝会で次のような話をしました。一部紹介します。

あらー、雨漏り・・・。だれも気づかないんだ。動いてくれないのかなぁ。（素早く雨漏りで濡れているところを拭いてくれる）ありがとう、早いね。あっという間に終わったね。

先生達が一生懸命拭いていらっしゃるのに黙って座っていたので何か変だなと思いましたよ。昨日は雨がひどかったですね。風もすごかったですね。雨漏りがあちらこちらでしていますので困りますね。おりこうに座っている場合と、何かしようと考えて動かなければならない時があると思いますよ。

さて、史跡発掘があっていますね。みなさんも聞いていて知っていますね。土器が出できたそうですよ。二千年前の地層から出てきたそうです。その土器を見せてもらおうと思っていたんですけども、雨が降ってきたので残念でした。私たちの祖先が使っていたかもしれない土器が出てきたわけですからすごいことですよ。みなさんはこんなできごとに興味はありませんか。もしかしたら有名になる遺跡が発掘されるかもしれませんよ。楽しみですね。「桐古小学校横遺跡」なんていう名前が付いたりして新聞なんかに載ったらいいね。なにかウキウキしますね。土器が出たら何年前のものか正確にわかるようになっているんですね。コンピューターで計算するんでしょうね。まだ土器が土の中に埋まった状態だそうで、慎重に掘り起こしているそうです。出てきたら桐古小学校のみなさんに見せてくれると思いますから社会科の学習に役立ててください。

二千年前の人たちはどんな生活をしていたんでしょうね。こんな雨の時なんか大変だったでしょうね。水が住みかまで入ってきたりして、ゆっくり寝ることができなかったでしょうね。私たちはこんな広い体育館があって幸せですね。黙って座っている場合ではなかったでしょうね。そのうち水が来ないように床をあげて家を造ったり工夫したんでしょうね。

ところでこの前の朝会で、私たちの生きている年齢を考えるときに、例えば十歳の人は、人類の進化を考えると今から三百五十万年くらい前からすると三百五十万年と十歳という具合に考えられる。という話をしましたよね。祖先からの知恵が私たちの中に受け継がれているのではないかという話をしました。昔の人はどんなことを考え、どんな道具を使っていたんでしょうね。石を叩きつけて出来たものや。磨いたものを使っていたのが始まりでしょうか。弥生式土器なんて言うと、高学年のみなさんは分かると思いますが、そんな時代の土器が出てきていると聞いていますのでほんとに楽しみですね。

今日はドキドキするようなお話をしました。

（ザーザーとまた激しく雨の音が体育館に響いてくる・・・。）

桐古里遺跡発掘見学

二千年前のやじりや土器がぞくぞく発見！

長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班文化財保護主事　古門雅高さんの話をみんなで聞きました。

六月三十日

ここは、今調査中の桐古里遺跡です。串を刺しているところが土器が出てきているところです。作業員の方々にきれいに洗ってもらっているのが今日出てきた土器です。石のように見えますが、あれが土器のかけらです。この掘った高さは二千年前の人たちが生活していた高さです。普通の遺跡に比べると少し浅いところにあって大変楽でした。この一帯は堆積物がないのでこれくらいの深さで土器が出てきました。

では実際に出てきたものを手に取

第8図　桐古小だより②

第Ⅵ章　長崎県の縄文晩期から弥生時代前期の土器の様相

はじめに

長崎県内で調査にあたっていると，他県にくらべて，遺構の中からまとまった量の土器を出土する遺跡がきわめて少ないと感じる。過去の調査で，よい資料が出土しても未報告であったり，報告書が写真集であったりと不備なところもある。したがって，土器の研究がなかなか進まないのが現状である。長崎県の縄文晩期から弥生前期の土器は一体どのような様相をみせるのだろうか（註１）。このような関心から，今回，小稿で概観することにした。長崎県の地域性を少しでも抽出できればとの思いである。もちろん、県内すべての土器を見たわけではないし，九州北部の土器を広く実見したわけでもない。さらに，本稿は土器の型式や編年を考察するものでもない。九州島がすっぽり入るくらいの県域をもつ本県の土器を広域的に概観しようとするものである。多分に観念的であり，土器型式の認定などで事実誤認や誤解があると思われる。そのような点は，再度検討して修正し，将来に備えたいと思う。

１．山の寺式土器と原山式土器をめぐって

（１）長崎県の縄文晩期前葉の土器について

長崎県で縄文晩期前葉の土器の実態が比較的わかっているのは島原半島である。筆者は島原半島の晩期前葉の土器の変遷を有明町中田遺跡出土土器→島原市畑中遺跡出土土器と考えている（古門1995)。大略，中田遺跡出土土器は肥後地方の天城式に，畑中遺跡出土土器は肥後地方の古閑式に対応すると思っている。島原半島以外の地域では，縄文晩期前葉の土器の様子はあまりわかっていない。そもそも，この時期の遺跡が島原半島に集中していて，長崎県の他の地域には希薄であることが原因である（註２)。このような状況は，今後もあまり変化しないと考えられるため，これからも島原半島を中心に土器の集成や検討が行われなければならないであろう。

（２）長崎県の縄文晩期中葉および後葉の土器

縄文晩期土器の型式名のうち，島原半島の地名が冠されたものに，晩期中葉の礫石原式土器，晩期終末（弥生早期）の山の寺式土器，原山式土器などがある。礫石原式土器は島原市礫石原遺跡，山の寺式土器は深江町山の寺梶木遺跡，原山式土器は北有馬町原山支石墓群出土の土器を指標としている。礫石原式遺跡は鹿児島県黒川洞穴の土器をもって認定された黒川式土器の，さらに単純な出土様相をもつ遺跡を探索するなかで調査がおこなわれたものである。設定された礫石原式土器の型式名は，黒川式土器という名称にとってかわることはできなかったが，島原半島の当該期の型式名として，今でも有効であろうと考える。

また，長崎県北部の晩期中葉の土器型式として，佐世保市宮の本遺跡出土土器を指標とした宮の本式が山崎純男・島津義昭両氏によって設定されている（山崎・島津1981)。大略，黒川式・礫石原式併行期の土器と考えてよいのであろう。宮の本式は福江市白浜遺跡でも確認されるため（弥生土器研究会1984)，五島灘沿岸地域に一定の分布範囲をもつといえる。

一方，山の寺式という型式名は，現在もなお九州の縄文晩期終末の土器型式名として，広く定着していながら，その意味する内容は研究者によって異なっている。学史的には，一度消えて，復活するといった運命をたどった型式名でもある。したがって，山の寺式という型式名を使用する際には，使用者自らが山の寺式土器の編年観を提示してからでないと使えないという，きわめてやっかいな型式名となっている。これに対して原山式という型式名は，いまや学史のなかにしかみいだせない型式名といってもよい。県内の関係者でも，原山式という型式名を積極的に使用する者は少ないだろう。はたして原山式土器の名は島原半島でも消えてしまう運命なのであろうか。

第９図　関連遺跡位置図

（３）そもそも山の寺式土器とは

山の寺式土器は，長崎県南高来郡深江町梶木山の寺に所在する山の寺遺跡出土土器を指標とする土器型式であると書けば，かなり教科書的な文章となる。山の寺遺跡の代表的調査としては，1957年（昭和32）６月（１次調査），８月（２次調査）の古田正隆，森貞次郎がおこなったＡ～Ｆ地点の調査（註３）と，1960年（昭和35）８月と1961年８月に，日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会が調査したＡ地点，Ｂ地点，Ｃ地点の調査がある。前者は1973年に古田によって報告されたが，後者は，概報こそでているものの，本報告はなされておらず，とくに山の寺式土器を主体としたといわれるＢ地点出土の土器の実態が未だ不明で，このことが「山の寺式土器」をめぐる混乱の最大の要因といえる。現在公表されている山の寺式土器の実測図について，中島直幸は「山ノ寺遺跡では黒川式から夜臼式までの混在した包含層のあるＡ地点と，山ノ寺式土器のみを純粋に出土したＢ地点とが調査され，古田らの表採資料も有名である。現在，実測図として公表されている資料は，Ａ地点と表採遺物の一部分であるために，多くの人々に誤解をあたえている」と指摘した（中島1982)。

『九州考古学』10に掲載された山の寺遺跡の概報を見る限り，Ａ地点の土器は従来，黒川式とか礫石原式と呼称された晩期中葉の土器が中心で，これに対し，Ｂ地点出土土器は刻目突帯文土器を主体としていたことがわかる。山の寺式土器といった場合に，当初，森・乙益は「山ノ寺Ｂ地点の土器」をもって山の寺式としたが，その後，森は山の寺Ａ地点の土器をもって山の寺式土器としようとした

（森1982）。ただ，森の提唱は，山の寺遺跡調査以降に，北部九州で進んだ当該期の土器編年を考慮するなかで，刻目突帯文土器を夜臼式土器の範疇で整理しようとした動きの中で生じたものである。

（4）山の寺遺跡B地点の土器とはどのような土器なのか

それでは，山の寺遺跡B地点の土器とはどのような土器なのであろうか。山の寺遺跡B地点出土の土器は，現在，国学院大学に保管されている。当該期の土器編年をおこなった研究者はすべからく，国学院大学の資料を実見している（註4）。

筆者は，山の寺遺跡B地点の土器を実見したわけではないので，これ以上の検討はできないが，研究者によって同じ土器をみながら，編年的位置付けや，時間的な前後関係が異なるのはよくあることである。山の寺遺跡の刻目突帯文土器については，A地点出土のものも，B地点出土のものも変わらないという研究者もいる。要は山の寺遺跡B地点の資料が一日も早く公開され，その上で議論されることが必要であろう（註5）。

現在，島原半島から周辺地域で山の寺式土器段階の刻目突帯文土器とみなされている資料は大村市黒丸遺跡出土土器（稲富1980）および小浜町朝日山遺跡出土土器（藤田・安楽1981）である。いずれも突帯部の刻目が指頭による刺突や棒状工具による刺突でおこなわれており，従来言われているような粗野な刻目突帯文を特徴としている。

（5）そもそも原山式土器とは

原山式土器の型式的内容は乙益重隆が夜臼式土器の説明のなかで，「長崎県南高来郡北有馬町原山出土の原山式土器は，広義の夜臼式と解すべきであろう」としたものがよく知られている（乙益1965）。

森貞次郎は，より具体的に原山支石墓出土土器と夜臼式の比較をおこなっている。それによると「いま刻目突帯文土器の刻み目や条痕文の手法が粗大で古式とみられるものを夜臼Ⅰ式とし，弥生式土器に伴うものをⅢとし，弥生式土器を伴わないもので，弥生式土器より以前のものか，または弥生式土器と併存する時期とみられるものをⅡとして夜臼式を3分類された上で原山支石墓の「A地点支石墓群は夜臼Ⅰ，C地点支石墓群の第3支石墓も夜臼Ⅰ，第1支石墓は夜臼ⅠまたはⅡ，D地点支石墓群は夜臼Ⅱ－Ⅲ，C地点西方の土器群は夜臼Ⅲとみられるとされた（森1982）。

実測図が公表されているのは，夜臼Ⅱ－ⅢとされたD地点（D群）支石墓出土土器と，弥生土器と共伴したC地点西方の土器群である。

しかし森によって公表された内容だけで，原山式土器の全容とするには資料が少なすぎる。このことが，本県でも原山式土器が島原半島の夜臼式併行期の土器という漠然とした認識しかもたれていない現状に現れている。

（6）山の寺式土器（山の寺B地点出土土器）・原山式土器と夜臼式土器・板付式土器の併行関係

次に，山の寺式土器と原山式土器は北部九州編年ではどのような編年的位置付けがなされているかみてみよう。板付遺跡の夜臼単純層より下層から出土する刻目突帯文土器を山崎は「夜臼Ⅰ式」とよび，「山の寺式土器に丹塗り磨研の壺形土器が伴うことを考えれば，山の寺式土器は夜臼Ⅰ式，Ⅱa式に平行する土器」で，「後続する原山式土器は板付Ⅰ式あるいはⅡa式に平行する可能性が強いと

考えている」とした（山崎1978)。山崎は山の寺式や原山式を島原半島という局所的な地域色の強い土器として理解しようとする。森貞次郎も同様な考え方をとった。そのことが，先述したように，山の寺遺跡A地点の土器（黒川・礫石原式土器が主体）を山ノ寺式とし，山の寺遺跡B地点出土の土器を夜臼式の型式名で整理しようという方向にあらわれる。

一方，中島直幸は，菜畑9－12層の土器を「山の寺式」とよんだ。そして「菜畑9～12層の土器をもって『山の寺式』土器の再構成をおこない，夜臼式単純よりも一層古い突帯文甕，あるいは壺の初源期の土器型式として設定し直」したのである（中島1982)。さらに「原山式は夜臼単純→夜臼式に相当する」（中島・田島1982）とし，「何故に山ノ寺式＝夜臼式並行，原山式＝板付式並行（後略)」となるのか「理由が不明確である」とした。すなわち，山の寺式土器は玄界灘沿岸にも見いだせるのであって，山の寺式を島原半島の地域色の強い土器とみて，夜臼Ⅰ式と併行させる山崎・森とは異なる見解を示したのである。

田崎博之も「山の寺式」を設定しているが，「山ノ寺式と言っても，長崎県山ノ寺遺跡B地点出土土器を指標とする『山ノ寺式』とは異なる。この『山ノ寺遺跡B地点式』ともいうべき土器群は，夜臼式と時間的に併行するものである」として（田崎2000)，従来の「山の寺式」については山崎・森と同じ立場にたつ。ただ，田崎の設定した「山の寺式」土器は型式学的手法に加えて，遺構からみた一括性や共時性を重視して導き出されたものであって，「山の寺遺跡B地点出土土器」とは異なり，層位を重視した中島の「山の寺式」とも異なるということである。

一方，原山遺跡の土器については，橋口達也が検討をおこなっている。橋口は原山遺跡の土器が「玄界灘沿岸のものと共通しており，時期的にもたいした遅れはないものと考える」とし，「原山遺跡の下限が板付Ⅱａ式併行期まで下がるとは考えられない。」として，山崎の見解とは異なる考えを示した（橋口1985)。

先述したように，小稿は様式としての「山の寺式」に関わる，山崎・橋口・中島らの論争を検証するのが目的ではないので，これ以上の記述はおこなわない（註6)。地元の担当者としては，島原半島の山の寺式土器とは，あくまでも「山の寺遺跡B地点出土」の土器であって，この土器の検討から始めなくてはならないと考える。したがって今後，島原半島では「山の寺式」という型式名をいったん棚上げして，「山の寺遺跡B地点出土土器」ないし，田崎博之が論文中で使用した「山の寺遺跡B地点式土器」（田崎2000）として，土器そのものの検討から始めることが大切ではないかと思っている。

また，原山式土器については，ある程度の時間幅を有すると考えられる。標式となる原山遺跡出土土器も，先述のとおり森の唱える夜臼Ⅰ～Ⅲが混在しており，橋口も曲り田（古）式から夜臼式までを含むとみている（橋口1985)。まとまった資料が出土するまでは具体的な検討ができないかもしれない。後述するが，島原半島を含めた有明海沿岸地域では，弥生時代前期を通じて刻目突帯文土器が甕形土器の主体を占めることがわかっている。諫早市・大村市も同様である。板付Ⅰ式土器や板付Ⅰ式土器類似の土器は，島原半島・諫早・大村地域には存在しない。この地域で板付式土器が把握でき

るのは板付Ⅱ式土器段階からである。しかも出土量は少ない。島原半島で「原山式」という型式名を使うにあたっては，山の寺遺跡B地点出土土器のような，古相の刻目突帯文土器と，亀ノ甲タイプの甕のような，刻目突帯文土器の系譜をひく弥生土器を除いた残りの刻目突帯文土器に限り，「原山式」土器と呼称するしかないであろう。しかし前述のように原山式土器という型式名称にはさまざまな問題がある。やはり島原半島では，いったん「原山式」という型式名称を保留し，「原山支石墓D地点出土土器」と限定的に呼び換えたほうがよいと考える（註７）。

２．長崎県の弥生前期土器

（１）長崎県の弥生前期土器研究

長崎県は，県域の中に九州島が収まるほどの広さをもつ県である。したがって，土器の変化も地域によってかなり異なる。地域的な変異がありながら，資料が少ないという二重の制約から，なかなか全体象が把握できないというのが現状である（註８）。

佐世保市教委の久村貞男は，佐世保市四反田遺跡の報告において「弥生前期前半の板付Ⅰ式は玄界灘沿岸に分布する土器であり，周辺部においては，依然として晩期終末期の土器文化を主流とし，当該地域においても同様で，板付Ⅰ式に相当する時期は突帯文土器の山の寺・夜臼期である」と記した。さらに久村は福岡平野などにみられる板付Ⅰ式土器と夜臼式土器の共伴現象が，県北地域では板付Ⅱａ式と夜臼式土器との間で生じていると報告している（久村1994)。このように久村の指摘は長崎県域の板付系土器の出現について大変示唆的なものである。

しかし久村がいうように，県北地域には板付Ⅰ式土器はないとしても，本県の他の地域には招来されている可能性がある。本県の古手の板付系土器が，板付Ⅰ式なのかⅡａ式なのかという問題も解決しなければならない問題である（註９）。

（２）長崎県の弥生前期土器の概観（註10）

標題に示したような概観を行う前に，当該期の区分をここでは下記のように設定したい。すなわち板付Ⅰ式と板付Ⅱａ式併行期を長崎県の前期第Ⅰ期とし，板付Ⅱｂ式と板付Ⅱｃ式併行期を前期Ⅱ期とする。前期Ⅰ期の土器には，刻目突帯文系甕，板付系甕，両者の折衷系甕が存在する（註11)。前期Ⅱ期には板付系甕と刻目突帯文系甕から成立した亀ノ甲タイプの甕がある（註12)。第10図の里田原遺跡出土の甕形土器で示すと，板付系甕（Ａ・Ｄ)，折衷系甕（Ｂ)，亀ノ甲タイプの甕（Ｃ）である。

前期Ⅰ期は五島地域，県北地域でまとまった資料がみいだせる。五島地域で前期Ⅰ期の土器を出土した遺跡は，宇久町宇久松原遺跡，小値賀町殿寺（とべら）遺跡，同笛吹（ふえふき）遺跡，若松町滝河原（たきがわら）遺跡，岐宿町岐宿（きしく）（寄神）貝塚，福江市白浜貝塚などである。このうち宇久松原，殿寺，笛吹，滝河原の各遺跡は埋葬遺跡であるため，資料にかたよりがみられ，今回は，日常土器を出土した岐宿貝塚，白浜貝塚をとりあげる。しかし白浜貝塚の報告は写真集のため，報告としては不十分で，岐宿貝塚の報告は昭和30年代の報告のため，現在の検討には耐えられない。ところが，幸いなことに両遺跡の土器は，1984年（昭和59）に弥生土器研究会の手で公表されている

（弥生土器研究会1984）。白浜貝塚の資料は製図こそされていないが，精緻な実測図によって土器の内容は充分に把握できる。

白浜貝塚の前期Ⅰ期の土器には，刻目突帯文系甕と板付系甕が存在する。刻目突帯文系甕と板付系甕の比率はよくわからない。Ⅱ期になると，板付系甕に折衷系甕が加わる。亀ノ甲タイプの甕も存在するが少なく，客体でしかない。

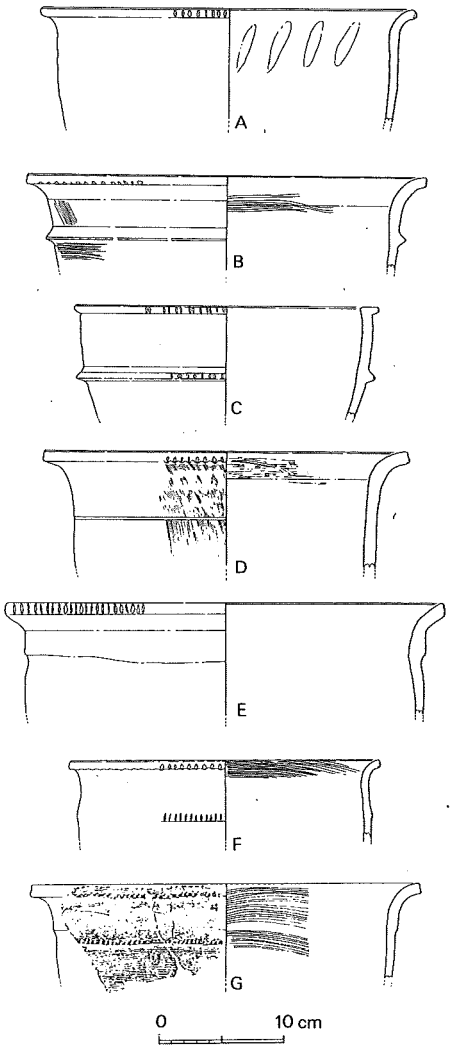
岐宿貝塚では，刻目突帯文系甕はみられない。板付系甕，折衷系甕，亀ノ甲タイプの甕がある。したがって岐宿貝塚の土器は前期Ⅱ期が主体とみられる。弥生土器研究会の資料では代表的な土器を抽出して掲載しているため，比率はよくわからない。

このように、五島地域では前期Ⅰ期の段階で板付系甕が出現するが，主体は刻目突帯文系甕である。Ⅱ期にも引き続き板付系甕が使用される。Ⅱ期には亀ノ甲タイプの甕も出現するものの，客体にすぎないことがわかる。

県北地域で板付系土器を出土する遺跡は，佐世保市四反田（したんだ）遺跡，田平町里田原（さとたばる）遺跡，平戸市津吉（つよし）遺跡などである。

四反田遺跡の前期Ⅰ期の資料としては，刻目突帯文系甕と板付Ⅱａ式甕が組み合った小児甕棺，板付Ⅱａ式土器を用いた甕棺が存在する。次のⅡ期は，板付系甕，折衷系甕，亀ノ甲タイプの甕からなる。亀ノ甲タイプの甕が全体に占める割合は比率は低く，７％と報告されている（久村1994）。

里田原遺跡では1988年（平成元）から1990年にかけての調査で，当該期の良好な資料が出土している（安楽1992）。弥生土器の主体は前期Ⅱ期である。板付系甕，折衷系甕，亀ノ甲タイプの甕がある。甕の型式は甕Ｆ・甕Ｇを除くと，佐世保市四反田遺跡の甕と共通している。四反田と同じように亀ノ甲タイプの甕はきわめて少ない。なお下層より出土している刻目突帯文系甕は，縄文土器として報告されているが，先行する前期Ⅰ期の土器群である可能性が高い（註13）。

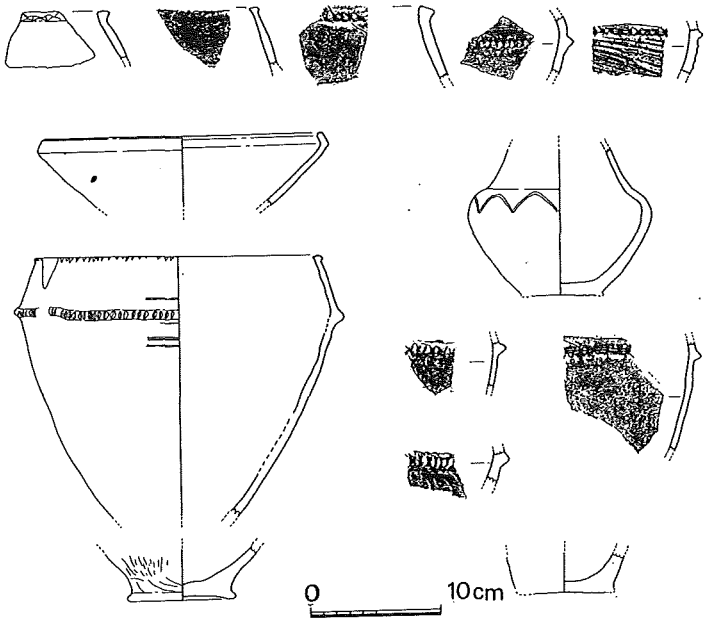


第10図　里田原遺跡出土の甕形土器（S＝1／6）

このように，五島地域や県北地域の前期Ⅰ期

では，板付系甕の存在は希薄で，主体は刻目突帯文系甕である。Ⅱ期になると逆に板付系甕が主体となっており，亀ノ甲タイプの甕は少ないことがわかる。

次に県央・島原地域であるが，前期Ⅰ期の様相をよく示す遺跡が，北高来郡高来町の上田井原（かみたいばる）遺跡である（高野1993）。試掘坑からの出土であるが，出土層位も限定されており，一括資料と考えられる。出土した板付系壺は板付Ⅱａ式に併行段階のものとみられる資料で，刻目突帯文系甕を伴う。



第11図　北高来郡上田井原遺跡第14試堀坑出土土器（S＝1／6）

調査者はこの甕を「亀ノ甲タイプの甕」と報告しているが，亀ノ甲タイプと呼ぶならば古い型式となるだろう。ここでは刻目突帯文系甕としておく。甕の型式名称はさておき，この地域の前期Ⅰ期は，このように刻目突帯文系甕と，板付系壺とがセットになっていることがわかるのである。

諫早市小野宗方（おのむなかた）遺跡では，包含層から前期Ⅱ期の土器がまとまって出土しており，この地域の前期Ⅱ期の土器の様相をよく示している（川瀬1994）。出土した土器は亀ノ甲タイプの甕であるが，口縁部の突帯が小さなものが含まれており，このタイプの甕でも古手のものであろう。共伴する壺は板付系のものである。この地域ではⅡ期になっても刻目突帯文系の弥生土器である亀ノ甲タイプの甕が主体で，それに板付系壺が伴い，板付系甕は客体であることがわかる。

大村市黒丸（くろまる）遺跡では，平成６年度に調査されたⅢ－７区の第１号土坑より，亀ノ甲タイプの甕２点と城ノ越式段階に多くみられる壺が出土している（町田1996）。この地域の前期Ⅱ期の末期の土器様相といえよう（註14）。

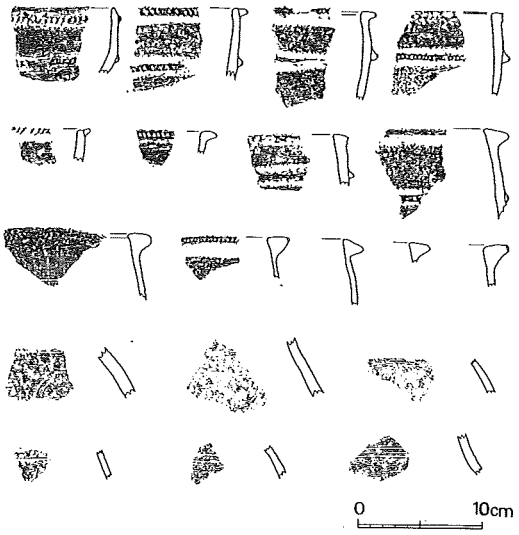
３．まとめ

長崎県の弥生前期の甕形土器には，刻目突帯文系甕，板付系甕，折衷系甕，亀ノ甲タイプの甕が存在する。弥生前期をⅠ期（板付Ⅰ式・Ⅱａ式段階），Ⅱ期（板付Ⅱｂ式・Ⅱｃ式段階）に分けると，それぞれの時期と地域で，主体となる甕の型式が異なっている。

五島地域のⅠ期は板付系甕は存在するものの，主体は刻目突帯文系甕である。Ⅱ期になると，板付系甕が主体となる。折衷系甕や亀ノ甲タイプの甕も存在するが，亀ノ甲タイプの甕は客体でしかない。この五島地域とよく似た状況をみせるのが県北地域である。Ⅰ期は刻目突帯文系甕が主体を占めるものの，Ⅱ期では板付系甕が主体をしめるようになる。亀ノ甲タイプの甕も存在するがその量は少ない。

Ⅰ期における板付系甕の出土は五島地域のほうに一定量の土器が出土しているようである。宮崎貴夫は島嶼部のほうに，本土部より早く新たな型式の土器が一定量出土する原因として，島嶼部では地元での土器生産が行われず，島外からの搬入によってまかなっていたからではないかと推論しているが，傾聴に値する。

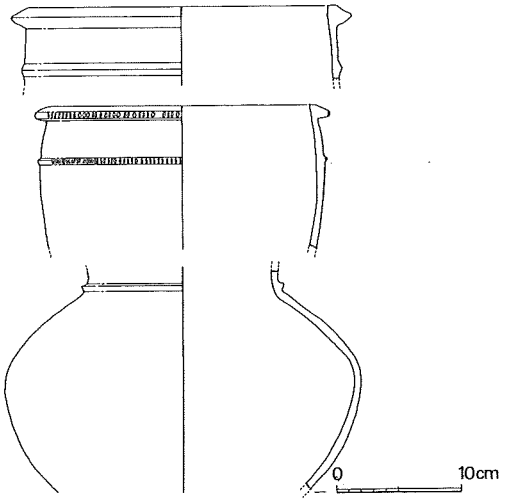
次に，県央・島原地区では，Ⅰ期の主体が，五島地域や県北地域と同じく刻目突帯文系甕であるが，両地域に比較すると板付系甕の存在はきわめて希薄である。Ⅱ期になっても板付系甕が主体となることはなく，亀ノ甲タイプの甕が主体となり，ここで五島・県北地域とは決定的に異なった様相をみせるのである。



第12図　小野宗方遺跡出土土器（S＝1／6）

したがって，長崎県の前期弥生土器の状況は，前期Ⅰ期（板付Ⅰ式・Ⅱａ式段階）では，刻目突帯文系甕が主体を占め，Ⅱ期には五島・県北地域で板付系甕が主体を占めるものの，県央・島原地域では刻目突帯文系甕から成立した亀ノ甲タイプの甕が主体を占めるとまとめることができる。

なお，長崎県の弥生土器については，弥生後期から古墳時代初頭にかけての島原タイプの土器（宮崎1997）についての問題があるが，機会をあらためてとりあげることにしたい。



第13図　黒丸遺跡 Ⅲ－７区第１号坑出土土器（S＝1／6）

【註】

註1　平成8年6月に長崎県考古学会の総会が大村市で開催され，「弥生文化成立期における地域的諸相について」というテーマで研究会が開かれた。研究会には，佐賀県の中島直幸氏，福岡県の吉留秀敏氏，熊本県の清田純一氏，長崎県佐世保市の久村貞男氏，長崎県大村市の大野安生氏が発表された。中島・吉留両氏の考えはその時，既に活字となって発表されていたが，清田氏もその後『肥後考古』誌上に発表された（清田1998）。久村氏の発表内容は既に報告書に掲載されている。大野氏は大村市黒丸遺跡沖田地区出土土器を検討され発表されたが，その結果は近く論攷として公表される予定である。

またこの時，事務局が作成した資料のなかに，「島原半島における縄文後期後半～晩期の様相」と題した一覧表があるので掲載しておく。島原半島という限定された地域の資料であるが，当地の当該期遺跡を理解するうえで格好の資料と思われる。作成者は長崎県教委の宮崎貴夫氏である。

時期		土器型式	島原半島の主な遺跡	石器類：十字形石器	石器類：石刀・石棒	石器類：石錘	石器類：扁平打製石斧	石器類：穂形石器	石器類：扁平石斧	石器類：小形刃器	石器類：石片	石器類：石斧	その他遺物：土偶	その他遺物：土製品	その他遺物：組紐形土器	その他遺物：紡錘車	その他遺物：垂飾	その他遺物：痕跡	立地：海浜部	立地：低台地	立地：山地	墳墓：土壙	墳墓：幼児墓	墳墓：支石墓	墳墓：甕棺
後期 後半	黒Ⅰ色研磨期Ⅱ	西平式	筏	●		●	○	○					●							+	●		+	+	
		三万田式	筏・小原下	●	○	●	●	●					●					○		○	●		○	●	
		御領式	筏・中田	○			●	●										○		+	●		○	●	
晩期 前半		(大石式)	筏・百花台・国崎			○	●	●												○	○	●	○	●	
		(黒川式)	畑中・礫石原・国崎			○	●	●												○	○	●	○	+	●
		+	礫石原	●			●	●		○				●	●	●	○				○	●		+	●
晩期 後半	突帯Ⅰ文期	夜臼Ⅰ式	山ノ寺・朝日山	●		●			○	○				●	●	●	●			+	●		+	+	
		夜臼Ⅱa式	原山・西鬼塚					●		○		●	●	●	●		●			+	●		+	●	●
		夜臼Ⅱb式	原山C・山ノ内					●				●		●							○	●	+	+	●

第14図　島原半島における縄文後期後半～晩期の様相

註2　福田一志は縄文後期初頭から（Ⅰ期：南福寺・坂の下式段階）から，中葉（Ⅱ期：鐘崎・北久根山式段階）までは，壱岐・対馬・五島などの島嶼部や西彼杵半島や長崎半島の五島灘沿岸部に遺跡が多く形成され，外洋性漁労文化を基盤としたネットワークが背景にあったことを指摘した。それが次の後期後半になると西平式段階を過渡期として，従来のネットワークの一部が崩壊したことにより，遺跡の拡散および減少が生じたとする。さらに三万田式・御領式段階になると，島原半島を中心に遺跡の規模が大きく，丘陵上に展開するようになり，漁労に加えて原初的な農耕が付加された新たな社会文化の形成をとげた。

このように西平式段階を過渡期として遺跡分布が変化する原因のひとつとして海水面の変動（具体的には縄文後期海進）をあげている（福田1999）。

註3　森は1次の調査には参加しておらず，2次調査に参加した（古田1973）。

註4　たとえば唐津市菜畑遺跡の調査者である中島直幸は「この土器を見る限り，菜畑9－12層の土器にほぼ相当する」と考え，さらに「この中には私の分類でA・B・H・K・L・M・Oの各土器が含まれていた」といっている（中島・田島1982）。一方で中島は，「(菜畑) 9－12層出土土器を山ノ寺式土器としたが，山ノ寺遺跡B地点出土土器とすべての面で一致する訳ではない。例えば深鉢A，B，浅鉢K，甕L・Mについては共通するが浅鉢Ⅰ，壺N・Oは山ノ寺遺跡にはなく，その他の器種についても不明な点が多い」とも書いている（中島1982）。

同じく山の寺遺跡B地点の土器を実見した藤尾慎一郎は，「(B地点の土器は) 未報告のため詳細は明らかでないが，山ノ寺遺跡B地点の土器を実見した際の観察によれば，Ⅱ1・ⅢA1・ⅢA2とⅢC1・ⅢC2・ⅢD1が含まれている。中心となるのは，ⅢA1とⅢC1である。さらにこのような傾向は山ノ寺梶木遺跡[百人委員会1973]でも追認している」と書いている（藤尾1990）。

註5　そのためには，現在長崎県立美術博物館に所蔵されている山の寺遺跡出土の古田正隆氏採集資料や，山の寺A地点出土土器を実測し，公表するなどの作業が急務と思われる。

註6　中島の「山の寺式（菜畑9－12層出土土器）」と山崎の「夜臼Ⅰ式」，それに「山の寺B地点出土土器」の位置付けについては簡潔に学史としての結論のみを記述しておく。

菜畑遺跡を調査した中島は，菜畑9－12層の土器が，山崎がいう「夜臼Ⅰ」式より古相の特徴をもつことから，菜畑9－12層

の土器群が山崎の「夜臼Ⅰ式」に先行するとした。さらに，菜畑９－12層の土器と山の寺Ｂ地点土器の共通性から菜畑９－12層の土器を「山の寺式」と命名した。森貞次郎は菜畑９－12層の土器群が古相を呈することは認めながら，浅鉢には相違がないことから，菜畑９－12層の土器も山崎の言う夜臼Ⅰ式の範疇でとらえようとした。 藤尾も同様の立場にたつ。

橋口達也は菜畑９－12層を古相と新相に分けて，曲り田（古）式を菜畑９－12層の古い土器に併行させて，夜臼Ⅰに先行するとしているので，中島と同じ立場にたっている。

要は菜畑９－12層出土土器は山崎のいう夜臼Ⅰ式より古いのか，あるいは併行するのかということになる。さらに中島が，菜畑９－12層の土器を山の寺遺跡B地点出土土器と同じであると認めて「山の寺式」と命名したことにより，今度は「山の寺遺跡B地点出土土器」が山崎のいう夜臼Ⅰ式より古いのか，併行するのかという議論にもなって，複雑な状況を呈している。

註７　原山遺跡出土の板付式土器について森は板付Ⅰ式としているが，小田富士雄は「板付Ⅱ式」とみているようである（大塚1973)。このことは宮崎貴夫氏より教示をうけた（宮崎1974)。

註８　本県でこれまで弥生前期土器について検討した仕事を列記しておく。宮崎貴夫は，宇久・松原遺跡の墳墓出土資料を使って編年をおこなった（宮崎1983)。萩原博文は，平戸市津吉遺跡の状況から，当該期の土器の特徴を提示した（萩原1986)。久村貞男は，四反田遺跡出土の土器を用いて，県北地域の板付式土器の出現の様子を明らかにした（久村1994)。五島列島では塚原博氏が笛吹遺跡の埋葬用土器群の編年をおこなった（塚原1997)。しかし，これらの地域は，幸いにも板付式土器が一定量出土する地域である。型式分類や編年が進んでいる板付式土器を援用することにより，在地土器の様相も把握しやすい。先述したように，島原半島や諫早市，大村市地域では，当該期の遺跡が少ないうえに，板付式土器の出土が希薄なため，前期土器の研究があまり進まないのが現状である。

註９　これまで最古の弥生土器の地位を保ってきた板付Ⅰ式土器は，北部九州における弥生早期の設定とともに，山崎の「夜臼Ⅰ式」や橋口の「曲り田（古）式」などにその座を奪われてしまった観がある。しかも現在，板付Ⅰ式土器はきわめて限定的に使用されている。山崎純男は「板付Ⅰ式土器の分布は北部九州，とくに福岡・早良平野に限られ，周辺地域には客体的な存在を示す」といわれる（山崎1996)。山崎は「板付Ⅰ式土器の存続（使用）期間は約30年前後」とみており（山崎1986)，福岡平野や早良平野に限られるという出土状況はその型式としての時間幅の反映ともいえよう。

これまで本県で板付Ⅰ式土器ないし板付Ⅰ式的な土器とされた資料には、対馬・峰町吉田遺跡出土土器，同じく井手遺跡出土土器，五島・宇久町宇久松原遺跡の1950年（昭和25）発見の小形壺（小田1970)，同遺跡第１号石棺内副葬小形壺（小田1970)，同遺跡５号甕棺内出土小形壺（宮崎編1983)，五島・若松町滝河原遺跡で1967（昭和42）に発見された小形壺（宮崎1996）などがある。

註10　対馬・壱岐および長崎市周辺は資料的制約から，本稿ではとりあげなかった。対馬の前期Ⅰ期の土器としては，峰町吉田遺跡，同町井手遺跡で出土している板付系土器がある。いずれも壺形土器，甕形土器など，日常使用される形式の組み合せからなる。吉田遺跡の貝層から出土した土器は，刻目突帯文系の壺や甕が多いが，板付系甕も含まれており，対馬でも最古の板付系土器の一群と考えられる。

一方，井手遺跡出土土器は，『対馬』で公表されている図面を見る限り，刻目突帯文系の壺や甕は含まれていない。甕形土器は無沈線の資料であるが，胴部に張りがある点や，口縁部の刻目が口縁端下半に施されるなど，板付Ⅰ式甕より新しい要素もみられる。1990年（平成２）の再調査では第７・８層から刻目突帯文系土器・板付系土器・朝鮮無文土器が出土しているが，板付Ⅰ式的な土器は発見されていない。最下層から出土した土器も板付Ⅱａ式土器であったという（下条1976)。

一方，壱岐地域では，前期Ⅰ期の資料が極めて少ない。公表されているのは，前期Ⅱ期の原の辻遺跡の板付Ⅱｂ式期のもののみである。

長崎市や西彼半島，野母半島を中心にする地域にも前期の良好な遺跡が存在する。長崎市深堀遺跡，西彼杵郡外海町の出津（しつ）遺跡などであるが，報告が十分ではなく詳細が不明である。わずかな報告からの推定であるが，県央・島原地域よりも，五島地域の土器様式に近いのではないかと思われる。両地域の類似性は縄文時代前期から続く傾向である。

註11　藤尾真一郎によって折衷系統と命名されたものである（藤尾1984)。橋口達也は夜臼系土器と呼ぶ（橋口1985)。

註12　近年，福岡平野を中心として出土する板付系弥生土器にたいして，周縁地域に分布する刻目突帯文系弥生土器の研究が大きく進展した。西健一郎や藤尾慎一郎はその研究の牽引者である。西は刻目突帯文土器が弥生時代前期にも主体となる肥後地方において，昭和50年代の後半より精力的に研究を進め，肥後地方の縄文晩期終末から弥生時代前期の土器編年を示した（西1982)。

藤尾はこれまで亀ノ甲タイプの甕として認識されていた刻目突帯文系弥生土器を再検討し，亀ノ甲Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式を設定して，それぞれ板付Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅱｃ式に対応するとした（藤尾1984b・1990)。

註13　報告書では，第11区から第16区より出土した弥生土器の一部を「壺」と報告しているが（報文の第40図81～86)，これらの土器は口縁部を肥厚させて刻目を施す甕である。

また，調査区は大きく４つの調査区からなるが，各調査区の土層の記載に統一性がなく，調査区ごとにばらばらであったり，土器がどの土層から出土したのか報告がなかったりと不十分な内容となっている。湧水のため分層できなかったことは理解できるが，分層できなければ土器の型式ごとの出現率や，刻目突帯文土器と板付系土器の構成比などを提示するなど，最低限のデータはだしてほしい。

土器の分類もおこなわれているが，これも各調査区ごとにばらばらで，統一されていない。

註14　県央・島原地域のなかでも，島原地域は前期の遺跡がきわめて少ない。宮崎貴夫は「(島原半島における遺跡の）規模の縮小化と遺跡数の落ち込みは（前期には）ピークにきて」いるとみている（宮崎1997)。宮崎は遺跡数の減少について，島原地域での水稲耕作への転換が順調に進まなかったのが原因ではないかと推定している。

【引用・参考文献】

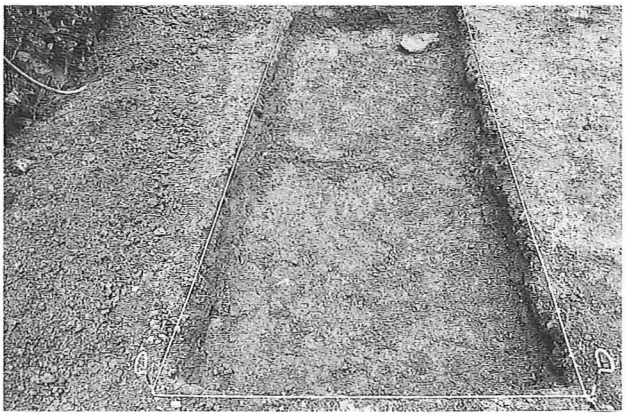
安楽勉編1992『里田原遺跡－町道里田原西線改良工事に伴う調査－』田平町文化調査報告書第５集 長崎県田平町教育委員会
稲富裕和編1980『黒丸遺跡』大村市・黒丸遺跡調査会
大塚初重編1973『シンポジウム弥生時代の考古学』学生社
小田富士雄1970「五島列島の弥生文化－総説篇－」『長崎大学人類学考古学研究報告』第２号
小田富士雄・佐田茂・橋口達也・高倉洋彰・真野和夫・藤口健二・武末純一編1974『対馬－浅茅湾とその周辺の考古学調査－』長崎県文化財調査報告書第17集 長崎県教育委員会
乙益重隆1965「九州西北部」『日本の考古学』Ⅱ河出書房新社
川瀬雄一編1994『小野宗方遺跡－市道宗方線交通安全施設整備事業に伴う発掘調査報告書』諫早市文化財調査報告書第13集 諫早市
清田純一1998「縄文後・晩期土器考－中九州の縄文後・晩期土器とその並行型式について－」『肥後考古』第11号 肥後考古学会
下条信行1996「井手遺跡」『原始古代の長崎県』資料編Ⅰ 長崎県教育委員会
高野晋司編1993『中江遺跡・上田井原遺跡』長崎県高来町文化財調査報告書第１集 長崎県高来町教育委員会
田崎博之1986「弥生土器の起源」『論争・学説日本の考古学』雄山閣
田崎博之1994「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会
田崎博之2000「壺形土器の伝播と受容」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
田中良之1985「長崎県山の寺遺跡」『探訪縄文の遺跡』西日本編 有斐閣選書R
田中良之1987「縄紋土器と弥生土器」『弥生文化の研究』雄山閣
塚原博編1997『笛吹遺跡』小値賀町文化財調査報告書第12集 長崎県小値賀町教育委員会
中島直幸・田島龍太編1982『菜畑－佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査』唐津市教育委員会
中島直幸1982「初期稲作期の凸帯文土器－唐津市菜畑遺跡の土器編年を中心に－」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上巻
西健一郎1982「斎藤山遺跡出土刻目突帯文土器の再検討」『九州文化史研究所紀要』第27号 九州大学九州文化史研究施設
西健一郎1983「下江津湖湖底遺跡出土刻目突帯文土器の検討（一）」『九州文化史研究所紀要』第28号 九州大学九州文化史研究施設
西健一郎1985「下江津湖湖底遺跡出土刻目突帯文土器の検討（二）」『九州文化史研究所紀要』第30号 九州大学九州文化史研究施設
萩原博文1986『津吉遺跡群発掘調査報告書』平戸市教育委員会
橋口達也1985「日本における稲作の開始と発展」『石崎曲り田遺跡』Ⅲ 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集
久村貞男編1994『四反田遺跡』佐世保市教育委員会
日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会1960「島原半島（原山・山ノ寺・礫石原）および唐津市（女山）の考古学的調査」『九州考古学』10九州考古学会
福田一志1999「西北九州における縄文後期遺跡の特性－土器分布・石器を中心として－」『西海考古』創刊号 西海考古同人会
藤尾慎一郎1984a「２．弥生時代」『諸岡遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集
藤尾慎一郎1984b「弥生時代前期の刻目突帯文系土器－亀ノ甲タイプの再検討－」『九州考古学』第59号
藤尾慎一郎1990「西部九州の刻目突帯文土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第26集 国立歴史民俗博物館
古門雅高編1995『国崎遺跡Ⅱ』南串山町文化財調査報告書第３集 長崎県南串山町教育委員会
古田正隆編1973『山の寺梶木遺跡』百人委員会埋蔵文化財報告第１集 百人委員会
町田利幸編1996『黒丸遺跡Ⅰ－都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書－』長崎県文化財調査報告書第127集
宮崎貴夫1974「弥生時代文化成立過程の研究序説－とくに九州地方を中心として－」未発表
宮崎貴夫1983「宇久松原遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ』長崎県文化財調査報告書 第66集 長崎県教育委員会
宮崎貴夫1997「原始古代の島原半島」『原始・古代の長崎県』資料編Ⅱ 長崎県教育委員会
森貞次郎1962「原山遺跡」『九州考古学』14九州考古学会
森貞次郎1963「長崎県南高来郡山ノ寺遺跡」『日本考古学年報』
森貞次郎1982「縄文晩期および弥生初期の諸問題」『末盧国』
山崎純男1980「弥生文化成立期における土器の編年的研究－板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合－」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
山崎純男1986「層位学的方法」『季刊考古学』第17号 雄山閣
山崎純男1996「板付Ⅰ式土器」『日本土器事典』雄山閣
山崎純男・島津義昭1981「九州の土器」『縄文文化の研究』４ 縄文土器Ⅱ 雄山閣
弥生土器研究会編1984『弥生土器研究会－長崎県の弥生時代初頭前後の土器の検討－』

図　　版

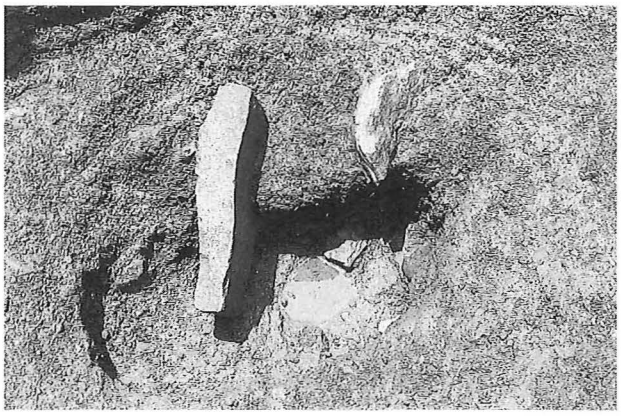
（桐古里遺跡）

桐古里遺跡遠景

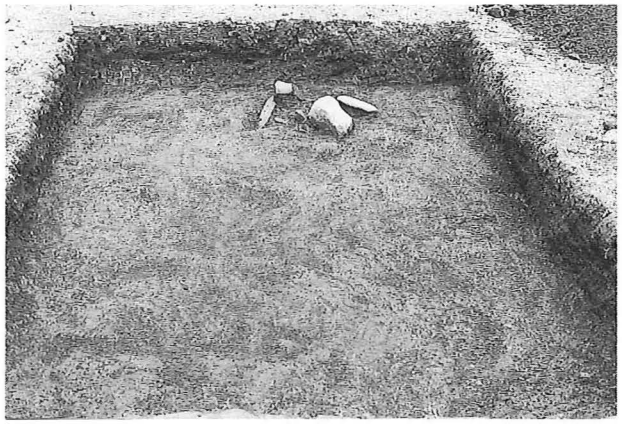
第 4 試掘坑遺物出土状況



第 1 試掘坑

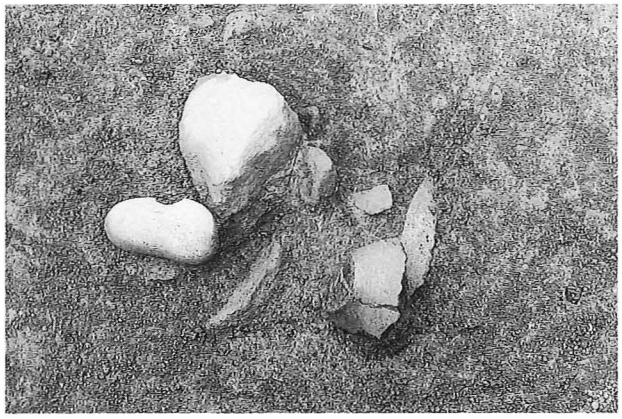


第 4 試掘坑の土坑



第 2 試掘坑

貝塚推定地

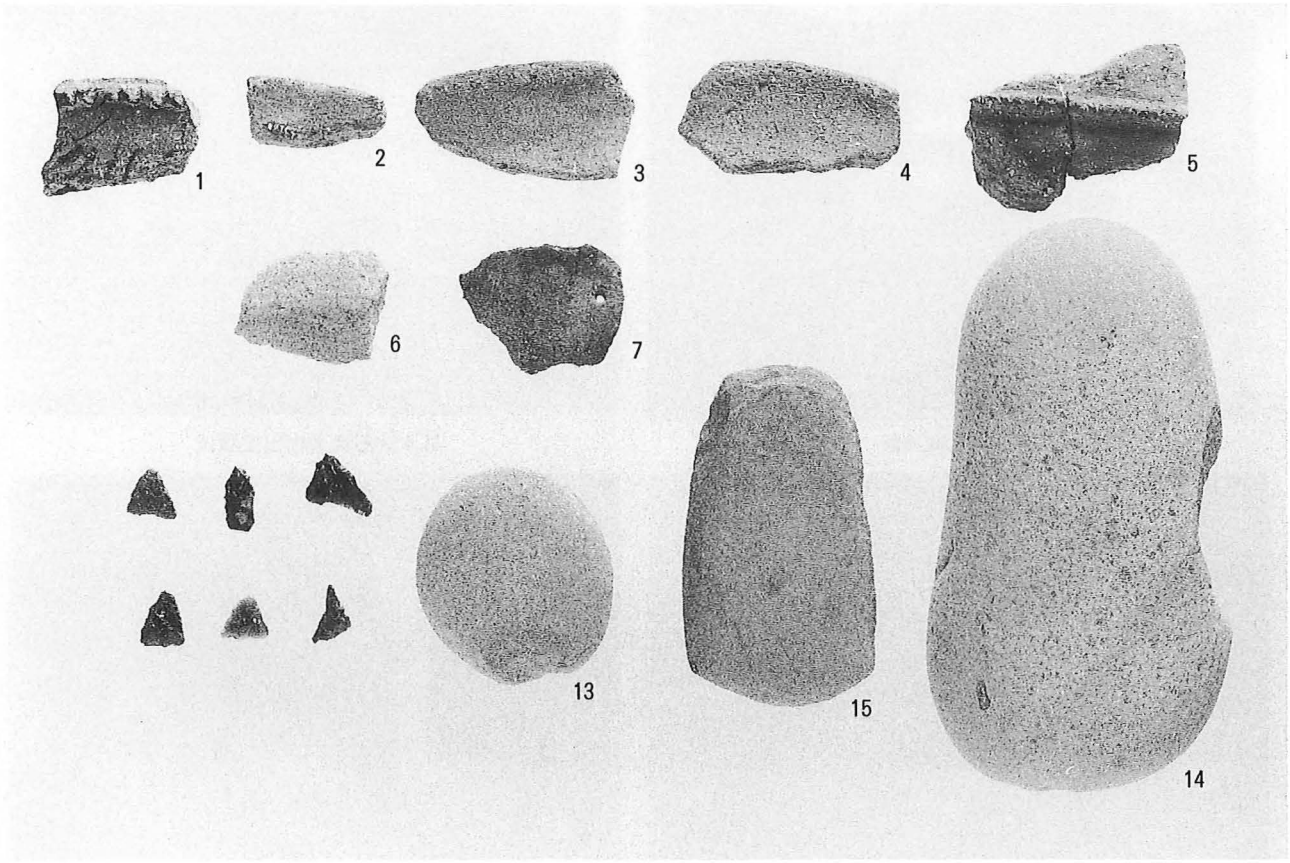


第 2 試掘坑遺物出土状況

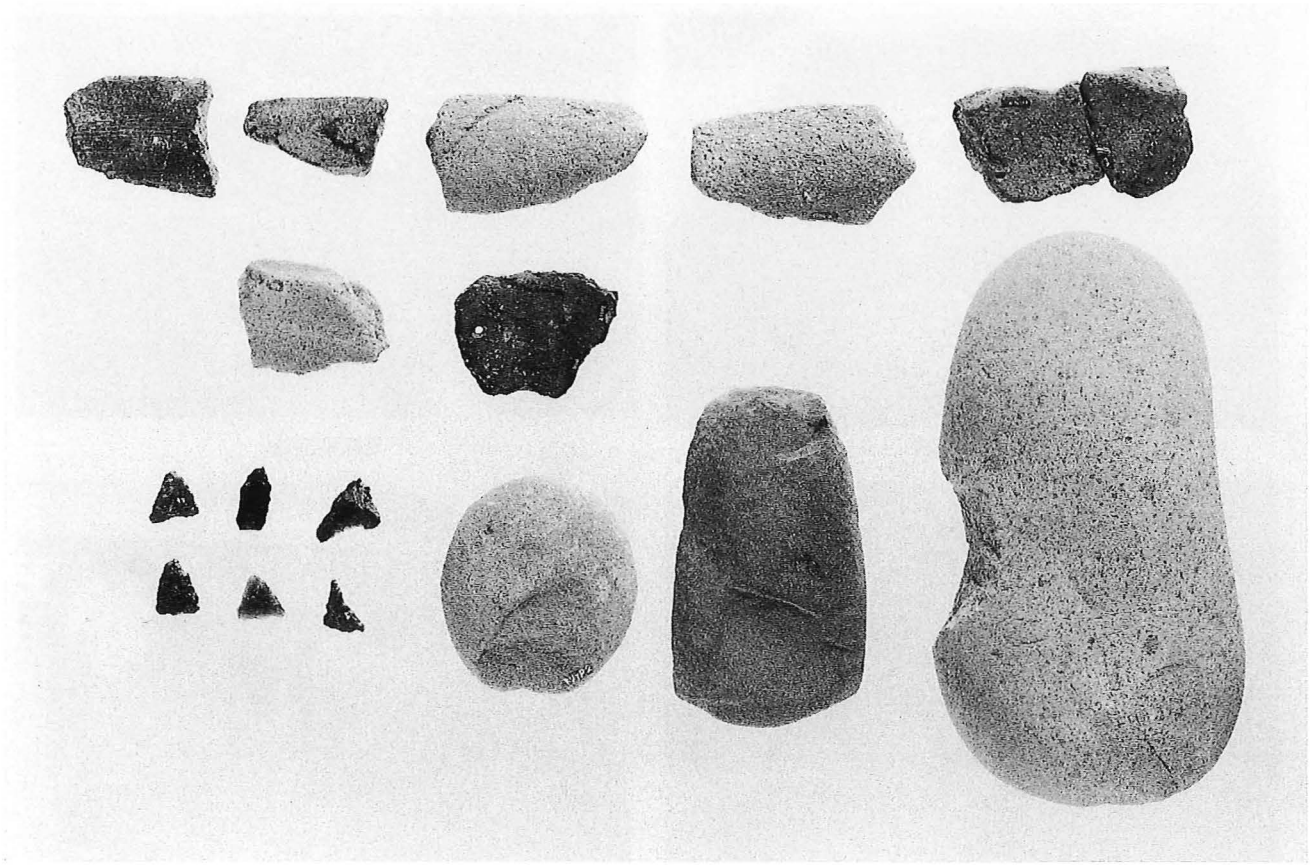
桐古小学校生の見学風景

図版 2

表



裏



報告書抄録

ふりがな	けんないしゅよういせきないようかくにんちょうさほうこくしょ
書名	県内主要遺跡内容確認調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第159集
編著者名	古門雅高・本田秀樹・中村　幸・尾上博一
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570　長崎県長崎市江戸町2-13　　TEL095-824-1111
発行年月日	西暦2001年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
一野遺跡（ひとのいせき）	長崎県 南高来郡（みなみたかきぐん） 有明町三之沢（ありあけちょう）	361	22	32° 49′ 35″	130° 49′ 35″	1999/11/15 ｜ 1999/12/10	156㎡	主要遺跡内容確認調査
桐古里遺跡（きりふるさといせき）	長崎県 南松浦郡（みなみまつうらぐん） 若松町 桐古里（わかまつちょうきりふるさと）	406	9	32° 03′ 01″	129° 03′ 01″	1999/6/21 ｜ 1999/7/2	30㎡	主要遺跡内容確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一野遺跡（ひとのいせき）	包含地	縄文早期	集石遺構	縄文土器 石器	
桐古里遺跡（きりふるさといせき）	包含地	弥生前期	土坑	弥生土器 石器	

長崎県文化財調査報告書　第159集

県内主要遺跡内容確認調査 Ⅳ

平成13年３月30日

発　　行　　長崎県教育委員会
　　長崎市江戸町２－13

印　　刷　　川口印刷株式会社
　　長崎市田中町1027－７